
Seed **発芽の物語**

ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Seed 発芽の物語

【Nコード】

N1755V

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

シンオウ地方のジムバッジを七つ所有するノブオは、アナトリア地方からやってきた新米トレーナーのアスルと出会う。ひよんなことから二人は共に旅をすることになった。アスルはトレーナーとしての成長のために、ノブオは内に秘める目的のために。

プロローグ（前書き）

S
e
e
d

英単語の一。
種や種子を意味する。

ブローグ

晴天、炎天の下。おれのギャロップがそこら一帯の石畳の上を駆けまわる。

いくら夏のコトブキシティとはいえここまで暑くなるのは異常であつて、故にギャロップは攻勢に転じれないでいる。

石畳の表面温度も高い。底が薄くなつた靴からも分かるのに、なぜこの熱で敵対するキマワリはぶつ倒れてくれないんだ。まわりの人間だつて、これが決勝戦だからよく応援できるくらい弱っているのに。

「いいぞキマワリ、焦らずじっくり狙え！」

対戦相手の快活そうな短パン小僧が声高らかに指示をする。それから間もなく、何かの衛星砲よろしく黄色の太い光条が上空からギャロップめがけて降り注ぐ。湧き上がる歓声。いや、悲鳴か？

しかし高速で不規則に駆け巡るおれのギャロップにはかすりもしない。元から熱せられた石畳が光条によりさらに熱せられ、これとは別の破壊力ではじけ飛んでいく。安全な場所から悲鳴が数人分。気が散るから黙ってくれよ。

光条の半径は一メートル弱といったところか。これを含めて九の焦げ跡が　そこまで思考を巡らせ、おれはこれを見逃さなかった。「反転、反撃しろ！」

黄色の光条から逃げ回るギャロップにはこの好機は映つてはいない。身体を観察すれば分かる。

ギャロップの急転換、キマワリに向けての突撃と自身の炎上。一気にカタをつけないといけないのはこいつもよく分かっている。動きがランダムではなく一直線のものになっているのはそのためだ。「当てる、ソーラービームッ！」

相手のトレーナーが素早く指示をする。そんな事はキマワリだつて分かっているだろう。だが

「どうした、どうして撃たなァッ!？」

もう弾切れなんだよ。見るよ、そいつもう荒く息してるじゃねえか。

自分のポケモンが同じ技をどれだけ使えるかはきちんと把握しなくてはならない。これを怠っていないにしても、残弾数は把握しなくてはならない。

それに、キマワリ種特有の特性「サンパワー」のデメリットを考慮した作戦とは言い難い。

事前にポワルンににほんばれを使用させ、ただでさえ暑いコトブキの一地帯　つまりはここ、ポケモンセンター「セントラル」前の広場だ　をクソ暑くさせてキマワリに交代するまではいい。

日差しがかなり強い天候にて発動する特性「サンパワー」による、良性回路干渉因子の分泌により、ソーラービームの破壊力を高めるのも悪くはない。問題は「それしか相手の打つ手がなかった」ことだ。

烈火に身を包んでキマワリに突撃したギャロップは、キマワリの体を吹き飛ばしていく。バトルフィールドを囲う観客の歓声。うるさい、気が散る。

ギャロップは突撃　フレアドライブという名の、高威力かつ反動の大きさからダメージを受ける諸刃の剣　の反動によってふらつき、その体を横たえてしまう。仕方がない、まぐれとはいえ一度キマワリのソーラービームを頭に喰らっているのだから。

しかし、まだまだいけるぞとでも言いたげに、荒々しい鳴き声を小さいながら漏らしている。

一方、身体の一部を炎上させつつ吹き飛んだキマワリには、もはや戦闘を続けるだけの余力が残されていないらしい。当然だ、おれのギャロップのフレアドライブをもろに喰らっておいて立ちあがれる草タイプのポケモンなんているはずがない。

短パン小僧は、既に自己治療かなにかで燃え上がっていた身体の消火を終えていたキマワリを戻す。その表情は悔しそうに歪んでいる。

るのが手に取るように分かった。

この場合だとタイプ相性を顧みれば威力は落ちるものの、サンパワーにクソ暑い日差しが加わればソーラービームの連射は夢ではない。

威力、弾速共にハイレベルなこの技の欠点は連射が効かないことにある。これを解消する条件が異常な日差しの強さであり、さらにサンパワーが自らの体力を削りながら良性回路干渉因子を分泌するギャロップがもう一発喰らっていれば、そこで一巻の終わりと云えただろう。もっとも、おれにはもう一匹のポケモンが残っていて、こいつでもキマワリを倒すのは簡単だから、そこまで大げさに言うほどでもない。

命中精度を上げるためにソーラービームを花の顔面からではなく、何らかの訓練の過程の末に上空からぶっ放すとは、このキマワリ単体で言えばなかなか良いポケモンだといえる。

これのもつ力を引き出してやるのが良いポケモントレーナーであることはいわずもがな、である。しかし、この相手のトレーナーでは力量不足だと言える。何故なら

「ごめんなあキマワリい、なるべく早くポケセンに連れてってやるからなあ」

顔をどうにか穏やかなものに戻しつつ、左手に握るモンスターボールの赤いトラクタービームをキマワリに打ち込みながらそんな甘いことを言っているからだ。

甘すぎる。敗北の責の九割方がこの短パン小僧にあるとしても、それでも厳しい態度を取らなくてはならない。そうでなければポケモンは安堵し、トレーナーを舐めくさり、あらゆる面で弛緩するようになってしまう。

……だが、これでいい。トレーナーとして大成するための道を歩くには、そんな助言をくれてやる必要はない。

おれは自力で立ちあがろうとしているギャロップをモンスターボ

ールに戻しながら、バトルフィールドの中央に歩み出る。石畳の上には計九ヶ所の焦げ跡。その一つ一つの大きさから、あのキマワリの優秀さを改めて感じ取る。

「この勝負は楽しかった……良いポケモンを育てているな」

「どうしたよ、そんなにやけて。普通に笑えばいいよ。ま、同じ夢を目指す者同士、頑張っていくべ」

おれよりも少し背の低い短パン小僧は左手を差し伸べる。なかなか愛嬌のある顔だった。

にやけている、か。無理もないだろう、自らの夢への道を妨害する可能性がこれで一つ減ったことを確信したのだから。

「ああ、お前はその甘いやり方で上を目指せばいい」

「甘い？ それってなんだ、舐めてるのか？」

「いいや。大歓迎だ、そういうのは」

おれは左手で相手の手をとる。その瞬間、観客達の歓声の中にひととき大きな、エコーがかかって増幅されていると分かる声がかかるのを聞く。相手の顔に無邪気な笑顔が浮かぶ。こいつ馬鹿じゃねえのか。

「ただいま、コトブキシティ杯ジムバッジセブン部門優勝者が決定しましたあ！ その名は……ミヤモト・ノブオオツ！！」

うるさいと思いつつ、ドラムロールの一つもないのはどういう了見だと、矛盾した突っ込みをかます。勿論、口には出さずに。

コトブキシティ杯という題目のポケモンバトル大会に出場した理由は、おれがどれだけ実力をつけたかを確認するためのものだ。

カントーのオーキドという名のポケモン研究者が、ポケモンの技に関連する新発見をしておよそ二年。おれは新発見より少し後に、あることを成すと決めた。

知識面においてポケモンバトルでのアドバンテージを握ることだ。

そのために二年もミオシティの図書館に入り浸っていた。

元よりおれのトレーナーとしての技量とパートナーの実力は釣り合っただけだが、これでは不十分だ。知識面で劣っていれば、いつかはそこをつく相手が現れるだろう。

コトブキシティ杯の、ジムバッジを七つ所有しているトレーナーが参加資格を有するジムバッジセブン部門。なかなか強敵は多かったが、とりあえずは勝っている。

大勝利とは言えないが、及第点とは言えるだろう。現に、先の決勝戦ではマニニューラを残して勝ったのだから。

二年も図書館づけになっていたのはもう一つ理由がある。落ち着きを得るために本を読み続けたのだ。

本を読めば落ち着いた心を手に入れられるわけでもないが、二年前より前のおれは今思い起こすだけでも恥ずかしく、そして殺してやりたいと思うほどに悪びれた人間だった。

深く反省するための時間が欲しかった。おれは自分のポケモンに酷い仕打ちをしてしまっただけでもポケモン達はおれの事情を踏まえてついてきてくれている。

あの時をきっかけにやっと気付けたんだ。自分を満たすためにポケモンを酷使するのがどれだけいけないことかって。

既に太陽は西に傾き、空には星がぼつぼつと見え始めている。影が東に薄く細長く伸びていて、もっと先へ伸びていくぞとおれの影が囁いている気がした。

座る者が東を向くように置かれた、簡素な木製のベンチに腰掛けてからのくらの時間が経っただろう。

あの大会が終わったのが二時、質素なトロフィーを宅配便におしつけて、セントラルでとっている部屋で昼寝をして。それから散歩に出てテレビ塔の近くにあるベンチに腰掛けている。

上を見上げれば、塔が現在の時刻をデジタル掲示板で示している。

18:49と、黄色の電光は告げていた。

そろそろセントラルであてがわれた部屋に戻ろう。明日は早くここを発たなければ。八つ目のジムバッジを得るためにナギサシティまで行かなければいけないのだから。

「……いよいよ大詰めのはじまりか。早いとこ寝て、調子を整えねえと」

おれは腰のベルトにつけている小さなサイズのモンスターボールの一つを手取る。ギャロップが収められているボールだ。

このボールを手取る度、おれは途轍もない罪悪感にさいなまれる。いや、それはおれが持つどのボールを持ってもそうだ。

こいつらには本当にひどいことをしてしまった。おれのわがままに付き合ってくれたのは嬉しいけど、昔のおれはこいつらに甘え過ぎていた。

それにしても少しばかりじめじめしてやがる。こういう湿った空気がノモセだけで十分だったのに。

これは口に出さないでおこう。もしもここにノモセシティの出身者がいれば、おれはそいつに喧嘩を売ることになる。

だが、本当に暑いものは暑い。寒冷な気候であるとされるシンオウ地方だが、季節には勝てないらしい。

北部なら涼しいか寒いかのどちらかだろうが、この地帯だと冷気が回ってこないようだ。

街のビルの明かりや街灯が点き、ビルに内包される飲食店の看板がライトアップされ、いかにも夜の街であるようにコトブキシティの市街地が立ち振る舞っている。

そこを車やバイクのエンジン音や、人々の笑い声や時々怒鳴り声などの喧騒が埋め尽くしていく。いかにも都会って感じた。

「ヘーイ、タクシーッ！」

どこか平和を感じさせる喧騒の中で浮いている声が聞こえた。その声はおれの前の方から聞こえている。

やや高い声だけを聞けば、それが女のものであるらしいことは分かったし、黄色いスポーツカーに向けて両手を挙げつつタクシーと連呼している変な格好をした人間を見れば、確かに女だった。

頭には白い布を巻いていて、服は……少し暗くてよく分からないが、絨毯の模様をそのままトレースしたような、ゆったりとしたものだ。下も同じような柄の、ゆったりとしたロングスカート。季節を顧みれば間違った服装だと断言できる。

「あれー、なんでドアが開かないの？」

それはタクシーではないからだ。

「……なんか、車の人に笑われてる？」

「そりゃあそうだろ、その車はタクシーじゃねえし」

あまりにも滑稽な光景だから笑いを隠しきれないながらも、おれは近づいて教えてやることにする。

女は目を見開いて振り返りながら小さな悲鳴を上げる。そこでおれは面倒な事実に気付いた。

ああ、この女 いや、少女と言うべきか は遠い地方の出身者らしい。ろくに肌を露出していないが、まともに見せている顔だけを見れば分かった。

大きな丸い目に高い鼻、形のよい口。活発な印象を与える輪郭や少女が醸し出す雰囲気、やや濃いながらもそこそこかわいいなという印象を抱いた。

「黄色い車ってタクシーじゃないの？」

「どう見たって少し値段が高いスポーツカーだろ。大体にしてタクシーなら、客を助手席に座らせるか？」

そこでようやく少女は納得がいったらしい。黄色い車に頭を下げ、しかし軽快なクラクションを短く鳴らしたドライバーは車を北の方へと走らせて行ってしまった。

それを見送った少女は小さくため息をつく。おれはその残念そうな吐息を見逃さなかった。

「タクシーに乗ってどこへ行こうとしていたんだ？」

「セントラルってポケモンセンター。私は今日、そこでお泊りする予定なんだ」

偶然の一致と言うには母数が少ない確率だ。そうかあなたもですか、セントラルは大きいですね。なんて言葉が浮かぶ。

「おれもそこに用があるんだ。でも、タクシーなんて呼ばなくても歩けば二十分程度で着くの」

「恥ずかしい話だけど、この街に来たのは初めてなの。あまりにも大きくて広いから、迷っちゃって。それに私、方向音痴だし」

見れば、左手に何か地図らしき紙を握っているのが分かる。くしやくしやになってしまったそれは、彼女にとって意味を成さないものだったのだ。

「ここから北に歩けばいいんだ、簡単さ」

方向音痴に北と言ってもどこか分からないに違いないから、おれは右手で少女の小さな左手を取る。

「え？」

「道案内だよ。そろそろ暗くなるし、あまりケースが無いとはいえ、女の子の一人歩きは物騒だからな」

「ありがとう。でも、もっと人を信用した方がいいと思うわ」

薄暗がりの中でも明るい笑顔と分かる表情を浮かべながら少女は言う。信用ねえ……

きつとこの少女は人を疑う事を知らないのだろう。それは幸せなことであるし、同時に不幸せなことでもある。

「私もあなたを信用しているもの。セントラルまでよろしくね」

「あ、ああ……」

まっすぐなまなざしが痛い。こういう手合いは苦手だ。

「そうだ、自己紹介が遅れたわ。私の名前はアスル。アナトリア地方の出身よ」

「アナトリアって……かなり遠いなんてものじゃないよな。いや、名前しか知らないけど。おれの名前はノブオだ」

「うんうん、ノブオね。それでね、二年前にシンオウにやってきた

の。言葉も文化も違うから、慣れるのに凄く時間がかかった。少なくとも二年間はこちらの地方のことについて学んでいる事になる。その七割は言語についてなのだろうと勝手に予測を立ててみる。

「アスルのこっちの言葉は、片言でもないしイントネーションもばつちりだし、凄いな」

「そう？　ありがとう」

「でも、どうしてこっちに来たんだ？　ああほら、何のために言葉や文化を学んでシンオウにやってきたのだった」

歩いてセントラルに着くまでは十分と少しの時間がかかる。しばらくとはいえ、誰かという時間を無言で過ごすのはきつい。

「それはね、アナトリアではポケモンについて学べないからよ」
「はあ？」

「力を持つものにはそれ相応の資格がなければならない。そういう標語みたいなものがあるんだけど、アナトリアではシンオウとかカントーとかのように、多くの人がポケモンを持てないの」

アスルの言葉を聞いたおれは、もしもこのコトブキの殆どの人間がポケモンを所有していない架空の世界を想像してみた。だめだ、なんか気持ち悪い。

「アナトリアでは……ほら、ジムバッジをくれる施設があるでしょう？」

「ポケモンジムか」

「そうそう、それぞれ。ジムもないし、基礎的なことを教えてくれるトレーナーズスクールもないの」

仮想の世界がいよいよもって異世界の様相を見せてきた。

「……と言うとね、みんな驚くわ。本当にそんな場所があるのって」
「それでアスルはわざわざシンオウまで来て、ポケモンの事情に踏みこみたかったわけか……」

そのために言葉や色んな事柄を学ぶ　凄いい執念だと感心せざるを得ない。

「だって数少ない人だけがポケモンと触れ合えてるってずるいと思わない？ だから、アナトリアにも同じような、ポケモンに関連するシステムを作りたいなって思ったんだ」

「おっ、凄い夢だな……」

「そのためにはまず、私がポケモンと触れ合わなくちゃいけないのは分かっているわ。本音を言くと、ポケモンと楽しくやりたいから旅をしたいんだけどね。それで、少し前にワカバタウンから旅を始めたの」

手は貸せないが応援はする。そんなことを返していると、おれの頭にある疑問が浮かび上がった。アスルはもしかしたら、もしかすると……

「そついえばさ」

「なあに？」

「アスルの家ってお金持ちだったりする？」

「うーん、よく分からないけど、私の住んでたアンキュラって街のなかではそれなりに裕福だったみたい」

それなりどころじゃねえ。よくよく考えてみる、親元離れた子どもを一人遠くの地方に飛ばすつてのでも金にかかるし、親離れするにも仕送りだなんだで金がかかる。それにその服、高級絨毯の模様をトレースした感じじゃないか。ええ？

「でも、私はそういう家のことをあまり知らないんだ」

おれが適当に相槌を打つと、右手から何か争っているらしい物音が聞こえた。

何かがぶつかる音と、誰かの怒声。裏路地の先でトラブルが起きたようだ。

訝しがりながら様子を見ると、路地裏の切れ間の左から一匹のポケモンが飛び出て来た。いや、吹き飛ばされたつてのが正しい。

続いて一つの人影が吹き飛んだポケモンと同じルートを歩いて現れ、そして消えた。

暗くて服装も顔立ちもよく分らないが、あの野郎はポケモンに暴力を振るっているらしい。

「ちよつと待つてて」

「ん？」

「あの人に文句言つてやるわ。ポケモンはサンドバッグじゃないってね」

アスルは狭い路地裏を抜けるべく、自分の服を両手でつまんで歩きだす。

「ここはおれに任せてくれ」

「え？」

「こういうのに女の子を巻き込むわけにはいかないからな」

アスルを裏路地の入口からどかして、いつものコトブキとは違う空気を感じ取りながら先を進んで行く。アスルが不満そうな顔を浮かべていたが、まあ仕方がない。

裏路地は十字路になっている。なるほど、これならポケモンも人影も現れて消えるわけだ。

それに、十字路を右に曲がれば人影が自分よりも小さなものに怒鳴りながら蹴りをかまし続けているのが分かる。

暗いからよく分らないが、この人影はどうやら男らしい。年齢はおれと同じくらいか。深紅色の布地に白いチャックが入っているシャツと、暗がりに同化した黒のスラックスという出で立ちのようだ。

黒い靴でポケモンを蹴るのに夢中でおれのことを気付いていないらしい。蹴られているのはピカチュウだ。

「てめえが！ あそこで！ 下手をうたなきや！ 勝てたんだよッ！」

どれだけ蹴りをかましたのか、ピカチュウは抵抗するそぶりさえ見せない。

この光景に見覚えがある。これは、こいつは、こいつらは、あの頃のおれ達とそっくりじゃねえか！

「やめろッ！」

少年のシルエットがびくりと震え、しかし俊敏な動きでもっておれに詰め寄ってくる。

「なに？」

「それをやめると言っている！」

「あんたにや関係ねえ、すっ込んでろ！」

瞬間、おれの目の前が真っ白になって、別の映像が見える。

エイパムの鼓膜を破る勢いで怒鳴る。ビツパを顔面がつぶれる勢いで殴る。ポニータを背骨を折る勢いで鉄パイプで打つ。ムツクルの羽根を掴んで思い切り地面に叩きつける。ブイゼルの頭を砕く勢いで踏む。ニユーラの腕を折る勢いで蹴る。

そうだ。これは、これはおれがやったことだ。おれが激昂して、自分のポケモンにやった仕打ちだ。

「これ以上見苦しいものを見せるんじゃないやねッ!!」

いつの間にかおれは少年の襟首を両手で絞め上げていた。

手は少年の喉の震えを感じ取り、急いで両手を解放する。

「ひっ……」

首を絞められてか少年は目に涙を浮かべ、そして乱暴にピカチュウを拾い上げて路地裏を去ってしまった。

いつの間におれの手は奴の襟首に伸びたんだろう。まさか本当に殺してやりたいと思ったのか？ あ頃のおれを殺したいと強く思うのと同じように？

アスルが待つ場所に帰ろう。あの野郎は全然大したことなかったぜ、襟首を持ち上げたら泣いてとんずらこきやがった。冗談めかしてそんな話をしてやろう。

そう思っていたのに、おれが見たアスルの表情は笑顔などの類ではなかった。実際はその逆の、怯えを見せている。

「な、なんだよ。おれが何かしたか？」

「だってノブオ、とても怖い顔をしてる」

言われて初めて気がついた。誰だって何かを殺したいと思えば、人を怯えさせるのに不足のない表情を浮かべられる。

「いいや、角度の問題だろ」

にっと笑顔を浮かべてやる。

不自然なものになったのはおれが一番よく分かっている。でも、この場をとり繕うには何をしたらいいんだ？ 姑息だとしても、作り笑いの一つをやるのは常套手段だろ？

セントラルとそれの前に位置する広場が見えた。修復作業は既に終わったのか、広場のポケモンバトル大会による被害や損傷が消えてしまっている。

セントラルは三つの建物からなる大きなポケモンセンターだ。おれやアスルはポケモンセンターとして機能する中央棟に用がある。

西棟と東棟は大型のショッピングセンターとして機能しているが、全くと言っていいほどおれには関係がない。

おれ達の他に人はあまりいない。広場でポケモンバトルをする者も、危ない喧嘩をする者もない。

それもそうだ。外はじめじめして暑いつてのに、快適な屋内にこない方がおかしいよな。

「ついた！ ノブオのおかげよ、ありがとう！」

アスルは嬉しそうな声を上げ、握っていたおれの手を両手で包んできた。

「そりやどうもな」

「そういえば、ここってポケモンバトルの大会をやった場所なのよね」

両手を離し、ゆっくりと辺りを見回しながらアスルは呟く。

「確か、今日はジムバッジを七つ持っている人の大会だったのよね？」

「そうそう。で、おれはその優勝者」

努めてなんでもないことのように言ってみる。するとアスルの目と口が大きく開いた。

「ええ、本当！？」

「本当だつて。トロフィーは別のところに送ったから無いんだけど……表彰状を用意してないんだよ、大会の運営側がさ」

「ノブオって凄いのね。だって、バッジを七つも持っていると言えはかなりできるトレーナーなのに、そのなかでのトップなんでしょ？」

まあなと答えようとして口を開けなかった。アスルの様子がおかしくなつたからだ。

身体の動きが一瞬止まり、それから何かを考え込むようなしぐさをして。その間、おれはアスルは悪いことが出来ないだろうなと予想をつけていた、大きく首を縦に振る。

「どうした、なにかあつたか？」

「ねえノブオ。あした、七時なつたらここに来てくれる？」

「別に構わないけど、何か用事があるのか？今は言えないとか？」

冗談交じりで尋ねてみると、アスルは真剣な表情を浮かべながらもう一度大きく首を縦に振った。

「ごめんね、変なこと言っちゃつて。……あした、また会いましょうね」

小さな声でアスルは残し、先にセントラルへと駆け出していく。

もしもアスルが外道がやりそうなことを考えていたとして、おれにはそれを責める理由などない。おれだって他人から見れば酷いと思う考えを腹に抱いているからだ。

しかし……アスルは何を言おうとしたのだろうか。アナトリアのトレーナー。頭には白い布、上下ともゆつたりとした大きな服を着た、露出を控える女の子。

あれからどれだけ時間が経っても、アスルはおれの頭の中から消えなかった。その他大勢の人間として処理できない。なんだか面倒なことになりそうだ。

プロローグ（後書き）

どうも、作者のゆうです。Seed 発芽の物語 をお読み頂き、ありがとうございます。

このお話はハートフル農業物語でもなんでもありません。こういう雰囲気に進むポケモントレーナーのお話です。それも、奇抜な展開などを控えた、落ち着いた読んで読めて、それでいて面白いなと思えるようなお話ですね。

プロローグはこれで終わり、次話からお話の本筋に乗っていきます。お楽しみください。

出立 ノブオとアスルの二人旅の始まり

最後に時計を見たのは、アナログ式の小さな壁掛け時計を見た時だ。

六時五十分。セントラル前広場に歩いてついた時間を顧みると、今は七時五分前といったところだろう。

昨夜、アナトリア出身のポケモントレーナーであるアスルという名の少女と待ち合わせをする事になってしまった。

確か彼女は「明日の七時」と言っていたが、まさか夜の七時なのだろうかと思いを働かせてしまふ。あつちから話をもちかけてきたんだ、おれより先にいて当然だろうに。

おれは肩に提げている小さな旅行用バッグを見つめる。この中には着替えやら野宿の準備やらといったものが詰められているので、外見以上に重いのだ。だからおれはこれをそつと降ろすことにする。近くに立っていれば盗まれる心配はない。

そこまで考えたおれの頭の中にあの言葉が蘇る。

ありがとう。でも、もっと人を信用した方がいいと思うわ

アスルはきつと、どこかに荷物を置いて放置しても誰かに盗まれるなんて想像もしないに違いない。

空はもう青色を見せている。雲の一片もない快晴。早くから容赦なく陽光が頭を焼いていくのが分かる。気温はどのくらいだろう、25度以上はマークしているはずだ。

だとするとアスルはもうあんな恰好で外に出るはずがない。一番の身体的特徴と言えば、あのゆったりしすぎた厚い服装だが、あれが唯一のアイデンティティだと彼女は考えてはいないだろう。他の服だって持ち歩いているはずだ。

おれだって割と薄い白のズボンや白のシャツを着ているんだぞ。白色って、熱を溜めこまないらしいからな。そこでおれは頭をコツンと小突かれたような衝撃を覚える。

どうしておれはアスルを心配することばかりを考えているのだろう。好意があるとかそんなつもりはないし、大体にして人付き合いも多くは持たないように心がけている。

おれが目指しているのはポケモントレーナーとしての大成と、声を大にしては言いにくい目的であって、誰かを気にかける余裕は持ち合わせてはいないってのに……

「ごめんねー、私から待ち合わせようって言ったんだけどー！」

セントラル中央棟の正面入口の自動ドアから、昨日と同じような服装のアスルが小走りでこちらにやってくる。左手には淡い青のスーツケースをころころさせ、頭に軽く巻いた白い布をなびかせていた。

「いや、おれも少し前にやって来たばかりだ」

これは嘘ではない。おれがここに来たのは二分ほど前だから、別にとても長い間待たされたわけではない。

「私、寝坊しちゃって。それで急いで来たんだけど……ね、お願いがあるんだ」

「そのための打ち合わせだったよな。なんだ？」

アスルのかわいらしい顔に真剣さが宿る。大きな丸い目には確かな意思が、高い鼻や整った口には覚悟が見えた。そんな気がした。

「……ノブオと一緒に旅をしたいな」

再び頭に衝撃。今度はバットで頭を吹き飛ばされたような衝撃だ。
「あ？」

「だってノブオはバッジを七つ持っているんでしょ？ それってとても強いってことだから、一緒についていけばトレーナーとして強くなれるかなって」

ふざけて言っている様子ではなかった。アスルは大真面目に言っているのだ。

「無理だ。おれの旅の支障になるし、アスルの旅の支障にだってなるよ」

「私は全然邪魔にならないわよ。ああでも、ノブオの邪魔にはなる

のね？」

「……まあ、そういうことだ」

言われ慣れた経験のない言葉を向けられてか、おれはきちんと自分が発言したかどうか怪しいくらいに気の抜けた返事をしてしまう。

だめだ、アスルのことがどうしても気になって不安で仕方がない。

「そういうことなんだが……むむむ」

「ん？ どうしたの、どこか痛い？」

「いや、そういうわけじゃないんだが……」

おれが支障だと感じた理由は、スムーズにナギサシティへの到達が出来ないからだ。

だが待て、焦って到達したからといってどうした。それがどういう結果をもたらす？ おれの夢は、達成するのに時間がかかる。目的地到達が数日遅れたくらいで何も変わりはない。

「……さっきのは取り消した。おれはナギサシティに行きたいから、そこを目指すルートを歩くが、それでいいなら」

おれが最後まで言わない内に、嬉しそうな大声を上げてアスルは右手を空高く突き上げていた。

感情表現が激しいのは良いことだが、周りの注目を浴びるまねをするのはやめてくれ。ほらみる、そこら辺歩いてる通行人がくすくす笑ってやがるぞ。

「よし、それじゃ早くいきましょ。善は急げっていうじゃない」

「急がば回れとも言っけだな。ま、回り道をする必要はないからちよつと違うな。とりあえずコトブキの東に出る。その後でルートの確認だ」

障害は言い過ぎだが、おれの旅路にアスルがどうしても必要なわけではない。

昨日考えていたこと。おぼろげながらも見えてきた夢の近道。そのため、アスルには強くなってもらわないと駄目だ。

おれの存在が彼女をトレーナーとして強くするのだとしたら、旅

の同行なんてわざわざ許可するほどでもない。何でこんな簡単なことに気付かなかったんだ。

セントラルを出発したおれとアスルは、コトブキシティを東に抜けるべく太陽が昇る方角へと歩き続けていた。既に市街地は抜けて住宅が並び立つ郊外の方へと出てきている。

旅を始めたばかりの頃におれはこの辺りを歩いた覚えがある。あの時とは時間が違うからか、並び立つモダンな雰囲気の家からは人の気配がするのには違和感を感じていたが。

アスファルト舗装された道路とある程度の幅が確保された歩道の果てが、地平線のあたりに見えてくる。あそこからは人工的な道はない。これならあと少しで203番道路へと抜けられる。

これまで歩いている途中、おれはアスルに自分の持つ知識をレクチャーすることにした。教えたは実戦的なことではない。ポケモンがどのようにして技を行使するかということを簡単に喋りながら歩いていたのだが

「んーと、ポケモンは回路動力源を持っていて、動力源を使って回路を構築して技を使うんでしょ？ それってどういう意味なの？」
「さっきから言っているように、ポケモンが技を使う裏には、実はそういう凄い仕組みがあったってこと。多くのトレーナーはこれを知らないし、知ろうともしないぞ。誰がクソ難しそうな論文を読むんだよって話になるから」

そっかー、と納得するように言葉を伸ばすアスル。同じことを三度も言うのは疲れる。

「それで、トレーナーの多くは技がどのようにして作用しているかって知らないんだ。知っているからどうしたってわけじゃないが…

…」

「ならどうしてノブオはそんなのを覚えたの？」

「便利かなと思った。多くの人が知らないものを知っているっていうのも気分が良い」

「そっかー。でも、覚えていて損はないわよね」

損はないどころか、とても有益な情報だと思うんだがなあ。アナトリアでは、多くの人はポケモンを持てないんだっただろう？ それでアスルはこっちにやって来たんじゃないか。この地方では当たり前、例えば子供がポケモンとともに旅をするだとか、そんなシステムを築きたいと言っていたじゃないか　喉まで迫ったその言葉を飲み込む。ここで言うべきことではない。

「ぜひ覚えてくれよ。いざって時の助けになるかもしれないから」
「うん分かった。それで、これからどういう道に行くの？」

おれの頭の中では大体のビジョンは見えている。これをうまく説明するのは地図が必要だな。

右手を左肩に提げる旅行用バッグのジッパーに伸ばしてじいっと開いて、中をごそごそやって目当てのものを指でつまむ。

「タウンマップは知ってるか？」

「ポケセンで無料配布されているものだよね。それに、どこの家にも一つはあるっていうやつでしょ？」

「そうそう、それぞれ。今持っているのがそうなんだが」

ジッパーをつまんでバッグを閉じ、おれは広げたタウンマップをつまんでアスルの前に見せる。

「おれ達がいるのはコトブキシティだ。ここから東に出ると203番道路に出る」

「うん」

「これをまっすぐ行くとクロガネシティに出る。今日は一日中歩いてそこまでたどり着くことにしよう」

アスルはちょっと驚いた様子を見せ、少し力の抜けた頷きを返す。きつと、一日中歩くという部分に反応したのだ。

そうだな、この暑い天気の中を一目見ただけで熱を感じそうな服装をした女の子が、休憩も無しに歩き続けるのは不可能だ。おれだつて出来ない。

「大丈夫だつて。アスルがどうしてもつて時には立ち止まって休むから」

「ありがとう。ノブオは優しいんだね」

「そんなのじゃないさ。連れが倒れたらおれが困るんだ」

そうとも言い切れないことにおれは気付く。優しいんだね　この短い言葉が、どうもおれの胸につつかえて取れない。

「とにかく行こう。そうだ、絶対に無理はしないでくれ」

「分かったわ。……もうしばらくはコトブキには戻れないのね」

どこか物悲しそうな声色でアスルは言う。何か心配なことでもあるのかと尋ねると、アスルは一度頷いてから口を開いた。

「私と同じ駆け出しのトレーナーとセントラルで出会ったの。ペラッってポケモン、かわいかったなあ」

「へえ。そのトレーナーの名前は？」

「彼女は……メルなんとかだつて。名前は忘れちゃったけど、元気そうな女の子だった」

ふーんと相槌を打つ。アスルがそこで話を切ったから、おれも何も言わない。

暑い中で喋り続けるのはガールズトークをしている軽装の女の子だけで十分だ。横に見える住宅の数が減り、草木の緑が見え始める。203番道路に足を踏み入れたおれは、楽しそうに先を歩くアスルの背を見つめながら歩く。

こいつにはどうしても、トレーナーとして強くなって欲しい。口に出さずに復唱し、おれは前を向く。

疲れた。一人旅なら自分でペースを考えて行動できるが、二人旅となるとそうはいかないから余計に疲れる。足がぐたくただ。というよりは身体が鉛になった気分だ。

女の子には体力の低い人が多いけど、アスルはこの暑い天候の下を例の暑苦しい恰好で歩くのだから、よく足を止めてしまっていた。絨毯模様の厚くゆったりとした服は、もともと少なかったであろうアスルの体力を容赦なく奪っていく。

アスルの希望で一時間に一度の休憩をとっても、彼女の顔色は良くならなかった。おれも気を配ったつもりだったが、一時間に十分程度の休みでは旅に慣れてない人間が疲れをとるのは難しいようだった。昔のおれもそうだったから、文句を言うつもりはない。

おれが顔色の悪いアスルに大丈夫かと尋ねると、決まって大丈夫だまだいけると返ってきた。どう見たって大丈夫じゃないのに。

大体にして、アスルが異常に疲れてしまうのは、どう見たってその服装のせいなのだ。とはいえ、おれが脱げと言うのははばかられる。もしかしたら、アナトリアでの服装は切っても切り離せないものなのかもしれない。そうやって決めつけることで、おれはこのもやもやを投げ飛ばした。

疲れた体を白いシーツが敷かれたベッドの上に投げ出して身を任せる。クロガネシティにあるポケモンセンターの宿泊施設の一室で、おれは仰向けになって横になる。うつ伏せよりは仰向けの方が好きだ。

既に時刻は夜の八時を回っている。アスルは別の部屋でシャワーでも浴びているだろう。ぐたくたで疲れ切った様子だったが、そのくらいはしておけとおれが言っておいたから、たぶん済ませてはいえると思うのだけど。

おれはもう浴びたけど、もう何もする気にならない。アスルの様子を見に行こうとか、食堂の方について何かを食べようとか、それよりかは寝たいのだ。

深呼吸をしながら静かに目を瞑る。バイバイ、疲労はとっとと消えてくれ。

そういえば、ここのジムは岩タイプで揃えているんだっただ。たしか、ヒョウタとかいう眼鏡をかけた青年がジムリーダーをやっていたはず。

はずじゃなくて、実際にそうだ。

アスルの付き添いをしてあいつの顔を見るのは正直言って気まずい。あまり良い顔をしておれを見ることはないだろう。

にしても岩タイプか……アスルはまだバツジをもっていないから、そうそう嫌らしい攻撃を受けることはないはずだ。

そのかわり、総じて物理防御能力は高い。アスルがどんなポケモンを持っているか聞いておけばよかった……

眠りに落ちる前にそれを強く後悔したからか、おれが目覚めてから初めてアスルと顔を合わせた時の第一声は、お前は何の種のポケモンを持っているんだっただけ、という問いだった。

これを口にしてからおれは後悔する。ここは食堂で、この時間では周りに人が多いからがやがやしていて、そのせいで話がしづらいのだ。

「え、もう一回言っただけ？」

「アスルはどんなポケモンを持っているんだっただけ言ってるんだ！」

今度は大声で言っただけやる。これならきちんと聞こえるだろう。

「コダック」

「ん、聞こえねえ」

「コダック！」

アスルに怒っているつもりはなくても、今日着ている絨毯模様ア
ナトリアの民族衣装がおれを威嚇しているように見えた。

怯んだのを悟られないように平静を装い、おれは大きく頷いてお
く。

答えは聞いたから、話の続きは後でいい。薄味な豆のスープをス
プーンですすり、おれは目を瞑って頷いた。うん、割と美味い。

しかし、ポケモンセンターはどこでも清掃が行き届いている。床
はいつ見ても綺麗だし、壁や天井の壁紙は爽やかな白だ。

ここが食堂で、ここだけでも清潔感を保ちたいというだけかもし
れないけど、それでも徹底した清掃には目を見張るものがある。綺
麗なのはいいことだ。

食事を終えたおれは一度部屋に戻り、荷物のチェックを済ませて
ポケモンセンターのエントランスホールに出る。食堂から宿泊施設
に戻る時、アスルとはエントランスホールで待ち合わせることにし
ていた。

旅に慣れていないとしても、荷物の整理くらい自分でうまくやれ
るだろうからそれほど時間はかからないはずだ。おれは右手に軽く
握る部屋のキーを返却するために、受付の前の短い列に並ぶ。

おれから見れば、この街には誰かを惹きつける場所はあまり存在
しない。あるとすればクロガネ炭鉱と炭鉱博物館くらいなものだが、
トレーナーとして一番の重要施設はクロガネのポケモンジムだ。お
れの前に並ぶ五人の子供達の行き先はどこなのだろうか。

ふと、おれの名を呼ぶ声が後ろから聞こえる。同名の人間を呼ん
でいるケースを考えてゆっくり振り返ると、きれいに磨かれた床の
上に立っているアスルが、おれを見て手を振っているのに気付いた。
「ここで部屋の鍵を返すの？」

こっちに近寄りながら尋ねるアスルに、おれはそうだとはつきり
した声で話す。食堂に比べると人気は少ないので、自分でも驚くほ
どに声が響き渡った。

「そうだ、さつき私の手持ちのポケモンがどうしたこうしたってお話をしたよね。なんで？」

「今日はここにあるクロガネジムに挑戦するだろ。相手が岩タイプでもてなしてくれるから、アスルはどんなポケモンを用意しているか聞いておきたかった」

「岩タイプって水タイプの攻撃に弱いんでしょ？ 私のポケモンはコダック一匹しかいないけど、勝てるかな？」

アスルは服の内側に取り付けているモンスターボールを手に取る。なるほど、このアナトリアの民族衣装は特別仕様か。モンスターボールを小さくしたあとは服の内側に吸着させるらしい。

「有利ではあるが厳しいかもしれない。そのコダックに実戦経験を積ませたか？」

「ううん、あまり無いわ」

「だとすると厳しいかもしれない。ん、先に鍵を返そう」

先に並んでいた子供達がいなくなったのを見て、おれは受付にいる若い女性スタッフに部屋のカギを返す。

薄い化粧をしているらしく、そのひかえめな印象は割とよかった。薄い化粧と、すっぴんでも美人と呼ばれていそうな穏やかな顔立ちとの相性はいい。

「で、厳しいかもしれないってことは、勝てないかもってこと？」

アスルの大きな目が、ポケセンの出口に向かうおれの顔を覗き込んでくる。やめろ、驚くじゃねえか。

「そうだな。勝てない」

「ちよつ、そうやって断言しないでよお！」

アスルはこちらを見ながらも、視界に入っていない自動ドアを抜ける。何でこんなことにセンスがあるんだろう。

「仕方がないだろ、アスルのコダックはろくに戦ったこともないんだろ？」

「……みずでつぼうの狙撃ならたくさん練習したわよ。ねえ？」

アスルの目線が自分の体に向く。水タイプの特殊攻撃技「みずで

つぽう」による狙撃。シャープシュート。

「そこまで言うならちよつと試してみないか」

「えっ？」

「ジムバツジ無しで初挑戦ってなら、脅威になるのはズガイドスくらいのもんだ。しっかり距離をとってみずてつぽうを命中させればどうということはない。だけど、練習と実戦は違う。言いたいことが分かるか」

「んー、うん。なんとなく」

「なんとなくじゃ駄目だ。ちよいとついてきてくれ」

五分も経たずにおれ達はこの街の北に接続する207番道路の始まりの近くにやってきた。

近くに見える大きな建物といえばクロガネ炭鉱博物館なのだが、アスルがあれを興味津々といった様子で眺めていたのには驚いた。あまり女の子受けするものじゃないと思ったんだが、何か惹かれるところがあったのだろう。

男の子受けするとはいえ、おれのように興味を持たない奴だっている。炭鉱だなんだよりも遊園地を建てちまった方が人が来るんじゃないか、いや、炭鉱が終わりでもない限りそれはないか。

「ねえノブオ、ここでなにをやるの？」

そよ風に頭に巻いた白の薄い布をなびかせるアスル。おれは彼女を見つめながらモンスターボールを吸いつけるベルトに手を伸ばし、そこから一つのボールを手取る。

赤と白のツートンカラーのボールは、小さなスイッチを押すとそのサイズを大きくする。おれはアスルに示すように、右手に軽く握るボールを小さく揺らした。

「この中にはおれのギャロップがいる。一発でもいい、こいつにみずでつぽうを当ててみる」

ギャロップをボールから出すと、アスルが目を開いてこちらを見ている。はあ、強そうだなあなんて思っているのだろうか。

「……一発？　一発と言わず二発三発と当てに行くわよ、コダック！」

服の中に手を突っ込んだアスルは、勢いよくそこから手を引き抜いてモンスターボールを取り出して地面にバウンドさせるように放り投げる。

跳ね上がったボールからは光があふれ、それにまぎれて黄色の体色のポケモン　強そうには見えないポケモン番付のランカーであるコダック種だ　が現れる。コダック種は両手を頭に当てていることが多く、その仕草はアスルのコダックも例外ではなかった。

まぬけがやるような戦う意思のない姿勢だが、コダック種の強みはあの外見から攻撃を仕掛けてくることだ。おれはギャロップに、敵が放つ攻撃を全て避けると指示を出す。

短く頷き返した後、ギャロップの炎上する身体が歪んで見えてくる。

これは陽炎の効果でもなんでもなく、かげぶんしんという名の回避率上昇を図る変化技の一種なのだが、アスルはあつけにとられた様子で目と口をゆっくりと開いて注視している。

コダックだけではなく、アスル自身の実戦経験も浅いらしい。

「な、なにあれおかしいな、夢でも見てるのかな……きやつ！」

「夢じゃない。さ、コダックにみずでっぱうの指示を出せ」

おれは地面に落ちている小石をアスルの身体に軽く投げつけてやる。そうしてやって初めて彼女はギャロップの変化を捉えたらしい。想像以上に拙い。これでジム戦をやるといったのだからぞつとする。

「なによ、そんなにやぐにやした幻を見せたって意味ないんだから！　コダック！　みずでっぱうを……右から二番目の敵に放つて！」

でたらめな指示だ。しかし、コダックだって混乱しているわけだから指示に従わざるを得ない。悪循環だ。

コダックの平たいくちばしが僅かに開き、その隙間から水の塊が

小気味良い音と共に飛び出すのが見えた。

高速で飛翔する水の弾丸は静止するギャロップを捉え、しかし額を撃たれたギャロップは悲鳴の一つも上げない。ぐにやりと撃たれたギャロップの像が歪み、霧散する。

「えっうそ、幻！？　でも、当てればぶわって広がって消えるみたいね！」

しかしアスルのコダックのみずでっばうは特筆に値するかもしれない。

コダックの能力は十分に開発されていないが、これであの弾速は凄い。

レベルの低いコダックのみずでっばうなんて発射を見てから回避が余裕だと甘く見ていたが、アスルの宣伝通り、この攻撃には目を見張るものがある。

「よしコダック、みずでっばうを連射よ！」

だが、動かない的と動く的を狙うのは別の話だ。

「走れ。かげぶんしんをかけ続けるのを忘れるな」

ギャロップは指示の半分で駆け出す。その脚力の強さは決られ、高く放られた土の塊が物語っている。

俊足を活かして幅の広い道路を駆け巡るギャロップ。その周囲には蜃気楼のように多くのギャロップの幻影がまわりついていた。正直言っておれもどれが本物のギャロップか分からないでいる。

そんな状況でも、アスルとコダックは何を迷うでもなく高弾速のみずでっばうを放ち続ける方針を立てたようだ。が、その射線にはギャロップの幻影すら捉えていない。何度撃つても結果は同じだった。

「うーっ！　コダック、ちゃんと狙ってよお！」

駄目だアスル、トレーナーが冷静さを欠いていてはバトルに勝つのは困難を極める。

自分のポケモンが技を放てる限度を把握し、現在のポケモンの状況も把握できるようになればいいのだが、それは難しいにしても冷

静さを失うのはまずい。

「……え、コダック、どうしたの？ どうして撃てないの、まだ限界じゃあ……」

コダックもアスルも困った様子を浮かべている。おれはギャロップに停止を命じ、素早くボールから赤いトラクタービームを放出、収納をする。

「アスルがコダックを困らせたからだ。通常、みずでっぼうは平均して連続25回は放てる技なんだが……アスルのコダックは連続して何回放てる？」

「……あの時の特訓では、15回くらいだったかな」

平均を大きく下回るこの数字は、恐らくはこのコダックが得意とする高弾速のみずでっぼうが影響を及ぼしているのだろう。それは良いとして、このバトルではコダックは十発もみずでっぼうを放っていない。これの原因ははつきり分かっている。

「このバトルでコダックは何回みずでっぼうを撃った？」

「えっと、あれ、分からない……」

「冷静さを欠いてしまうと状況の把握が出来なくなる。これは敗北に直結するぞ。あとは大事なことを一つ教えておく」

しゃがみこんでコダックの頭に軽く手を乗せるアスルが不安そうな表情を浮かべながらこちらを見上げる。

「ポケモンは責めない方がいい。いや、アスルに責があるうがなからうが、負けたときは少し責めてもいい。けどな、バトルの最中にポケモンの心を乱す言動は控えておけ」

その結果がこれである。アスルは小さくごめんねと呟き、コダックをモンスターボールに仕舞う。

「あとは予測射撃を覚えさせた方がいい。これについてはおれが特訓につき合うよ」

「予測射撃？」

「ああ。きつとコダックは静物をみずでっぼうで撃つ要領でギャロップに攻撃を仕掛けたんだと思う。予測ってのは、次に相手がこの

地点に来るだろうからそこに攻撃を放つてことさ」

なにそれ難しそう　アスルは落ち込んだ調子で返す。

別にアスルがやるのではないのだから、思いつめた表情をすることはないじゃないか。おれがそう呼びかけると、アスルは首を横に振った。

「強くなるのってそんなに難しいんだって、やっと分かったかも」
「ん？」

「コダツクは私の最初のポケモンだから、ちょっと辛いんだ。仲間を増やしたって辛いものは辛いけど、ポケモンを強くするのって予想以上にきついんだね」

きつい？　きついってどういう

「だってノブオはポケモンに厳しくあたって強くしてきたんでしょ？　私に出来るかな、そういうの」

ああ、なるほど。そういうことが。

「昨日の路地裏の野郎ほど強くやらなくていいよ。あそこまで行ったら頭がおかしいからな」

アスルは大きく頷き、おれは笑っていた。たぶんこれは、自嘲だ。

クロガネジム アナトリアのトレーナー、ジムリーダー戦に臨む

それから、この日の午前中の時間は、全てアスルと彼女のコダツクの特訓につき込まれていた。

アスルのコダツクの特筆すべき点は、平均して放てる回数よりもう少し回数しか放てないみずでっぽうだった。高弾速で放てるのはそれだけで脅威だ。

ただ、コダツクはこれを放つのに無理をしているらしい。そうでなければ、最大15発しか放てないみずでっぽうを説明できない。それにコダツクは敵の動きを見て攻撃を当てる予測射撃が出来ていない。みずでっぽうは秒間何発も撃てる技ではないので、一発一発を当てに行かなくてはいけない。

もちろん初弾は牽制と割り切って撃つのも悪くはないし、三発程度を誘導に使って確実に決めるのも悪くはない。

しかし、それをやろうとするならば、簡単な予測射撃くらいは出来なければ実現は不可能だ。

そのための特訓だし、方法は単純明快である。

おれの手持ちのビーダルに207番道路の脇で拾った長い木の棒を持たせて、道路の端から端を走らせる。アスルのコダツクは全速力で走るビーダルのもつ木の棒か、ビーダルの体にみずでっぽうを命中させる。

この特訓をやり始めた頃は、コダツクの放つみずでっぽうはビーダルの周囲の地面に着弾、ただただ地面を濡らして少量の土くれを巻き上げるにすぎなかった。

15発を撃ったらコダツクの回復を待ち、それから特訓を再開する。単調なサイクルの特訓だが、それ故に効果は高いと思えた。実際、必要最低限の休息を取りながら特訓を続けたコダツクは目に見える成長を遂げた。

あまり命中はしていないが、全く当てられなかった今朝の頃よりは遙かにマシになっている。

「凄いよコダック、よく頑張ったわね！」

何度目かと数えるのも嫌になるくらいの休憩をした時、アスルは首をかしげて地面に落ち付いているコダックに笑顔を浮かべて呼びかけていた。

既に太陽は西に傾き、空が赤く染まりつつある。おれは慣れているから別にどうとも思わなかったが、アスルは昼飯を食わずにこの特訓につき合っていた。

おれと同じく、おれのポケモンも一日何も飲まず食わずで動ける程度の忍耐力を持ち合わせているが、コダックも同じくらい忍耐強いらしい。首をかしげて腕を頭に。ぼうっとしているようで、こいつはかなり出来るコダックのようだ。

「よし、次は木の棒を狙ってみようか！」

「いいや、今日はここまでにしよう。これ以上の特訓はあまり意味がない」

どうして？ としやがみこんでコダックの頭を撫でていたアスルは首をかしげる。なんだよ、そんなものまねはやらなくていいって。「同様の相手にしても、今度はそいつに対しての専門性だけが上がっていった、対応力が無くなっていくんだ」

「へえ……そうなんだ」

「何かに特化したポケモンを育成することも出来るけど、専門性を上げるってのは特化型とは違うからな。変な癖がついたら困るしなまあ、これだけ出来るようになったから良いんじゃないか？」

おれは木の棒を道路の脇の林に戻しに行ったビーダルの背中を見る。かなり走り回ったからか、少し曲がった背中から疲労が透けて見える気がした。あとできちゃんと休憩をとらせなくては。

棒を林の茂みに戻したビーダルをボールに戻す。赤い捕獲光がきちんと収納したのを見て、それからおれはアスルの方に向き直る。既に彼女はコダックをボールに戻して服の内側にボールをくっつけ

たらしい。

「……そうだ、私はトレーナーとしてどうだったかな」

ポケセンの方へと向かいつつ、アスルは自分にもおれにも問いかけるようにして囁いた。

「まあまあ良かったと思う。みずでつぼうの発射タイミングをはかつてやるのも、きちんとしたトレーナーの仕事だ」

アスルだってただただ黙ってコダツクの姿を見ていたわけではない。特訓2セットの内に一度はアスルの指示でコダツクはみずでつぼうを撃っていた。

トレーナーの仕事はただただポケモンに指示を下せばいいわけでもないし、特訓のメニューを考案するだけでもない。ある種のオペレータとしての役割も、立派なトレーナーの仕事だ。

戦闘状態に入ったポケモンは、敵との戦闘に全神経を集中させる。これがベストなやり方だし、同時にとある状況下では窮地を招いてしまう。

ポケモンをタイマンで戦わせるシングルバトルなら度外視している要素だが、これから先は二対二のダブルバトルに臨むことがあるかもしれない。そうになると、トレーナーには広い視野が要求されるのだ。

「ノブオに言ってもらえて嬉しいわ。うん、明日はきっと勝ってみせる」

「一度で勝とうと思わない方が良くと思うけどな。挫折するのはトレーナーとポケモンが経験して、初めて糧になるものだし」

「だけど、これは駄目だなんて思ったのはノブオのお陰よ。私もコダツクも、精密射撃の自信があったもの。それだけじゃ駄目だって分かって、でもどうにかなりそうになって、ほっとしてる」

見ていて気持ちの良い笑顔を浮かべるアスル。つられておれの口角がくいと上がるのを感じた。

「明日はおれも応援するよ。だからアスルは、自分とコダツクを信じてジム戦に臨めばいい」

「ありがとう。それじゃ、よろしくね」

アスルは立ち止まり、右手をおれに向けて差し出す。右腕はベージュ色の、色とりどりの絨毯模様の民族衣装に包まれている。

アナトリアのトレーナー、か。

頷き、おれはアスルの手をとって軽く握る。頭に巻いた白い布がそよ風に小さくなびいている。アスルはいつまでも嬉しそうに笑っていた。

その笑いが消えたのは、つぎの日の朝だった。

肩に旅行用バッグを担いで外に出たおれは、右隣で表情を岩のようになくしているアスルと共にクロガネポケモンジムの前に立っている。とても大きな建物で、岩をイメージしてか様々な鉱物が見せる鈍い色で壁が塗りたくられている。

ポケモンジムは、トレーナーがジムリーダーに挑み、勝利もしくは認められることによってバッジを手に入れる施設だ。アスルはこういう認知をしていたが、それでは不十分だ。

ここはトレーナーがよりよく自分のポケモンを鍛えることが出来る施設も兼ね備えている。そのためのポケモンジムとも呼べる。

「……なあ」

「うん!？」

極度の緊張をほぐしてやろうかと思ったが、どうもうまくいかないらしい。いつも通りの暑苦しい民族衣装に頭の白い布。それでも緊張はやってくるのか。

「もうすこし落ちつけて、緊張したって意味がない」

「でも、ここのジムリーダーって強いんでしょ？ 勝てなかったらどうしよう」

「大丈夫だ。きのう、アスルとコダックは特訓を頑張っただろ。それに、勝てなくても認めてもらえればバッジを貰えるケースもある」

カクカクのアニメのようにアスルはぎこちない動きで首を縦に振る。

まあアレか、実戦経験もろくなしでジムリーダーと戦うつてのがまずあり得ないことだ。仕方がないと言えば仕方がない。

ポケセンが運営する小規模なポケモン大会は存在する。きのう、アスルはバッジ一枚を所有するトレーナーと戦い、敗れたのは記憶に新しい。

相手のトレーナーは電気技を使えるコリンクを登録、戦闘に出していた。相手が悪いと割りきれそうなものだが、アスルにとってアレは相当ショックだったに違いない。だからこうして不安に震えているのかもしれない。

「……いつまでもがちがちに固まったって仕方がないだろ」

「でも、コダツクが傷ついちゃう……」

昨日の戦闘は、コダツクが身につけた予測射撃がコリンクの額にぶち当たったものの、それで倒しきれたわけではなく、コリンクのかみなりのキバがコダツクの頭に突き立ったのだ。

コダツクは身体を大きく痙攣させて仰向けに倒れ、戦闘不能になっってしまった。この事もアスルにとっては相当なショックだったに違いない。彼女にとってポケモンはとても大事な存在なのだろうか。

頭では分かっている。だけど、このままではアスルのためにはならない。

「思いだせよ、アスルはどうしてここにいる？」

「えっ？」

「おれに聞かせてくれたよな、アスルの夢を。アナトリアにシンオウやカントーにあるポケモンの制度を作りたいんだろ？ 酷なようだけどさ、トレーナーとしてアスルが踏むのはこの一歩なんだよ。バッジがなきゃそんな夢に終わる。ただの夢に……」

おれだってしっかりした事を言っているとは思ってはいない。ただ、生易しい言葉ではアスルのかちこちに固まった頭や身体をほぐ

せはしないだろうと考えただけだ。

ただ、アスルがどれだけレベルの高い志を抱いていたとして、やはり彼女は人間なのだ。おれのきつい物言いで志が折れるかもしれない。でも、誰かが言ってやらねば。

「……うん。コダツク、行くよ」

短く、いつもより低い声でアスルは囁く。どうやら意思を挫いてはいないらしいし、勝ちに行こうという姿勢を見せている。おれは頷き、先を歩くアスルの後ろについていった。

クロガネジムの外見は、まさに鉱石をイメージして作られたという表現がしっくりくるものだが、内部構造はまともなものだった。

Tの字を逆さまにした形のエントランスホール。その中央にぽつりと円形の受付ブースがあり、左右に広がる道はトレーナーがポケモンを鍛えるための施設へと繋がっている。

右は低レベル帯、左は高レベル帯と分けられているのが、壁に貼り付けられた簡素なパネルや床の模様を使った案内表示を見れば分かった。

受付のスタッフは、三十路を過ぎたかと思われる男性だった。クールビズというやつなのか、おれが着ているような白いシャツに灰色のスラックスという出で立ちだ。

おれはアスルに受付ブースに行くように促すと、アスルは頷いてゆつくりと前に歩いていく。

受付のスタッフは、きつとアスルの緊張した面持ちを見たのだろう。気さくな人がやるようにフレンドリーに笑い、口を開いた。

「いらつしゃい、そんな緊張しているってことは、ヒョウタさんと戦いたいのかな？」

「……そう。うん、そうです」

「それじゃあトレーナーカードを見せて。フラッタの使用準備もあるから」

アスルは右手に取っ手を持つスーツケースの中から黒いカードケ

ースを取り出す。

ケースから取り出さずにトレーナーカードを見れるように出来ているらしく、スタッフは数秒眺めてアスルに返却した。

「ノンバッジってことは、ここが君の初挑戦ってわけだ」

「はい」

「そうそう緊張しなさんな。君のパートナーにも伝播するよ」

やはりフレンドリーにスタッフは言い、オフィスでよく見る内線電話を操作してから受話器をとる。

「挑戦者一名です。ノンバッジなので、フラッタ最大レベルでお願いします……ええ、よろしくお願いしますよ」

短い事務連絡だった。電話の相手はヒョウタなのだろうか。

「……それじゃ、後ろの扉を開けて行つといで。ところで、君は付き添いかい？」

「おれ？ ……まあ、そういうもんだけど。そういうのは駄目だった決まりがあつたか？」

「いいや。そうか、遠い地方出身の恋人ねえ」

なにを勘違いしているんだ、にやついてんじゃねえよ。

しかしよかった、アスルが足早にまっすぐ行つた先のドアを開けて消えてくれている。

「あれはおれの好みじゃない。たまたまあれがノンバッジで、おれが七つバッジを持っていた。だからあれがおれについてきている。それだけだ」

激戦 アスルとコダツクの全力全開

クロガネジムで一番土地の面積をとっているのは、間違いなくこのバトルフィールドだと断言できる。

ここはジムリーダーが正式に挑戦者と戦うための場所だ。故に、床が土の普通のフィールドや屋外特有の変化に富む地形などとは趣の異なる、かなり特殊な場所となっている。

そのことについては、おれは自分の経験談として既にアスルには教えていた。

ここのジムリーダー戦専用フィールドは、ガタガタした土の床と子供一人なら余裕で隠れる程度の大きさの岩が所々に散りばめられている。

照明は、いかに巨大なポケモンであれ手を伸ばしても届かないほどに高い位置にある天井に、等間隔に三つほど強力な電球が備えられている。

この場所にはコトブキでよく見る、それなりの高さのビルがすっぽり入りそうな気もする。

ここまで馬鹿の一つ覚えのように天井を高くしたのは、挑戦者側に自由を与えるためだと解釈を改めることにした。

ベージュ色に絨毯模様の大きな服を着て、白く薄い布をその上にふわりと預けるアスルは、いつでもコダツクを外に出せるように右手にモンスターボールを握る。

彼女が立っているのはバトルフィールドとトレーナーの立ち位置を仕切る白い柵の内側であり、そこから子供が徒競走をする程度の距離の先に同じ白い柵がある。その向こうにいるのは、作業服に赤いヘルメットという出で立ちの青年だ。

この青年こそが、ここのジムリーダーであるヒョウタだ。彼もまた右手にボールを握っている。なかなか整った輪郭に優しそうな

印象を与える口角の上がつた唇に目が行くが、四角フレームの眼鏡の奥にある瞳に、容赦しようという思惑を伺えない。

気まずい。ジムリーダーの中でも特にこいつと同じ場所にいるのは気まずい。

この試合、早く終わらねえかな。

いや、手抜きをしてわざとやられてバッジを渡す？ そんなことはあり得ない。

この世のどこに手抜きをして挑戦者を迎え撃とうとするジムリーダーがいるというのか。

もっと言えば、挑戦者の持つジムバッジの枚数に応じて自分のポケモンを「弱体化」させて戦わなくてはならない義務もある。手抜きをしようとして出来るものではない。

フラッタは、近年になってそのブラックボックスが幾分か解明された、ポケモンを弱体化させる装置を指す。

もっとも、おれのようなポケモントレーナーが知り得る情報はそれだけだ。フラッタがジムのどこにあるのかとか、どの程度のサイズなのか、起動させるのにどれだけの電力が要するのか、などの情報の公開はされていない。

このこともアスルに教えていた。ポケモントレーナーが一匹のポケモンを自分の方針に合わせて育てることにどれだけ労力を費やすかは、昨日の一件である程度は把握できていたのだらう。フラッタの存在意義についてはすぐに分かったらしい。

ジムリーダーは様々なレベルの挑戦者を迎え撃つ義務がある。

しかし、彼らのレベルをバッジ所有数で分けるとして、それをしてジムリーダーが個別にポケモンを用意するなど不可能に近い。

ポケモンの実力のキープ、自らの戦闘方針の教え込みなど、管理すべき項目が多すぎるのだ。

そこでフラッタの登場である。これがポケモンを「弱体化」させることで、ジムリーダーが用意するポケモンの数は多くて十三匹程

度にはなる。

これのお陰でどれだけ手間をかけずに済むか、ということのアスルは真っ先に口にした。

アスルとヒョウタの戦いを、おれはアスルから見て右側にある観覧ブースにて眺めている。何かの競技場のように、階段と談の上に設置される簡単な白く長いベンチがそこには用意されている。

おれはアスルに近い側に座り、そしてもう一人がこのブースの真ん中のあたりで立っていた。黒と白の縦縞の制服を着た初老の審判だ。白黒はつきりさせますぜってか、面白いな。

「はいはい、じゃあそろそろ始めますよ。挑戦者はアスルちゃんねで、一匹しかポケモンがいねんだそうな」

あ？ この審判、今なんて言った？ フランクすぎやしねえか？
「つーわけで挑戦を受けるヒョウタさんや、あんたの出せるポケモンは一匹とさせて頂きますよ」

「分かってますって。規定で定められている事柄は大体把握していますから」

軽い調子でヒョウタが審判に返す。どうやらこの二人の関係は良いらしい。真面目そうな青年とフランクなおっさん。変な組み合わせだな。

「……よ、よろしく願いますっ！」

「こちらこそよろしく。どうやら、準備は出来ているみたいだね？」
ヒョウタの優しい声色の問いかけに、アスルは右手に持っていたモンスターボールを胸の高さに掲げる。すっとボールに添えた左手には力がこもっていた。

「……」

「さあ、君たちがどれだけでできているか見せてもらっよう……ズガイドスッ！」

激昂したような、そんな激しい調子でヒョウタはボールを放り投げる。

一瞬、アスルの体がびくりと跳ね上がるのを見逃さなかった。ヒョウタの一声に驚いてか、それともズガイドス種の一見恐ろしい外見に気圧されたのかは分からない。

ズガイドス種の特徴は、濃い灰色の体色と前頭部、及び後背部から臀部にかけての青色の体色をもち、その境目がギザギザであることと言えるだろうが、特筆すべきは大型に発達した頭部である。

棘が生え、見るからにして硬質そうな頭部から繰り出される攻撃は、たとえフラッタで弱体化されていようと油断出来るものではない。

「っ……コダック、いくよっ！」

自らを奮い立たせるようにアスルは大声を張り上げ、モンスターボールを力一杯にフィールドに投げ込む。

放り投げられたボールから白い閃光が溢れ、そこからコダックが飛び出す。相変わらず頭に手をおいたやる気のない構えだが、そこ以外の体の部位に目をやれば臨戦態勢だと言わんばかりに力が入っているのがよく分かる。

「はいはい、試合始めるからねえ」

審判の何気ない、しかし大きなその言葉をきっかけにズガイドスはコダックに向けて全速力で駆けだしていく。

一メートルにも満たない小さな体躯からは想像もつかないような、しかしその凶暴そうな様相を見せるズガイドスの大きな足音が心臓に手を触れられているような気分させる。アスル、早いとこそいつをぶっ飛ばしてくれよ。

「みずでっばう、用意！」

ズガイドスは一直線にコダックに向けて突っ込んで行く。二匹の距離は二十数メートルといったところだが、すぐに詰められるだろう。

しかしそれは、コダックの高弾速のみずでっばうをぶちかますチャンスでもある。相対速度を顧みれば一直線に突っ走る、しかもフラッタによって身体能力を削ぎ落されたズガイドスに回避できるわ

けない。

「発射！」

アスルの簡単な指示と同時にコダックがみずでつぽうを放つ。握りこぶし程度の大きさの水塊の弾体は今までに見たことがないくらいの弾速で飛翔し、その反動でコダックの足の後ろに土の小さな山が出来あがった。

額にみずでつぽうを食らったズガイドスは悲鳴を上げ

「今だっ！」

ヒヨウタの鋭い調子の指示を合図に、ズガイドスの瞳が灰色になり、ついでに鬼のような形相を見せる。

にらみつけるという補助技　変化技とも呼ばれる　だ。これは対象の物理防御能力を削ぎ落す効果を持つ。

原理として、技の持つ不思議な力がポケモンの持つ回路動力源に作用するとオーキド博士が述べたのを本で読んだ。要はフラッタと同じことが起きているのだ。

ヒヨウタは確実に仕留めるためにわざと攻撃を喰らわせたに違いない。開幕の遠距離からこの技を指示するのは無意味だ。さらに、能力を削ぎ落されたズガイドスが一撃でコダックを倒せるとも考えていなかったのだろう。

コダックの横に広い目が縦にも広がる。表情がこわばっている。目には見えないが、にらみつけるの効果は表れているはずだ。

「続けてずつき！」

「第二射、発射！」

先よりも張り上げる調子でヒヨウタとアスルが指示を出す。

しかし、コダックのレスポンスが少し遅れたらしく、距離を詰められたコダックはズガイドスのずつきを食らってしまう。

すくいあげるようなずつきだった。コダックの体は勢いよく上に飛ばされ、背中で土を削って着地をする。くそっ、一撃で終わりか？「おー、こりゃあヒヨウタさんの勝ちかなあ」

審判のおっさんが呟く。たしかに、あのコダックがあんなものを

食らってしまったえば、戦闘の継続はほぼ不可能に近い

「コダック、地面に向けてみずでつばうをなぎ払って隠れて！」

はずだった。コダックは素早く起き上がり、指示の通りにみずでつばうを撃つ。

すると、土くれと水しぶきが一瞬の間だけ幕を張っていく。位置関係上、おれからヒョウタ側の方に位置をとっている人間とズガイドスは、この幕のせいでコダックの姿が見えなくなった。

幕が消え失せると同時にコダックも消え失せる。いや、アスルの側に設置されている二つの岩に隠れているのか？ 二つの岩とアスルを線で結べば、綺麗な三角形が出来上がる位置関係の出来上がりだ。

ヒョウタは敵の姿を見つけられず、アスルはどこにコダックが隠れたかを把握していた。状況は停滞を迎える。

「良い指示を出すトレーナーだ。それに、君のコダックもなかなかのものだね、いい根性を据えている」

「はあっ、はあっ……」

アスルの額には、いいや顔全体に嫌な汗が浮かんでいる。タイプ相性の上では有利をとっているのに、現状不利に近い状況が彼女を焦らせているのかもしれない。

コダックがうまく姿を消したことで状況は停滞する。この戦いがどう転がるかは誰も予測がつかないだろう。

ヒョウタは能力を削ぎ落されたズガイドスに下手な指示を出すことはできないし、アスルもまた好機を掴まなければズガイドスとヒョウタを下すことが出来ない。

これはトレーナーの腕の見せ所だ。ヒョウタが何かしらの方法で二つの岩の内どちらの影にコダックが潜んでいるかを見抜くか、それともアスルが何かしらの行動を起こすか。

たっぷりと五秒は流れた。が、二人はお互いのポケモンに指示を

出そうとしない。

沈黙の中に読み合いが続いている。おれだってアスルの立場に立たされたら、最良の判断を下す自信はない。

「……」

アスルの目線が、彼女から見て左の岩に向く。そのまなざしは不安に満ちている。

すぐにおれは悟った。

これはアスルのハツタリだ。

見当違いの場所にコダツクがいると思わせて、ヒョウタにズガイドスに攻撃指示を下させる。

そうして距離をとったところでみずでっばうによる攻撃を仕掛ける。考えとしては悪くないどころか、とてもいいものだと思う。

しかし、おれはアスルが悪事を、ひいては人をだませないことを勘づいていた。短い間だが、これまで過ごしてきた中でアスルが善良な人間であるのは分かっていたし、故に狡猾な面を持ち合わせていないことも分かっている。

アスルの目が泳いでいる。眼鏡をかけたヒョウタの視力がどのくらいのものかは分からないが、ジムリーダーともあるう人物がアスルの全身からにじみ出る不審な雰囲気を見抜けないわけがない。

「どうやら、君はポケモンのことが本当に好きなようだね」

「……」

「でも、私情はこういうのに持ちこまない方がいいよ」

なに、まさか

「ズガイドス、右の岩に思いつきりずつきだ！」

おいおい、嘘だろ！？

思った通り、ヒョウタがズガイドスに攻撃を指示した岩にはコダツクは隠れていなかった。

ズガイドスのずつきで岩が砕け散った瞬間、

「今よ、第三射発射っ……！」

アスルの指示でコダツクがもう一つの岩から飛び出し、ズガイド

スに向けてみずでっぽうを放つ。

背中を向けていたズガイドスに回避や防御をとれるはずもなく、水塊を背中でもろに受けてしまう。

着弾の水しぶきの音とともに痛々しい悲鳴を上げて、ズガイドスはふらりと地面に倒れこんでしまった。

「なっ……」

「んーっ！ やった！ やったよコダック、私達、ちゃんとやれた！」

喜びながら飛びまわるアスル。コダックも同じように（頭を手にのせてはいるが）小さく跳躍を続ける。

「ほっほお……この勝負、挑戦者のアスルちゃんの勝ちですわ。ヒョウタさんや、バッジを渡してやんなさい」

「ええ、言われなくても分かってますよ」

審判とヒョウタのやり取り。やっぱりこの二人は仲が良いみたいだ。

その後にヒョウタはズガイドスをボールに戻してから一度こちらのブースにやって来て、ここからアスルの立つトレーナーの場所に向かう。観覧ブースは連絡通路の役割も兼ねている。

コダックを戻して無邪気な笑顔をおれに向けるアスル。おれも笑みを返す。自分が勝ったわけじゃないが、アスルが勝ってくれたのは嬉しい。

嬉しさ余って右足を軸に一回転をしたアスルの前にヒョウタが立った。

「はい、これがコールバッジだ。おめでとぅ、君の勝利だ」

ヒョウタは作業着の胸ポケットから、一枚の輝く板をアスルに手渡す。コールバッジ。意匠としては、モンスターボールに近いものがある。

「あ、ありがとう！」

「君は良いトレーナーだし、君のコダックも良いポケモンだね。こ

れからに期待しているよ」

ヒヨウタは笑顔で、具合の良さそうに言った。

その時、おれはある種の爽快感を得る。思わず手を打って頷いてしまう。

ジムリーダーに求められるのは、純粋なトレーナーとしての強さやポケモンの能力の高さだけではないのだ。

トレーナーに道を示してあげることも、ジムリーダーには求められているのかもしれない。アスルの演技はヘタクソだったが、その姿勢は良かったと心の中で頷いたヒヨウタは、わざとアスルの演技に引っかけたやつたのかもしれない。

推測だらけの確証のない考えだが、確信を持てることが一つだけある。それはヒヨウタが浮かべる嬉しそうな表情だ。

おれがヒヨウタに挑んだ時、彼はあんな表情を見せただろうか？ いや、蔑んだ眼差しだった。間違いなく。

「ノブオー！ 私、コダックと一緒に勝ったよ！」

駆け足で観覧ブースにやってくるアスル。おれは立ちあがって軽く拍手をして出迎える。

「アスルもコダックも、よくやったよ」

えへへ、とアスルは無邪気に笑い続ける。そうだ、それで

幾分か穏やかになっていた雰囲気、頭が割れるようなサイレンの音でがらりと変わる。

不穏な、何が起こるか予見できない、体の中がざわつくような嫌な感じだ。

「緊急事態発生。炭鉱に侵入者多数。破壊活動を行っています！」

繰り返します、炭鉱に侵入者多数。破壊活動を行っていますっ！！」

慌てた女性の声が、サイレンを流していたスピーカーからこの部屋全体に響き渡る。

おれはヒヨウタの様子を伺う。焦っているのか激昂しているのか、とにかく不穏な顔つきが別人のように映った。

「ジンヨウさん、ここを頼みますよ。君たちは安全な場所に避難してくれるね？」

努めて穏やかに声を出そうとしているのがよく分かる。ジンヨウと呼ばれた審判はどこからともなくモンスターボールを二つ取り出してヒヨウタに見せ、そしてアスルは口を震えさせる。

「ヒヨウタさんはどうするんですか？」

「炭鉱で暴れている奴を懲らしめてやるのさ」

「なら、私も一緒に」

馬鹿かお前！ その言葉が衝動的に口をついて出てしまう。ストレートにアスルに突き立ったおれの言葉で、アスルは目をぱちくりさせてこちらを見つめる。

「えっ？」

「コダックは傷を負ってるし、お前じゃ足を引っ張る！」

その事実はおれにも当てはまる。いかにジムリーダーの本気と相対できる資格を持っていたからとして、炭鉱という環境では足を引っ張りかねない。

「……すまない。君達は安全な場所に避難するんだよ！」

それだけを残してヒヨウタはこの部屋を走り去っていく。

おれに出来ることは、ジンヨウと呼ばれた審判のおっさんに一礼をして、アスルの手をとって急いでここから出ていくことだけだ。

奮戦 シンオウのトレーナー、心を軋ませる

おれはアスルの手を引いてクロガネシティを離れることにした。アスルには一度クロガネジムの前で立ち止まってから、これからの行動予定を簡潔に伝えている。

この街の南方に位置するクロガネ炭鉱に侵入者がいる。彼らの目的は破壊活動だが、少数の人間とポケモンがそんな行動を起こそうとするだろうか。

それは違う。きっと、この街を包囲できるほどの戦力を侵入者達は有しているはずだ。となれば、この街から脱出した方が言いにかまっている。

アスルはおれの言葉にうなずき、荒く息をつきながら隣に並んで走ってくれる。そう、アスルに危険が及ばないようにしなければならぬ。

右に曲がれば炭鉱、左に曲がれば博物館に行きつく十字路で一度足を休めた。

南方からは何かが崩れ落ちる音や誰かの悲鳴が小さく響いて聞こえている。時折、遠くで花火が打ち上がったような、空で火薬が爆発する音も。

おれの右手にアスルは左手を結んでいるが、震えているのを感じ取ったおれはアスルの様子を見るために振り返った。

今にも泣きだしそうな顔をしていて、濃い印象のある彼女の顔は赤く染まっている。

「私をもっと強かったら……」

「なに？」

「炭鉱で暴れてるって人達を懲らしめるのに！ どうして、どうして悪い人から逃げなきゃ……」

なるほど、アスルは正義の心も持ち合わせているらしい。悪を見

逃すことが出来ないのは、もしかしたらアナトリアにいた頃から変わらぬものかもしれない。だが

「そんなことは考えるな！」

「だって、そうしたら炭鉱の人たちが」

「普通の人間がそんなことをして活躍できるのはなゲームやマンガやアニメの世界だけなんだよ！ 現実を見る、警備部隊がいるはずの炭鉱からはヤバい音がぶっ続いて聞こえている！ おれ達は近づけない！」

これをおれは正論だと考える。

しかし、本当はもつと別のところに理由があった。アスルを危険な目に遭わせたくない、というのがそれにあたる。アスルという存在は、おれが夢をかなえるための近道でもあるから。

おれが炭鉱に出向き、詳細不明の侵入者ども 暴力組織とでも呼べばいいのか？ をポケモンの力でもってねじ伏せることが出来るかもしれない。

しかし、二つの大きなリスクが生じてしまう。一つはおれが返り討ちにあうことで、もう一つはアスルをより一層危険な状況に晒すことだ。

炭鉱を襲っている連中をひねりつぶすことでも夢に大きな一歩を踏み出せるかもしれない。しかし、その一歩を踏み出すためには大きなリスクを払わなくてはならず、分の悪い取引となる。

おれはあいつらを見返さなきゃいけない。誰かがおれを見下すことなど許しはしないと決めたおれが死ねば何にならない。

「……ノブオ？」

「あ？」

「……ごめんなさい。だから、そんなに怒った顔をしないで」

しり上がりの語尾。元からおれの顔は優しそうには見えないが、アスルを怯えさせて得ることなんて何もない。

「元からこんな顔だよ。ほら行くぞ、ほとぼりが冷めるまで207

番道路にしよう」

アスルは頷き返し、おれ達は再び走り出す。

太陽の熱で熱せられたコンクリートで固められた地面を蹴る度、おれのなかに打算以外の動機が鼓動を打つ。このままでいいのか、暴動を止めなくともよいのか。

かぶりを振る。そうしたら迷いが晴れるかと思つたのに、どろどろしたものが身体の底から湧き上がってくる。

やはりおれはあんな奴らの子供なのか。

自分が良ければそれでいいって思っているのか。

こんな状況で、ある程度の力を持つおれが手を貸さないのはおかしいんじゃないのか。

もしかしたらおれは、自分が思っている以上に悪い奴なんじゃないか。

「えっ、なにあれ!？」

アスルの引きつった声が、不快で否定的な考えを吹き飛ばしてくれたが、異常な光景を見てしまう。

老若男女を問わない多くの人間がクロガネ炭鉱博物館を遠巻きに取り囲んでいる。もしかするとこいつら数はこの街の人口の半分に及ぶかもしれない。

何をやっている？ 炭鉱が襲撃された知らせは地元住民にも届いているはずだ、ヒーローショなんて見てる場合じゃそこまで考えて、おれは拡声器越しに増幅された声を聞く。

「もう一度言う！ 我々バリバリ団に楯突こうとする者があれば、躊躇いなく炭鉱に仕掛けた爆弾を起爆させる！」

少し割れた声に博物館を取り囲んでいる人間達が怯む。その向こうでは何かが爆発したり崩れたりする音が聞こえ始めた。

「炭鉱を襲っている人達の仲間が博物館にもいるの!？」

「……らしいな。ここからじゃよく見えないけど、まずい所に居合わせちゃった」

おれはベルトからギャロップを収めているモンスターボールを取り出し、ボールを来た道の方に投げ、密かにギャロップを外に出す。「ノブオ、あいつらをやつつけるの？」

「違う。人垣が邪魔で何も見えねえからギャロップの上に乗って状況判断をする。奴らに手を出せば炭鉱が危ないのは本当らしいが、分らないことが多い」

おれはゆっくりギャロップの背にまたがる。ギャロップ種の体は常に炎上しているが、この炎がトレーナーや親しい存在を燃やすことはない。

背を高くしたおれは、バリバリ団を名乗る七人のラフな格好の人間によって博物館の外壁がぶち壊されているのを見た。

一人の人間につきポケモンを三匹出して破壊活動をさせている。バリバリ団を名乗る彼らは、バクオングやアゲハント、カイリユーやミロカロスといったポケモンを使役している。地方にとらわれずにポケモンを手に行っているらしい。

その中で一人だけ動かない奴がいる。顔を見せないようにサン格拉斯を着用し、灰色のタキシード身を包んだ、他の六人とは服装も雰囲気も違う男だ。

右手に拡声機を持ち、左手にいかにもな形をした起爆スイッチを握っている。どうせスイッチをポチッとやるんだろが。紳士然としようとしてるのはふりでしかないってのが見え見えなんだよ。

「ねえ、みんな怒ってる……」

アスルが囁く通り、博物館を取り囲んでいる大勢の人間達の肩が震えているのが分かる。強く拳を握り締める者や歯ぎしりをたてる者もいた。

おれはギャロップの背から降りてそれをボールに仕舞いつつ、博物館から離れるために歩きだす。すると、誰かがおれの右肩を掴んできた。

「ちよつとノブオ、どこに行くのっ」
「やっぱアスルか。」

「ねえ、あの人達を止められないの？」

「難しい。が、考えはある」

左手でおれの肩を掴むアスルの顔に笑顔が戻ってくる。泣きそうになったり険しい表情を浮かべていた時間は短かったのに、やけにこの笑顔が懐かしく思えた。

「アスルはここでじっとしていてくれ。絶対に動くなよ」

「うん。ねえ、やっぱりノブオも止めたいって思っていたんだね」

「おれはヒーローじゃないさ。そんな高尚な志なんて持ち合わせていない」

アスルが下を向く。そつかさうだよ、さつきあんなことを言った人が　そう思っているに違いない。

「ここで奴らの好きにさせてみる。アスルを危ない目に遭わせたくないんだよ」

それに起爆装置さえどうにかしまえばあとはこの街の住人がどうにかしてくれるさ。これは言わないが、アスルはおれを見上げて一度頷く。笑顔つきのさわやかな動きだった。

博物館から西に目測距離500メートルといった場所まで歩く。

そこに行きつくまでに、バリバリ団を名乗る暴力集団は博物館の外壁も内側もぶち壊してしまっただに違いない。嘆きの声がここまで聞こえてくる。

もはや状況は手遅れと言えそうだが、それは紳士然としたリーダー格の男が起爆装置を押してしまえばやってくる状況だ。これから行動を起こしても無駄じゃない。

おれは腰のベルトからギャロップとマニョーラ、そしてビーダルを納めているモンスターボールを手にする。チャンスは一度しかないが、失敗するかもしれないという不安はなかった。

「おれのポケモンだ、こんなの朝飯前だろ？」

右手の指の間にはさんだ三つのボールが微かに震える。肯定していると思うことにした。

「いいかギャロップ、人垣から三つ飛ぶ前のところで指示を出すから聞けよ」

一つのボールが震える。

「その後でマニニューラとビーダルを外に出す。灰色のタキシードの野郎がわざとらしい起爆スイッチを持つてるから、れいとうパンチといあいざりでぶっ壊せ」

言いきる前にギャロップを外に出し背に乗る。手に持つ二つのボールも確かに震えていた。

「頼むぞ」

短い呼び掛けにギャロップは控えめに高い鳴き声を上げる。大きくしていつでも解放が可能な二つのモンスターボールも激しく震えた。

ポケモンに乗るという行為はそのポケモンに何かの道具を備え付けることを前提とすることが少なくない。

おれのギャロップはそんな道具をつけていないから、こいつが激しく動くと振り落とされそうになる。

両腿でしっかりとギャロップの背を挟み、どうにか地面に落ちないように踏ん張って前を見る。タイミングを図って指示を出さねば、ギャロップが一般人の頭を踏みつけて殺してしまう。

「っ……今だ、とびはねろっ！」

上下に激しく揺れ動く視界でもって距離を図り、安全圏でギャロップに指示を出す。

とびはねる。この技は結構な高度を跳躍して敵を踏みつけるものだ。

しかし今回はギャロップも分かっているのか、力の向くベクトルはほぼ真上を向いている。攻撃のためではなく、高度を稼ぐためにギャロップが跳躍している間に、おれは二つのモンスターボールを人間が少し小さく見える地面にいるタキシードの野郎に向けて投げつけた。あ、博物館の天井が壊されてる。

おれの投球と重力が組み合わさった勢いでボールは勢いよく落下

し、ろくに警戒も出来ていなかったタキシードの男が頭に一つのモンスターボールの直撃を食らうのが見えた。なんつー爆撃だ。

「ぐあつ、貴様ああっ！！ スイッチ押されたいのかああっ！！」
十数メートルの高度から落下を始めるおれとギャロップに拡声機を向けて叫んでやがる。そんな余裕なんてないだろお前。

「それが貴様の選択か！ 喜べよ、貴様らの大事な炭鉱はドカ」
ギャロップの着地で尻と股間を中心に全身に激痛が回ったのと、何かがぴきつと凍てつくような音が響いたのはほぼ同じタイミングだった。

「このマニョーラ、先のモンスターボールのつはああっ！？」

がっ。乱暴に何かを叩き割るような音が直後に響く。よし、あいつらきちんと仕事してくれたか。

博物館から何かが壊れたりする乱暴な音が途絶えた。タキシードの野郎が変な声を拡声機で増幅させているのだから仕方がないか。

「この腐れポケモン共があっ！！ 爆破スイッチをぶち壊しやが……あ？」

ノイズが短く走ってから拡声器越しの音は聞こえなくなった。

その前から多くの足音からなるどどど、としか形容できない音はしていた。この街の住民たちを縛り付けていた爆破スイッチという名の鎖が解けたのだ。

頭を割るかと思うほどの怒号と微かに聞こえる悲鳴。尻と股間の痛みをこらえる俺の周りにはもう誰もいない。みんな博物館に大集合だ。やったなスタッフさんよ博物館は大盛況じゃねえか。建物は壊滅的だけだな。

おれはゆっくりギャロップの背中から降り、こちらに戻ってきたマニョーラとビーダル先にモンスターボールに仕舞う。

両膝についてギャロップもボールに戻し、ゆっくり仰向けになりながらボールを小さくしてベルトに吸着させる。

B級ホラー映画の怪物が出すような声を出しながら両手を股間と

尻にあてがう。くそつ、もうこんな無茶はしたくはねえ。

そうだ、そういえばアスルはどうした？ 動くなとは言ったが、言うこと聞いて待機していてくれるだろうか。博物館の周りの暴動に首を突っ込んでなきやいいんだけ

「凄いよ、悪い人達をやっつけ……」

ああそうだね痛そうだねギャロップにまたがって一緒に跳びはねたもんねそりや痛いよね私だってきつと痛がると思うわ。そんなことを思ってたんじゃないかこいつ。変なものを見るような目をしやがって。

「言つていいか？」

「え？」

「いまな、尻と股間がいてえんだ、向こうは危ないからしばらくここにいてくれ」

クロガネシティの重要施設二つを襲撃したバリバリ団。結論から言えば、こいつらは壊滅した。

タキシードを着ていた奴 炭鉱と博物館を襲った二つのグループのリーダー格の奴らだった は逃走したが、他の団員は殆どが捕まった。

バリバリ団とは何者なのか。ラフな格好をしていた奴らの殆どは金に困っていて、襲撃を成功させたら多額の報酬がもらえと言われてはいはいついてしまったのだという。

アマチュアの傭兵なんてのは大概死ぬ。プロフェッショナルのそれでさえ死ぬだろうに、バリバリ団とやらの幹部はを分かっているのか そんなことをぶつぶつ言っているのは、クロガネジムのジムリーダーであるヒヨウタだ。

あれから英雄扱いをされたおれは、おれとアスルにポケセンでも

う一泊させると主張して部屋にこもっていた。

おれはおれのために動いたのであって、誰かに感謝されるためじゃない。この街の住民に顔を見られたが最後、すげーだのありがとうだの、要らない言葉をふっかけてくるに違いない。

だが、おれの拒否権を突き破る方法は存在する。おれよりも立場が上の奴が来いと言えればいいのだ。

呼び出された場所はクロガネジムの前。そこには呼び出し人のヒヨウタが立っていた。心の中で舌打ちをする。

軽い挨拶を交わし、ヒヨウタの案内を受けて、おれはジムの中にあるヒヨウタにあてがわれた部屋の中の中にいた。

壁かけ時計を見る。長針と短針を見る限り、時刻は夜の八時ちょうどのようなのだ。

ジムリーダーともなると自由は制限されるらしい。

「警察の事情聴取やら何やらを受けて大変だったし、もう本当に疲れたよ。自分の勤めとはいえ色々大変なことをやった。明日からは博物館の復旧もあるし、ああいう手合いはもう勘弁だね」

若いジムリーダーは眼鏡を外して簡素な木製のテーブルの上にそつとのせた。赤いヘルメットは既にどこかに仕舞われていており、露わになった素顔はとても険しい。

まさか、三年前のおれとのジムリーダー戦を引きずってるわけじゃねえだろうな。やめてくれよ、おれはもうあんなのじゃねえぞ。

「大変ですね。でもおれは整体師でもマッサージ師でもない。肩が凝ったから揉んでくれと言われても満足させられませんよ」

テーブルの向かいにあるふかふかの椅子に座るジムリーダーにかける言葉はこんなものでいいのか？ おれも同じ種類の椅子に座っているが、いいのか？

「君面白いなあ。いやいやいいよ、疲れは寝ればとれるからね」

笑うジムリーダー。しかしあの時のことと部屋の殺風景な印象からして、その笑いはとても浮いて見えた。

一つの大きな部屋の隅に簡素なベッドと、部屋の中心のあたりに

は部屋の主とおれが座る椅子とその間にあるテーブルが置かれている。

壁掛け時計、クローゼット、タンス。それだけだ。娯楽に関するものは一切置かれちゃいない。テレビの一台もないってのはどういうことだ。

おれが不思議そうな顔を浮かべているのを見てか、ヒョウタは浮かべていた笑みを静かに取り払う。

「君に二つ言わなきゃいけないことがある」

言うが早いか、若いジムリーダーはおれに背中を折った。礼の姿勢。これが意味する所は一つしかない。

「ありがとう。君と君のポケモンの活躍がなかったら、あの時僕は死んでいたかもしれない。本当に感謝している」

「頭を上げて下さい、おれはそんな大層なことをしたつもりは……」
自分のことしか考えなかった行動だ、なのにどうして感謝されなきゃならない。

「あとはもう一つ。君はもう、そんな大層なことをして欲しくないね」

すつと背筋を伸ばしてからヒョウタは言う。眼鏡を外した彼の表情からは有無を言わせまいとする圧を感じる。

「といたしますと？」

「もしもこういうことがこれから先にあったとして、そういうことに首を突っ込むなど言っているんだ。いいね？」

「ご心配なく。おれだって好きで手を出したわけじゃないのですから」

おれの言葉はヒョウタの目を丸く、そして口を小さくさせた。

「ご忠告どうもありがとうございます。大丈夫ですよ、自分から死に行く真似はしません」

立ちあがりつつ口を開く。もうおれに用はないだろう。

「……君は、まだポケモンに辛くあたっているのかい？」

おれがこの部屋を出ようとすると、ヒョウタは鋭い口調で問いを

投げかけてきた。まだって、まだあのことを引きずってるのかよ。
「生ぬるいやり方は嫌いなんだ。あの時からおれは変わってないや、自重はするようになったが」

言いきって自分の口調がいつも通りになっていることに驚いた。
沸々と湧きあがる苛立ち、焦り。これのせいかな？

「君の名前は覚えてるよ。ノブオ君だよ、博物館を襲っていたバリバリ団を倒すきっかけを作ったのがノブオという名前のトレーナーだと聞いて、すぐにぴんと来たよ」

「そうかい、ジムリーダー様に名前を覚えてもらって嬉しいね」

「そりゃ覚えるよ。ズガイドスが倒したビツパを君は容赦なく痛めつけていたよね。踏んだり蹴ったり殴ったりして。頭大丈夫かなって心配したよ」

まさか敵意のこもった目つきでこんな心づかいをしてもらうとは思わなかった。

「おれはもうあの時とは違う」

「そうかい？　口だけならどうとでも言えるさ」

どうやらヒヨウタはおれが相当気に食わないようだ。おれはあんなの親の敵じゃねえんだぞ……

たっぷりと十秒は流れたと思う。

ヒヨウタはおれをまるで重罪人でも見るかのように見つめてくるから、おれもにらみ返してやる。

おれがビーダルになる前のビツパに暴行を加えたのは反省している。そのために二年もミオでこもってたんだぞ。

誰かを殺したりなんてしていねえ。そうでもねえってのにこいつはどうしておれを

「もう三年も前の話だからとやかくは言わないよ。そうだ、今日の挑戦者のあの子は君のなんなんだい？」

「連れた」

「……そうかい」

何を納得したかは分からないが、おれの耳は確かにその四文字を聞き捉えた。

「話はもう終わりだよな」

「終わりだけど、最後に一つ。良い旅を」

意外な言葉だった。もしかしたら、ヒョウタはおれを認めてくれたのかもしれない。

そうではないにしろ、焼け石に水だとしても気持ちよくこの部屋を出て行かせようとしてくれた心づかいには感謝しよう。

「ありがとう。明日から忙しくなるとか言っていたよな。頑張れよ」

衰弱 アナトリアのトレーナー、倒れる

恐れていたことが現実になった。アスルが熱を出して倒れてしまい、動こうにも動けない。

何かおかしいなというのは今朝から分かっていた。今日の天気は曇りで夜にかけて雨が降るというテレビの天気予報の内容をそっくりそのまま伝えた時、頭を軽くふらつかせながら応答していた。

ちよつと調子が悪いんだ、と苦笑いを浮かべていた時からそれが嘘だったと気付くべきだった。くそつ、無理をするなってあれほど言っていたのに……

「ごめんね、はあ、ここまで酷くなるとは思わなくて……」

心を見透かされた気がして、それを振り払う。アスルはエスパーでもなんでもない。

「いいよ、アスルは自分の心配だけしていてくれ。後のことはおれがどうにかする」

申し訳なさそうに、しかし口を開く気力もないのか、アスルはただ黙ってうつむいて小さく首を縦に動かしただけだった。

空は鈍い色をした雲に覆われている。腕時計 ある程度の衝撃と水圧には耐えられるというのが特徴で、どこのフレンドリイシヨップでも販売されている。を見れば、時刻は午後二時を過ぎたばかりだった。

アスルが病人とはいえ、幅の広い道路の真ん中で寝かせて処置をするのははばかれる。この天気だから人の往来は少ないが、好奇の目に晒すのはまずい。考えすぎかもしれないが、女の子に恥をかかせるわけにはいかねえ。

アスルの青いスーツケースを右手に持ち、アスルの身体をおれの背中に乗せて道路の端まで移動する。おれのバッグに錠剤の総合感冒薬があつたはずだ。そいつを飲ませよう。

「はあ、ごめんね、重いでしょ……」

「んなことねえって。ただ、道路の真ん中じゃ簡単な処置も出来ねえからちよつと辛抱してくれ」

おれ自身に言っている気がした。ごめんなアスル、正直言っただけ。体力がねえってことで勘弁してくれ。

整理された道路の端はうつそうと木や草が生い茂った森だ。日光がささない場所はどうも苦手だ、あまり近寄りたくはない。

おれは背負っていたアスルをそつと降ろして座らせ、肩と手に提げていた荷物も降ろした。

周りに人はいない。これで誤解からの通報という事態にはならないうだろう。

「ちよつと待つてろよ、風邪薬を出すから。錠剤は飲めるよな？」

おれのバッグを探りながら横目でアスルの様子を伺う。力無く頷くのが分かった。

右手にビンがあたる。手にとって見てみると、握っていたものこそが探していたものだった。セントラルで買っていてよかった。

ビンの中の白い錠剤を三つ取り出してアスルに手渡す。飲む際に水が要らないものであることを告げると、アスルはゆっくりとそれを口に運んだ。

これで少しは具合がよくなればいいんだけど。いや、よくなってもらわないと困る。

さて、これからどうする。アスルはただの風邪だろうが、こじらせるともまずいのは火を見るよりも明らかだ。

右に曲がってテンガン山に至る道と206番道路至る道に分岐する所まで歩き、そこから東に進路をとって208番道路に足を踏み入れてヨスガシテイへ行く。駄目だ、テンガン山にある洞窟を抜け、208番道路に至るだけの余力がない。

ここから北にある206番道路の上に伸びるサイクリングロード

をどうにか徒歩で移動してハクタイシティに到達する　これも駄目だ、病人を伴って移動できるルートじゃねえ。

くそ、詰んだか？　いや、待て。いつだったかおれはポケセン以外の場所でも寝泊りをしなかったか？　ちようど、こういう不便な場所で構える民間の宿泊施設の戸を叩いて？

おれのバッグの中にあるはずのタウンマップを手取るべく、両手をバッグの中突っ込む。

……あつた。長い間使ってきてくしゃくしゃになりかけ、おれの書き込みのせいで普通のそれとは印象の違うタウンマップだ。クロガネシティを示すブロックに右の人差し指を添え、ゆっくりと上になぞっていく。

おれの指は地図上の207番道路を北上し、右に曲がる207番道路とそのまま北上すると206番道路に突入するトの字の場所で止まる。

ここに鉛筆で小さな丸が描かれている。そうだ、ここにあるのは

……

「ギャロップ、仕事だ」

アスルから離れた場所にギャロップが入っているボールを投げる。背中から光を感じながらアスルに告げる言葉を考え、口を開く。

「悪いが、ギャロップの背中に乗ってくれないか？」

疲れ切った顔を上げるアスル。沈黙を続けるのは続きを言えという意思表示なのだろうか。

「ここから北に行くと宿屋があるんだ。ちょっとぼろいけどな」

「……燃えているけど、大丈夫？」

「大丈夫だ。こいつの炎にまかれて死んだ奴なんて聞いたことがない」

アスルに向けて右手を伸ばし、もう片方の手でギャロップの額に触れる。

「この子を背中に乗せて歩いてくれ。間違っても激しく走ったりして振り落とすなよ」

わーってるよ、心配しないで任せてくれ　ギャロップの高い鳴き声が、おれにはそう言っているように聞こえた。

左手首につけている腕時計は、15時25分を示している。

空は既に黒みを帯びた灰色の雲に覆われている。景色だつて暗く見えてきた。そろそろ目的の宿屋に着くはずだが、状況のせいかわけに焦ってしまう。頼むぞ、まだ雨は降らないでくれ。

薬の効用とギャロップの高い体温からか、アスルの様子は少しは良くなったように見える。身体をギャロップの背に預けてうとうとしているのを見ると、焦る気持ちがずっと消えていく気がした。

「アスルは寝ちまったからな、気をつけて歩いてくれよ」

念のために釘を刺しておく。いつもより小さくいいと鳴き声を上げたギャロップの動きの幅が小さくなった。

しかしどうもビジュアル的には危ない場面なんだよな。ギャロップが小さくしているとはいえ、炎に巻かれているわけだから……魔女狩りを彷彿とさせる奴もいるかもしれねえな。

「ようやくトの字の分岐が見えてきたな……」

厳密にはトの字ではなく十字路なのだが、あの宿屋に続く道はナンバリングされた道と比べると小径であると認めざるを得ない。近づかないとよく分からないのだ。

「……ん、ごめん、寝てた」

ギャロップの背からいかにも寝起きといった様子の声が聞こえる。「そのまま寝ていていいって。ギャロップだつて起こさないように頑張ってたんだ」

「それじゃ、お言葉に甘えて……そうだ、宿屋にはいつ着くの？」

もう十字路にはたどり着いている。ギャロップの額に手をやり左に曲がるように言い、それからアスルに向けて口を開く。

「十分も経てば着くよ。ただ、外見はポケセンのようにきれいな場所じゃない」

「え？」

「六十過ぎたお婆さんが十歳ちよつとの孫娘と一緒に細々とやつて
いるんだ。清掃は行きとどいてはいるんだけど、建物が古くてな」

「ああ、そうなの」

「それでもいいところだった。一応浴場もあつて……入浴剤入れた
お湯なんだけどさ。温泉じゃないつてのがネックかもしれないけど、
そこそこのいいものだったし」

不安要素を無くしてやるのもおれの役目だ　なんとなくそう思
った。

ナンバリングされた道路とは違い、道路整理が成されていない。
小径であることと、周りがうつそうと生い茂った雑草や幹の太い木
が隙間なく並んでいる景觀が、この道に陰気な印象を与えている。

この狭い道の途中には、木製の簡単な看板が（やつぱり湿ってい
るのだが）「ペンション　森の宿　この先2km」というように立
てられている。おれはこれを見かけるたびにアスルに逐次看板の情
報を教えた。

本当は誰かがこの道を先に通っていることも教えてやるべきなの
かもしれない。

足跡が人間一人分多いことから説明がつけられたが、おれたちには
関係ないだろう。アスルだつてうるさくされたら治るものも治ら
ないだろうし。

森の宿とはよく言ったものだと思う。天候のせいもあるが、周り
の暗い景色を見るとどうも陰鬱な印象を受けてしまう。建物のぼろ
さを見ればこの印象はほとんど加速していく。

宿屋とは思えないほどに小さな建物。所々黒ずんでいる白い外壁
には苔も生えている。仰々しい門などはなく、建物自体はここでひ
っそりと暮らしている人間のちよつと大きな家という印象を受ける
造りだ。

アスルは自分でしっかりと立てるくらいには回復していたようだ。
ギャロップの背から降りたのを見てから、おれはモンスターボール

から赤い回収光をギャロップにうちこんで仕舞う。

きちんと仕舞ったのを確認し、ボールを小さくしてからベルトに吸着させると、おれが運んでいた青いスーツケースにアスルが手を伸ばしながら何か言うのが聞こえた。

「へえ、大きい家だね。でも、何か汚れているけど……大丈夫？」

「中はそれなりにきれいだっただけだ。記憶が正しければ、食事つきでもとても安かった気がする。街のホテルと比べりやかなり安い」

「ああ、うん、大丈夫。自分の分は自分で出せるわ」

一応、前にアルバイトで稼いでいたお金で財布は潤っていた。アスルが出せないと言ってもある程度なら腹を切れたが、良かったと思ってしまう。

白い大きなドアを開ける。やや軋んだ音をたて、ドアについているベルがからんからんと来客を知らせた。

奥の方から細く高い声ではいいはいはい、と聞こえる。ここの主のお婆さん　白の割烹着を着ていて、顔にしわをもつオーナーだ　がやってきたのはしばらくたってからだった。

「お客さんかい？　あらら、どうしたのその子！　すぐに中にお上がんなさいよ！」

一人で立てるまでに回復はしていたが、やはり顔色は優れていないアスルの様子を見て、オーナーは彼女の手を引いて中に連れ込んで行く。

二人に続いて玄関で靴を脱ぎ、シンオウ地方以外では珍しい（らしい）二重の扉　冬の寒気を招かないための措置らしい　を抜けていく。玄関に靴はいくつかあるが、それが先客がいる証になるかどうかは分からなかった。

広めのエントランスホール兼食堂。模様などが一切ないカーペットの上に木で出来ている円形のテーブル。半径は一メートルと少しか。

ここには幅広のソファアが二つある。とてもふわふわしていそうな、地味に高級感が漂う代物だ。

白いブラウスと紺色の布地に黄と赤のロングスカートといういでたちの、身体の線が線の細いオーナーは、アスルにその内の一つに横になるよう勧める。

「さ、ここで横になりなさいな」

「えっ、ありがとうございます……」

「いま毛布を持ってきてあげるからね、その後で木の実スープを用意するからね」

まさかここまでやるとは思わなかった。

この部屋は客室がある二階へと至る階段と、一階にあるスタッフのプライベートな空間に通じているはずだ。オーナーがこの部屋にあるドアを開けて消えたということは、自分の部屋にでも行ったのか？

どんどん、と天井から小さな音がする。やはり先客がいるらしい。道路を歩いていたが、雨を避けるためにここに寄った。そんなところだろうか。

「ねえ、ノブオ」

「どうした？」

「さっきと比べたらだいぶん楽になったわ。ノブオに貰ったお薬もよく効いたみたいだし」

「そうか、そりゃあよかった」

「でもそのおかげで、服が汗でびしょびしょで……」

後で部屋をあてがってもらうさ、そこで着替えればいい。おれはそう返して、そしてアスルに関して初めて知ることに目を開いてしまった。

アスルは眠たそうに頭にかかるく巻いた白い布をとる。すると、後ろに少し伸びている金髪が露わになった。

ああそうか、そっぴやアスルは遠い地方の人間だったな。時々それを忘れるから困る。

森の宿　ゆるやかに流れる時間

アスルの後ろに少し伸びた金髪を初めて見たおれはため息をついた。きれいだなと思つてしまったのだ。

髪も軽く巻いた白い布の中に仕舞つていたのだろう。ストレートヘアーながらも、押し固められた髪が見せる独特の印象を放っている。

「ノブオ、どうかした？」

「なんでもない。そうだ、今のうちに財布を出しといてくれ」

おれはアスルの持ち物である薄い青色のスーツケースを、ソファの上で横になる持ち主の近くに置いた。

アスルが普段と比べて力のない動作でスーツケースを開けている間、おれは彼女に背を向けてもう一つのソファに座り、辺りを見回してみた。

このエントランスホールと食事場所を兼ねた空間には大きな窓が二つある。そこから外を見れば雨が降っているのが見えた。よかった、あと少し遅れていたら雨に打たれて憂鬱な気持ちになっていたかもしれない。レイニーブルーってやつか。

ポケモンを模った木彫りの小さな人形が、窓枠の下にある棚に陳列されている。

（当然だが、自動人形でもない限りは）一寸も動かない人形は、馬鹿げてはいるがこのペンションに時間が流れていない錯覚を覚えさせた。

おれは並べられた人形のひとつに手を伸ばし、掴み上げる。ピカチュウを模った木彫りの人形は細かいところまでよく作られていた。ちゃんと尻尾の形で性別を判断出来る。尻尾が割れているのでメスの個体だ。

隣にあるコダックの人形も同じ。その隣も、そのまた隣の人形も、精巧な作りをしてじっと黙っていた。

さつきから気にはなっていた。上からはほとんど足音らしきものがずっと鳴っている。いったいなんなんだ？

「はいはい、ごめんね待たせちゃったね」

白いブラウスと紺色の布地に黄と赤のチェック柄を持つロングスカートを着た、身体の線が細いお婆さんのオーナーが分厚い毛布を持ってやってきた。

毛布をアスルの体の上に乗せた時、アスルがテーブルの上に用意していた財布に気付いたらしい。

「あらお嬢さん、ここに泊まりに来てくれたの？」

「はい。そのノブオに、もう夜も遅いけど、ちょうどいい宿屋があるんだって教えてもらって」

「あらら、彼氏さん？」

そんなのじゃないです。おれが断りを入れて、それから一日泊まる分だけのお金を手に持つ。街の安いホテルよりも金額は抑えられる。

「テーブルの上にあがっている財布は彼女の、アスルっていうんですけどね、持ち物なんですよ」

「うん。ねえ、私の代わりに財布からお金を出してくれない？」

頷き、アスルの財布 幅も厚みもある、何らかの革を使った高級感に溢れている 手に取り、そこから必要な金額を取り出す。『今晚は二人泊まれるでしょうか』

「もちろん。ちよつと待ってね、いま鍵を渡すから」

そう言うとお婆さんはもう一度奥の方へ引っ込んで行ってしまった。

「あのお婆さん凄いな。一人でこのペンションを切り盛りしているってそうそうないと思うわ」

アスルが顔だけ上げて言う。口では同意しながら、前にここに泊まった時にはいた孫娘の姿が見えないことに戸惑いを覚えていた。

長い黒髪がよく印象に残っている。オーナーの若い頃にそっくり

なのだとオーナー自身が言っていたあの容貌は、かわいらしいよりは活発な印象があった。ちょうど、アスルと似た感じ。

小さな体でオーナーの仕事をよく手伝っていた。接客態度は子供じみていながらもそれなりに良好で、ゆくゆくは跡を継ぐのだろうと想像させる、そんな良い子だった。

もしかすると、ポケモンと共に旅に出ているのかもしれない。そこまで考えて、これが一番納得できる答えだと踏む。確認はとらないようにしよう。地雷を踏んで泣きを見るのはおれだけじゃない。「はいはい、これがあなた達の部屋の鍵ね。タグについてるシールの番号と対応しているわ」

しわがれた小さな手にもつ二つの鍵をおれに手渡したオーナーは、あとでアスルの部屋に木の実スूपを持っていくと言って三度奥に引っ込んで行った。

オーナーの後ろ姿を見届けたアスルはゆっくりと起き上がり、自分の頭を覆っていた白い布と毛布をまとめて右脇に抱える。

二階に行くのだと察しをつけ、アスルの青いスーツケースのなかに財布を入れ、これと共に自分の荷物を持ち上げる。

「ありがとう。やっぱりノブオって優しいんだね」

「優しいとかそんなのじゃないって、病人の連れがいる人間の義務ってところか」

謙遜しないでいいんだよーなんて言いながらアスルはおれの後ろについて階段を上がってくる。分かってないな。

先にアスルの部屋の戸を開錠し、アスルと一緒に部屋の中に入っていく。

青いスーツケースを部屋の中に置き、アスルが毛布に包まれベッドの上で横になったのを見てから、おれは自分にあてがわれた部屋に入る。

部屋のレイアウトはどこも同じらしい。小さなブラウン管のテレビ、ふかふかそうにベッドメイクされたシングルベッド。

レイアウトだけは街のビジネスホテルのシングルルームを意識している、そんな感じがする。ここにはないのはシャワー室くらいのものだろうか。

浴場（入浴剤を入れています、温泉ではありません。という注意書きつき。わざわざそんなものを用意するあたり、オーナーの人柄がよく分かる）なら二階の廊下を玄関とは反対側に行った先にあるあとで行ってみようか。

それよりも食堂にあったポケモンの木彫りの人形を見てみたい。オーナーがいれば、あれらについての話も聞いておきたい。

本来なら外に出てポケモン達に適度な運動をさせてやりたいが、生憎の雨である。

こういう時はいつも、ポケセンの設備がいかに充実しているかを思い知らされる。二階にあるポケモンバトル用の空間なら外部環境を無視して動けるから、お陰でいつも盛況してい

「おっ、こんにちはー！」

浴場の側から若い女の声が聞こえる。先の二階の足音はきっと彼女のものだったに違いない。

声がする方に向き直ると、そこには今時の若者のファッションに身を包んだ少女がいる。青空を想起させる青色の半袖のワンピースにホットパンツ。肌の露出が多い、アスルとは対極の側にいる印象がある少女だ。

顔立ちは中々良い。女の子向けの雑誌によくいる読者モデルとかいうものに抜擢されそう（実際読んだことはないが）な感じを受ける。

顔のどのパーツを見ても目をそむけたくなる形がないし、それらがきちんとバランスよく配置されているのだ。

「きみも宿泊者？」

「そうっすよー。これからお風呂ですか？ それとも外に？ いやでも雨降っちゃってますよねー」

人当たりの良い調子はアスルと似ているが、ベクトルは違う方向

を向いているようだ。初対面の人間相手にこうも打ち解ける様子を見せて大丈夫か？

「ああ、下にあるポケモンの人形を見たいなと思って」

「お兄さんって意外と少女趣味があるんですねー」

少女趣味い？ いやなるほど、確かにそう捉えられてもおかしくはないか。

「ポケモンが好きなんだけだ」

「やだもう、ちょっとからかってみただけじゃないですかー、そんなに怒らないでくださいよお」

いたずらっぽく笑うこの子に友達はいるのだろうか。おれが言えた事じゃねえんだけど。

「そうだ、そういえば付き添いの人がいきましたよね。あの人って彼女さんだったりします？」

「そんなのじゃないな。おれとあいつは異性として好き合ってるから一緒にいるとか、そういう間柄じゃない」

「へえー珍しいですねえ。それで、お兄さんは」

「ノブオだ、よろしく」

一瞬、この子の表情が曇ったような気がした。おれの顔に何かついているだろうか。

いや、さっきのは幻覚かもしれない。メルツェルは人がよさそうに笑っている。

「あたしはメルツェルっていいいます」

あれ、この子はこの地方の住民の顔つきに見えるが、アスルのように遠い地方からやってきたのか？

「もちろんトレーナーとしての名前です。本名じゃないですよお」

「やっぱりか。そういや、メルツェルのように登録名をつける奴が最近多いんだよな、紛らわしいったらありやしねえ」

「えー、登録名をつける権利にケチつけるんですかあ？」

軽い調子で抗議をするメルツェル。そんなつもりはなかった、気を悪くしたなら謝る。ベストの答え方ではないが、そう口を開い

たおれは階段を下りる。

「じゃあ付き合っちゃおうかな。ちょうど暇してましたからねー」

メルツエルは鼻歌なんて歌いながらおれの後ろをついてきて、柵から人形を手にとってアスルが横になっていたソファーに腰を下ろした。

「ところで、ノブオさんって……」

「ん？」

「いえ、なんでもないですよ」

はつきりしねえな、何だってんだ？

おれも人形を手にとってもう一つのソファーに腰を下ろす。おつ、ギャロップの人形が凄い。身体から燃え上がる炎まできちんとそれらしく作ってる。

木でできた小さなギャロップを感動をもって眺めていると、またとんとんと足音がする。音がする方を向くと、そこにはペラップの人形を持ったメルツエルがいた。

視線を下にやる。きれいな脚の先には、足首のあたりにレースがついた白い靴下に包まれた小さな足がある。これがさっきから踵を地面につけて足の先だけを上下運動させているのだ。とんとんとんとん。お前だったのかよ。

「なあ、止めてくれないか」

「え？」

何を咎められているか分からないといった様子でメルツエルがこちらを向く。おれは目線で彼女に教えてやる。

「あつごめん。ついつい癖でやっちまうんですよー」

「いや、そこまで嫌だったわけじゃないが、助かる」

頭をかいて苦笑いを浮かべるメルツエルを見て、憎めない女の子だなと強く思う。

それに、咎めの言葉を受けて落ち込んだ様子を見せない。メルツエルの予想以上の明るさにおれは安心していた。

「そういえばさ」

「どうしましたー？」

「なんでメルツエルって名乗ろうと思ったわけ？」

それはですねー、と言葉を伸ばすメルツエルは手に持った木彫りのペラップの人形を逆さまにしてゆっくりと左右に振る。

ペラップは色とりどりの体毛を持つ鳥ポケモンだが、黒い顔ととさかが八分音符の形をしている。尾羽に至ってはメトロノームの棒に似た形をした、音楽好きには受けそうなポケモンだ。

「それはなんなんだ？」

「分からないんですかー？ ほら、このペラップの人形ってよく出てくるじゃないですか。だから本物のように、尻尾がメトロノームのように見えるでしょ？」

「見えないこともないけどさ、メトロノームがメルツエルって名前と関係があるのか？ メの字しか合ってねえぞ」

「昔々にメトロノームを作ったといわれる人の名前がメルツエルさんっていうんですよ。それに、遠い地方の人ってかつこいい名前が多いじゃないですかー」

メトロノームとメルツエル。なるほど、そういうわけか。リズムをとるのが好きなこの少女ならば、メトロノームにちなんだ名前を思いついても不思議ではない。

「でも、メルツエルはメトロノームの特許をとっただけなんだって」
上からアスルの声がする。薄い桜色をした、布地こそ薄いものの肌の露出を抑えた普段着だ。ふわふわしている長袖の服と足首のあたりまで裾がありそうなパンツ。いつも民族衣装を着ているアスルらしい格好だ。

「メトロノームの原型を作ったのはウインケルっていう人なの。メルツエルはウインケルのアイデアを横取りしたって聞いた。あつ！」
階段を降りるアスルはメルツエルを見て両手で口を押さえる。メルツエルも驚いた声を出したあたり、二人には面識があるのか？

「メルツエルじゃない！」

「アスルじゃん！ えー、どうしてこの人と一緒に？」

「それはね、ごほっ」

「えっ、大丈夫？ 風邪ひいてるの？」

そうなのと返しながらアスルはおれの右隣に座ってきた。途中から割り込んできたが、会話は筒抜けだったのだろうか？

「部屋で休んでいればよかっただろ？ 何かあったのか？」

「お婆さんに階段を上からせるわけにはいかないと思って。ほら、木の実スープを運んであげるって言うていたじゃない」

確かにオーナーは言うていたが、お前の気遣いは向こうに悪いだろう。

「セントラルで知り合って以来だよ、元気だった？」

「うんうん、元気でやってるよー。でも、メルツエルさんが特許をとっただけだとかそんなの知らなかった」

「メルツエルさんだっといういろいろ改良とかはしていたと思うわ」

アスルは申し訳なさそうに微笑む。メルツエルと、彼女が名前を借りた人物に対するフォローだ。

いいって、あたしだって初めて知って勉強になったんだからー。

屈託のない笑顔でメルツエルが返すのを見て、改めてメルツエルが明るい人間であるのを思い知らされる。こいつ何言っても怒らないんじゃないか？

にしてもこの二人は仲が良いんだな。女同士ってあまり良い関係になりにくいらしいんだけどなあ。

その後しばらくして、アスルはオーナーからカップ一杯の木の实スープを手渡された。

オーナー曰く、使った木の実ラム種だという。

ポケモンの全ての状態異常を取り除く作用があるために高価なものとして知られているが、アスルはそのことを知らないようだ。教えたとこで彼女に窮屈な思いをさせるのは分かっているから言わ

ないでおいた。

スーヴの中のラムの実が効果を發揮したのか、夜になるとアスルは幾分か元気を取り戻したようである。メルツェルにせつかくだからと言われたアスルは一緒に浴場の方へ行った。

雨も上がっているし、二人が行って少し時間を開けておれも浴場に入ろう。それまではポケモンの人形を眺めていようかななんて考えたおれは、階段を降りながらある事に気がついた。

浴場は男女の仕切りがついている。十分なブロッキングを果たすかと言えばそうでもないが、おれにはわざわざ覗きをやる連中の心理は測りかねる。

今度はビーダルの木彫りの人形を手にとってソファアに座って眺める。まるまると太った身体と大きく見開いている目。顔の大きくふわつとした体毛や大きな尻尾などもよく出来ている。

ビーダルは弱いから使いものにならないと言って、多くのバッジを持つポケモントレーナーの多くはこれを手持ちに入れるケースが少ない。おれから言わせてもらえば、ビーダルはきちんと使ってやれば弱くはないと胸を張って主張できるのだが。

「あらら、それ気に入ってくれたの？」

オーナーが後ろから声をかけてきた。お疲れ様ですと返しながら振り返り、おれは気になっていたのである。

「これとかあれとか、ポケモンの木彫りの人形は全部オーナーが作ったものですか？」

「そうそう。中にはミチコの作ったものもあるけど」

寂しそうな声色と表情。ミチコはオーナーの孫娘の名前のはずだ。「前にここに泊まりに来たことがあります。良いお孫さんですよ、ミチコちゃん」

「あらありがとうございます。でもね、ポケモンと触れ合いたって言うって旅に出ちゃってね。最後にあなたが持つてるビーダルの人形が、ここで作った最後の人形になるわ」

恐らくはオーナーの方が人形制作のスキルは上だろう。けどお

れにはどちらの方が優れているというのは、あの人形達を見ての判別はできなかった。見る目がないだけかもしれないが。

「よく出来ていますよね。そうだ、そろそろお風呂を使わせていただきます」

「あらら、そうなの？ そうだ、一つだけ聞いていいかしら」

「なんででしょう」

「あの子はまだ大丈夫？ ラムの実のスープが効いてくれたらいいんだけど」

「だいぶ体の調子は戻ったみたいですよ。もう一人のお客さんと一緒に風呂に入っているみたいですし」

「あらら、よかったわ。お友達は大事にきなさいね」

にっと笑ってしわの多い顔にしわを増やすオーナー。おれも笑って返し、人形を元の位置に戻す。

「年寄の冷水と思われるかもしれないけど」

「え？」

いきなりトーンの低い声を発したオーナーに驚く。何を話すつもりだ？

「三年前だったかしらね。お客さんから、クロガネジムを強引に攻略したって有名なポケモントレーナーがいたってお話を聞いたの。なんでもその男の子は怖い顔をしているらしくてね。細い目にいつも緊張を湛えているみたいなの口だとか、なんとか」

「ええ」

「その子は手持ちのポケモンに罵詈雑言を投げかけ、敗れたポケモンを暴行し、鬼のような形相で指示を出したらしいの。どういう方針か分からないけど、少なくともトレーナー像からは離れているわね、そう思わない？」

「違わないですよ。だが、そのポケモントレーナーは確固たる意志を持ってそうやったのだ。」

「そのポケモントレーナーの名前はミヤモト・ノブオ。三日前にコトブキシティのセントラルの前にある広場で開かれた大会で、ジム

バッジを七つ持っている人を対象にした部門で優勝した人も同じ名前。あなたが後で宿帳に記帳した名前も同じ」

オーナーはここで言葉を切る。次はあなたが口を開きなさいと、しわの多い顔が語っているような気がした。

「おれは……」

「あなたはあのノブオなの？」

黙ってうなずく。口を開こうにも、唇が重い。

やっぱりとも言いたげにオーナーはため息をつき、

「今も三年前と同じように、おかしい態度でポケモンと向き合っているの？」

「もうポケモンに乱暴なことはしてませんよ。言ったところで信じてもらえるとは思っていないですが」

オーナーはまっすぐにおれを見つめてくる。視線をそらさせない見えない力がある。

「どうしておれがミヤモト・ノブオだって分かったんですか」

「昨日来たお客さんが……確か、アキラとかいったかしらね。セントラルの大会で優勝したトレーナーの名前がミヤモト・ノブオだってことを教えてくれたの。さらにお客さんが、ノブオは見慣れない女の子を連れてくるって教えてくれてね」

なるほど、アスルは外見全てが特徴だらけの女の子だから、もしもオーナーがとても鈍感だったとしても分かるってわけだ。

にしてもアキラだと？ まさか、あいつが最近ここに来たってのか？ おれをあんな目に遭わせたあいつが？

「ところで、聞いてみたいことがあるのだけど。どうしたら公共の場でポケモンに乱暴出来るのかしら？」

「簡単ですよ。そうしてもおかしくない事情があれば、誰だって同じことをします」

「よく分からないわね。それって答えになってる？ ……それは言いたくないの？」

オーナーの声の調子から分かっていて尋ねられているような気が

した。確認のための質問。おれはそつと頷いた。

「……そう。たぶん、口くなことがなかったんでしょう？ 無理をして話させることじゃないから」

「助かります」

頭を下げ、おれは二階へ行くとする。そろそろお風呂の方に行こうと考えたのだ。

アキラのことは聞かなかったことにしよう。吐き気がする。

「そうそう、一つ忠告しておくわ」

「なんです？」

「二年も活動を停止していたから大丈夫だと思うけど、あなたの名前はとても蔑まれていたわ」

「……つまり？」

「新聞もインターネットもないこんな場所に住む私でもあなたのことを知ってしまった。なら、街に住んでいたり旅をしている人達もつとあなたの情報を掴む機会があるわ」

なるほど、そういうことが。

「私は、あなたが悪評のついたミヤモト・ノブオじゃないって思ってるわ。ポケモンに優しく出来ない人が他人に優しく出来るはずがないもの。アスルちゃんと一緒にいて、あの子が風邪をひいてもあなたはきちんと面倒を見た。そうでしょう？」

「そう見えます？」

「もちろんよ。アスルちゃんはあなたを嫌っている様子じゃなかったし、だからああ、反省したんだなって分かったわ」

オーナーは笑う。とても人がよさそうに。

「ささやかながら応援するわ。アスルちゃんともうまくやっていくんだよ」

笑い返して会釈をする。

おれのことをきちんと分かってくれる人がいる。そのことがどれだけ助けになるか、今になってようやく分かった。

二階の廊下にあがると同時に、浴場の方から一つ大きな声が聞こえた。アスルとメルツエルが浴場の更衣室で喋っているのだろう。やけに大きな声だ。いや、メルツエルが大きい声を出しているだけか。

一度部屋に戻って入浴の準備をし、男湯の更衣室に入ろうとして「うわーっアスルって脱ぐと凄い！」

「きゃっ！ ちょっとメルツエルなにするのっ！」

「うわっうわー！ これは男は黙ってないよこれ、だってとてもすげばっ！」

メルツエルの馬鹿でかい声がやられ声でしめくられるのと、何かが大きな音を立てて倒れる音がよく聞こえた。

「……おれ達は静かに入ろうぜ」

ベルトから六つのモンスターボールを手につ。小さくなった紅白の球は同意してくれるかのように震えていた。

捕獲 アナトリアのトレーナー、思いを胸にボールを投げる

「私、そろそろ二匹目のポケモンをゲットしたいんだけど、アドバイスお願いっ！」

おれは寝袋のジッパを開けながら、開かない目をどうにか開けようとする。

寝起きにアスルの大声ときたもんだ。おれの鼓膜をぶち破りたいのか。

「おい、朝起きたらなんて挨拶をするか言ってみろよ」

「おはようノブオ！　それで、アドバイスをお願いしたいんだけど、だめ？」

もしかしたら、昨日のおれの言葉を必要以上に重く受けとめているんじゃないだろうな。

お前のポケモンはコダック一匹だろ？　だったらこの先きついから、近いうちに野生ポケモンの一匹でも捕まえた方が良くぞ　確かにそんなことは言った。アスルのためを考えて言ったださ。

思い立ったが吉日なんて言うけどよ、行動力が高すぎてついていけないよ。

「……メルツエルに頼んでみたらどうだ」

「だってメルツエルがノブオに頼んでみたらーとか、あたしじゃアドバイスなんてできないーとか言うのよ！」

そっぴや、メルツエルが持つてるバツジの枚数はアスルと同じ一個だったか。だからとはいえ力になれないってことはないだろうよ。「分かった、分かったからもっと声を小さくしてくれよ。耳が痛い」アスルが少し目を開いて視線を下にやる。眉尻が下がって落ち込んでるのがよく分かる。ちよつと言い過ぎたか？

にしたって爪が食い込むほどに拳を握りしめなくなっただけいいだろうがよ。朝っぱらから緊張しすぎじゃないか？

「空きのモンスターボールはあるか？」

首を縦に振るアスル。声を小さくしろとは言ったが、口に力を入れて横一文字を結ばなくなっただけいいだろうよ。野生ポケモンの捕獲はそんなきつい事じゃねえんだから。

今日思いついたことかもしれないが、そんなに余裕がなくて切迫したってものじゃないって。それに、それよりもっと大事なことがある。

「なら、野宿の片づけをしよう。ここを汚してテンガン山のイメージを悪くしたらアレだしな」

ペンション「森の宿」を出発したおれ達は、折角だからお供させてえなんていうメルツェルを旅のメンバーに入れてヨスガシティを目指していた。

おれは肩に旅行用バッグをかけているが、アスルとメルツェルはそれぞれ青と黒のキャリアー付きスーツケースをこころして歩いている。

女の子が二人揃えば会話は弾むようだ。

アナトリアの民族衣装である、頭髪を隠す程度に軽く巻いた白い布をなびかせ、ベージュ色の大きな布地に色とりどりの絨毯模様が縫われている服と、同じような意匠のロングスカートを穿くアスル。アスルが身体のラインをぼかす服をよく着るのに対し、メルツェルはホットパンツに灰色がかった白色のＴシャツといった割と自己主張の強い服装だ。

服の趣味には違いがあるが、二人は楽しそうに話をしていた。二人しておれの存在を忘れているんじゃないかと思ってしまう程に。

ただ、メルツェルの調子がおかしいなと思うところはあった。アスルとメルツェルの話題がおれについてのものになった時、アスルはおれをセントラルの大会で優勝した人間だと説明してくれた。

その後でおれが改めて名乗ったんだ、フルネームで。するとメルツェルの顔色に陰りが見えて、でもやっぱりそれは幻だと思わせるかのようになりを潜めていった。

あの評判の悪いトレーナーと同じ名前。だけど、あんな人と一緒にするのは失礼にあたるわ……そんなことを思っていたに違いない。もしかするとメルツェルはヨスガシティで情報収集をするかもしれない。

おれがあのもやもと・ノブオなのかどうかを確かめるために。評判の悪い奴といたって何の得にもならないのは火を見るよりも明らかだ。

ヨスガシティに向かうためには、207番道路からテンガン山の洞窟に向かい、そこを抜けて208番道路に出てずっと歩いていけばいい。

ただ、森の宿からヨスガシティまでは一日中歩いてても到達できる距離ではない。外で夜を過ごし、朝日を迎えなければならぬのは言わずもがなだ。

おれは洞窟を抜けた後の開けた場所で野宿をすることを提案し、実際におとずれて安全を確保した後に寝袋と焚き火の用意を始めた。洞窟を抜けた後の場所は開けているが、同時に高所でもある。何かの事故があつて崖から転落して死ぬつてのは非常にまずい。

ここに詳しい人間がボランティアで拵えたのか、危ないところは木製の柵が不完全ながらも防護の役目を果たしていた。

これならば安全だと踏んだ俺はここで一夜を明かすことを提案し、二人の賛同を得た。

アスルはこれが初めての野宿だと言ったが、寝袋一つはちゃんと用意していたし扱いもきちんと出来ていた。

メルツェルも自分で自分のことをしっかりとやれている。二人が

予想以上に出来るので安心した。

おれ達三人は焚き火を囲って寝袋の中に眠って一夜を過ごし（テントなんてお上品なものはない）、後片付けを済ませてから歩き旅を再開する。

下からは川がごうごうと流れる音がひっきりなしに聞こえる。とりあえずは下の草原を目指すことにして、おれは前を歩く二人の会話を耳を傾ける。

「ねえアスルー」

「なあに？」

「どうしたらそんな身体になれるのー？」

あくび交じりにとんでもねえこと尋ねやがったぞこいつ。

「それは分からないわ。だって、何か特別な器具を使ったとかいうのでもないし」

「うーん、やっぱり親の遺伝かあ。いいなあ羨ましいなあー」

ため息をつくメルツエルにアスルは困った笑顔を向ける。この手の話題は得意じゃないのかもしれない。

そうだ、もつと簡単に考えれば得意じゃないんだって断言できるじゃないか。

雲の一片の欠片もない空からは容赦なく太陽光がおれ達を熱しているのに、アスルは今日に至るまで全身の線が隠れるアナトリアの民族衣装を着ていた。

決してメルツエルは貧しい体つきをしているってわけじゃない。人は自分がないものを求める。きっとそうなのだろう。

そういえば、アスルはどこで野生ポケモンを捕獲するつもりだろうか。ここのあたりの捕獲スポットについては知らないだろうから、教えてあげよう。

「話の途中で悪いんだけど、アスルは空きのモンスターボールを持っているか？」

朝の会話の続きなのだとすぐに分かったか、すぐにアスルはこち

らを向いて頷いた。

落ち込んでいるのだろうか。どうもいつもの彼女らしくない。表情が死んでいるように見える。

「それじゃあ、草原に出たらコダックを出してくれ。手には空きのボールを持っててくれよ」

アスルは躊躇いがちに頷きを返す。なんだよ、変なことを言ったか？

眼下にあるごうごうと流れる川を見て表情がこわばったのだろうか。それとも、何か別なものに震えているのか？ おれはエスパーじゃない。推測は立てられても確定は出来ない。

「ここを道なりに行くと階段があつて、そこから草原に出られる。そこの隅の方に馬鹿みたいにでかい草むらがあるから、そこでポケモンを捕獲するぞ」

「わかった。でも……」

「でも、どうした？」

「うっん、なんでもない」

その顔ならなんでもあるだろうが。何か悩みを抱えているんじゃないかあるまいな、そのためのおれだろうがよ。何かあつたら言ってくれよ。

架けられた橋を渡り、険しい渓谷を突破するために作られた山道を歩いたおれ達は、ようやく草原に接続する長い階段の前にやってきた。

おれの白いスニーカーが土と砂に汚れて色を変えていた。アスルのベージュ色をした細身の靴も、メルツェルの黒い革靴も同じように汚れてしまっている。出発する前にある程度きれいになっていた意味がなくなっちゃった。

まあ、こんな事を言っても無駄か。旅をする上で一番汚れるのは

靴と足元なのだと相場が決まっている。

「あつ、ノブオさんが綺麗にしてくれた靴が汚れちゃってる！」

メルツエルはおれの目線をたどってこれに気付いたらしい。

彼女はおれを申し訳なさそうに見つめ、アスルはようやく自分の靴が少々汚れているのに気付いたようだ。

「そんなに気にする事じゃない」

昨日、メルツエルは部屋の物を片づけるのが苦手だとこぼし、そこから話が発展しておれがきれい好きだと自分で吐露してしまった。でも、本当にそんなことは気にしなくなっただけいいのに。そうしたところで無駄なのだから

「ですよー。さつ、先に進みますかー」

そうだ、こいつ自分が傷つくってことがないんだった。メルツエルのポジティブシンカーっぷりは森の宿で話をして分かっていたはずなんだけど。

「ちよつと待って！」

アスルの短い叫びがおれに一步を踏みださせない。が、メルツエルは既に三段階段を下りていた。行動力の高さに脱帽してしまう。

「アスルー、どうしたの？」

「ごめん、ちよつと怖くなっちゃって」

かすかにアスルの肩と背中が震えている。メルツエルはこれに気付いていないのか、笑顔でアスルを見ている。ふむ、冗談の一つでも言ってやれば、アスルもリラックスできるだろう。

「どうした？ こんなさつきまでの高所じゃないだろ？」

「うっん、違うの」

「違う？ 違うってどういうことだよ」

アスルは右手に持ったモンスターボールを大きくして、無言でおれに突きつける。中にはコダックが入っているものはずだ。

「あ？」

「いまから私、その草原の」

踵を返したアスルは視線を問う風に広大な草原に向ける。いや、

彼女の視線は草原を囲う鬱蒼とした森に隣接して広がる背の長い草で形成された草むらに向けられていた。

「そこで生活しているポケモンを捕まえようとしているわ」

「そうだな。それが？」

一つ間を開けて、アスルはゆっくり頷いておれを見つめてきた。
もしかして、睨まれてる？

確かに、仲間にする予定のポケモンを痛めつけて弱らせるってのはためらってしまうところがあるだろう。それに、野生のポケモンのコミュニケーションをも壊してしまう。

これはおれが旅を始めてから知ったが、アスルは二年間ものあいだに言葉やポケモンについて学んでいたはずだから、きっと知っているのかもしれない。

「ポケモンを捕まえるってことは、その子を仲間のポケモン達から奪ってしまうことと同じなのよ？」

「……」

「考えようによつては、自分が戦わせたことからって勝手な都合でポケモンを捕まえる私達は、違法ポケモンハンターと変わりがないわ」
なるほど、倫理的に考えて野生ポケモンを捕獲するってのはどう
いうことだって事が言いたいのか。

アスルの言うことは間違っていない。しかし、これを多くの人間の前で聞かせてやるとどうなるだろうか。

アナトリアという、ポケモンに明るくない（というのはアスルとの会話で分かったが）人々が暮らす地方からやってきた新米のトレーナーごときにそんなことを言われたくはない、と考える奴が多いだろう。

それにアスルの発言は、これまでのトレーナーをはじめとする人間とポケモンの関係に亀裂を走らせてしまうかもしれない。だいたいにして、私達は違法ポケモンハンターと同じ、なんて言ってしまったのがまずい。

正直、おれにはアスルを怒らせないなだめ方が思いつかない。珍

しく仏頂面を浮かべたアスルに、なんて声をかけてやればいい？

「んー、そつかもしれないよね」

この場に似合わないくらい、とても軽い調子でメルツエルが切り出した。

メルツエルが口を開いたからか、それとも彼女が笑顔交じりに自分のもとにやってくるからか、アスルは戸惑いを露わにメルツエルの方を向く。

メルツエルは軽くウインクを飛ばし、右手を胸の高さに持つてきながら人差し指をぴんと立てた。

「でもさ、こう考えられない？ ポケモンに辛い思いをさせるなら捕獲なんてやらない方がいいんじゃないかって考えるんじゃないかって、埋め合わせをしてあげるっていうか」

「埋め合わせ？ それってどういうこと？」

「だから、うーん……アスルはポケモンを捕まえたら、捕まえたポケモンが可哀相だって言いたいんじゃない？」

黙ってアスルは頷き返す。おれは肩にかけている荷物を地面に下ろしておく。女の子同士の会話に水を差さない、それでいて好きなだけ喋ってくれよという絶好のアピールのつもりだ。

「なら、そのポケモンが元いた環境に劣らない場所をアスルが創ってあげればいいじゃないかなー」

「場所を創るって？」

「そのまんまの意味よ。あたしのパートナーは小さい頃から一緒にいるペラップしかいないけど、そう考えるようにしてる」

「でもそんなの、私には出来ない」

「んー、じゃあさ。アスルのコダックはどうやって手持ちに入れたの？」

「それは、ブリーダーの人に融通してもらって……」

そこでアスルは言葉を止める。ここで詳しい話をしてても意味がないと踏んだのだろう。

「コダックだってブリーダーさんとおる程度の交流はあっただろう

し、アスルはそれを引き裂いたってことになる。でも、コダックはアスルが嫌いな態度を見せた？」

「ううん。そんな様子は見たことがないわ」

「だったらアスルはポケモンをリラックスさせてあげられる気持ちを持っていてんだよ。大丈夫。きつと新しく捕まえるポケモンだって、アスルがいい子だって分かってくれるって！」

アスルはじわじわと口元を緩ませ、張りつめていた表情を笑顔に変えていく。なるほど、いい呼び掛けじゃねえか。

「あたしも一緒にそこでポケモンを捕まえるわ。でも、野生のポケモンにボールを投げるのはまだやってない。今は親の受け売りね。ごめんね、ちよつとオチがひどくて。えへへ」

「ううん、ありがとう。メルツエルのおかげでちよつと楽になった」
右手を伸ばして微笑むアスル。メルツエルはすぐにアスルの手をとって、二人はお互いの手を軽く握り合った。

なんだよ、おれよりメルツエルの方がよっぽど頼りになるんじゃないか。そんなことを考えつつ、おれは地面に降ろしていた荷物を肩にかけなおしつつ二人に呼び掛ける。

「よし、お話は終わりみたいだな。階段を下りて用事を済ませちまおう」

階段を降りて草原に出たおれ達は、草むらへと続く境界の近くに立っている。おれは草むらから数メートル離れた場所に立ち、メルツエルは左に、アスルは右に陣取って草むらに立ち入ろうとしていた。

アスルとメルツエルのスーツケースはおれの足元に置かれている。捕獲をするのには邪魔だからといっておれにおしつけることあるまいだろうよ。

メルツエルは既にペラップをボールから出して、自分の体の周り

で羽ばたかせていた。

アスルのコダックも外に出ていて、両手で頭を押さえながら上目づかいでアスルを見上げている。

おれの膝より少し上のあたりまで背が伸びている草むらに先に入ったのはメルツエルだ。彼女の頭上にまとわりつくようにペラップが色とりどりの羽根でもって羽ばたいている。

「ノブオさん、ちょっと聞いていいですかあ？」

こちらを振り向かずにメルツエルが問いをふっかけてきた。

「なんだ？」

「ここのあたりで捕まえられるポケモンって、どんな種類がいました？」

「アサナン種とかノコッチ種とか、後は……ラルトス種とスボミー種だったか。この四種は確かに生息しているぞ」

「よしっ、それならラルトスはいただきっすねえ。ほら、アスルも来てよ！」

メルツエルの言葉でようやくポケモンの捕獲に前向きになれたらしいアスルは、しかし足を動かせないらしい。

無理もない。頭では分かっているもやれないってのはよくあることだ。

「ごめん、いま行く。さあコダック、一緒に行こう」

無言でコダックはアスルの顔を見つめ、露払いをするかのようにアスルの前を歩いていく。こいつもアスルを大事に思ってるんだなさて、どうするかな。もしものがあつたら困るし、おれのポケモンを数匹用意するか。ここにはやたら強い奴はいないはずだから、どいつを出しても問題はな

「音楽サイコー！」

メルツエルのペラップがそんなフレーズを叫んだ。

たぶんこれはおしゃべりという名を冠した技だ。回路動力源から得たエネルギーでもって、覚えた言葉を介して音波攻撃をかますのだ。

ペラップが照準を合わせたのは、おれの視界からでは何も見えな
い草むらの一部分だ。その証拠に草むらの一部分が一度ひしゃげる。
「えっ？ いまペラップが音楽最高って」

「そんなのいいから！ 早く草むらを出るよ！」

ペラップが自分から攻撃を仕掛けたということは、何かしらの敵
意を持った存在がいた可能性が高い。

一メートルも草むらに入っていない二人は自分のポケモンにボー
ルの赤い回収光を当ててから草原に退避する。踵を返してからもう
一度お互いのポケモンを出し、草むらでかさがさと音を立てる存在
に注意を払う。

「ねえノブオ、こっちにくるよ！？」

「わざわざおれたたちの視界不良でアドバンテージを握るってのを放
棄してくれたんだ。ありがたく思っておこうぜ」

「そんなのじゃなくて、ねえ！」

アスルの叫びと、コダツクの自慢のみずでっぽうが草むらの始ま
りを強引にひしゃげたのは殆ど同時だった。

それから間もなく草むらから躍り出たのはラルトスとスポミーだ。
スポミーはみずでっぽうの飛沫を浴びたらしく、くるぶしより少
し高い程度にとても小さな身体 前掛けを想起させる緑と黄緑の
体色と模様が特徴だ に太陽の光を輝かせている。

一方、メルツェルのペラップと相対しているのはラルトス ス
ポミーよりは少し背が高い白い身体をし、緑色の頭部と前後に生え
た赤い角と、身体にくっついていて薄い表皮が裾あまりのロングス
カートのめいて見えるのが特徴だ だ。

野生ポケモン相手にダブルバトル、いいやこれじゃマルチバトル
か。危なくなったらおれが助けてやればいいが、ここは二人に任せ
よう。

「躊躇うなよ。攻撃して弱らせないとこいつらボールに入ってくれ
ねえからな」

「ペラップ、前の敵におしゃべり！」

「全身緑の敵にたいあたりよ！」

二人の返事は技の指示で始まった。いちいち返事を返す余裕なんて誰だってないわな。

ペラッパは再び音楽最高のフレーズを叫び、不可視の音波攻撃をラルトスに向けて繰り出す。

唐突な攻撃故か、ラルトスは悲鳴を上げて草むらの一歩手前まで吹き飛ぶ。

しかし戦闘意欲は失っていないようで、緑の頭部に隠れた赤い瞳を細くしてペラッパに向けて両腕を伸ばしたのが見える。

いっけえ！ とアスルが大声を立てる。スボミーの小さな体に白い光を帯びたコダツクのたいあたりは響くだろう。

だが、スボミーもカウンター気味にしびれごなをばら撒いたようだ。コダツクの周りに黄色の霧みたいなものがぶかぶか浮かんでやがる。

空から悲鳴が聞こえた。恐らくはラルトスのねんりきがペラッパに作用したに違いない。

勢いよくペラッパが地面に叩きつけられるが、攻撃を仕掛けたラルトスは先の一撃でろくに動けないようだ。

目線を右に移せば、ぶるぶる震えるコダツクの傍らに倒れるスボミーも同じくらいに弱ったのが見える。これならいける！

「今っすよね！？」

「そうだ！ アスルもボールを投げておけ！」

おれの言葉を半分も聞かないメルツェルはボールをラルトスにぶつけ、アスルは投球が苦手なのか小走りで距離を詰めながらスボミーにボールをぶつける。

それぞれのボールはそれぞれの捕獲対象に当たり、赤い回収光が捕獲対象の二匹を閉じ込める。

ボールに閉じ込められたポケモンが抵抗してボールを揺らしているのと、そよ風が草を揺らす音をのぞけば、おれ達はこれまでにないほどに押し黙っていた。少し離れたアスルの心臓の音が聞こえる。

そんな気さえ起きてしまう。

しばらく抵抗している様子を見せた二つのボールは、捕獲を完了した事を知らせるように動きを止めた。

アスルとメルツエルはお互いを見つめ、黄色い声を上げつつ抱擁を交わす。

「やったよメルツエル、私達、ちゃんと捕獲できた！」

「そうだね！ アスルのコダックも、私のペラップも凄かった！」
興奮さめ止まぬ様子を見せる二人。びりびり震えているコダックは自分の近くに飛んできたペラップに向けて小さな跳躍を続けている。

あ、こけた。コダックは身体がしびれちまつてるんだから無理はない。だからといってペラップが面白そうに鳴き声をあげなくたっていいだろうに。

「よし。捕獲したモンスターボールを回収しようぜ」

二人はおれに笑顔を向けてから自分のポケモンをボールに仕舞い、捕獲したポケモンを収めたボールを手にとって小さくする。

「この子の居場所、ね」

ぼそりとアスルの声が聞こえる。いつものトーンの声。いつものアスルが帰ってきている。

「ん、アスルどうしたのー？」

「やっぱり抵抗したでしょ？ ほら、ボールを投げて閉じ込めた時に。やっぱりこの子にもメルツエルが捕まえた子にも居場所ってあるんだわ。でも……」

アスルは両腕を青空に向けて突き出し、大きく息を吸って。

「私はこの子に不自由させない！ 今は嫌われても仕方がないわ。でも、いつかきつと、出来れば近いうちに仲良くなる！」

「おっ、その意気よ！ あたしもラルトスと仲良くなるぞっ！」

二人して楽しそうに笑いながら大声を出し合ってる。

きつとこれは十割が二人の思い抱く所ではないはずだ。だが

「宣誓したところで悪いが、早いところこの草原を東に抜けないと、夕方までにヨスガシティに着かないぞ。さっさと行こうぜ」

二人が嬉しそうな声を出して了解の意を示してくれたあたり、おれが気にかけても意味はない。

これから先、アスルが野生ポケモンの捕獲について思い悩むことはないだろう。捕獲の先にある共存や仲間意識を形成することに目を向けてくれたのだから。

よし、ヨスガシティに着いたらメルツェルになにかおごつてやろう。俺が答えたんじゃアスルをどん引きさせちまったかもしれないねえし。うーん、これからもこの旅に付き合ってくれねえかな……

提示 律動を愛でる少女は陰を纏う

ようやくたどり着いたヨスガシティは、夕焼けのどこか物悲しい赤みのかかった黄土色に染まっている。

高さ十階程度はあろうビル群の一面はすっかりと夕日の色に染まり、改めて今日が終わることを確かめさせてくれた。

今晩は雨が降るかもしれない。陰りを見せる大きな雲の塊が地平線の彼方から風に乗ってこちらにやってきている。

右手に大きな噴水を中央に据えた公園を見据えながら歩いていると、メルツェルがアスルの肩を軽く叩いてにっと笑った。

「ねえアスルー、この街ってなんだか綺麗だと思わない？」

「えっ？ うーん、確かにそうかもね。なんというか、清掃がしっかりしている気がする」

言われてみれば、この街のどこにもゴミの類がない。この街の住人全てがきれいな好きなのだろうか。

「凄いやね。この街の北の方にポケモンコンテスト会場があるんだけど知ってる？」

「知らなかったわ。でも、それってヨスガシティがきれいだってことと何か関係があるの？」

「大アリだよ！ コンテストはポケモンに華麗に演技をさせる競技だから、コンテスト会場がある街が汚かったらアレじゃん！」

興奮気味にまくしたてるメルツェル。ははあ、こいつファンか。

「アスルはコンテストって観たことある？」

首を横に振るアスルに、メルツェルは落胆した表情を見せる。まるで、もったいないなあ、なんて言いたげに。

「そうだ。アスルはしばらくヨスガシティにいるんでしょ？」

「うーん……ねえノブオ。どのくらいここにいられるかな。ノブオの事情もあるのよね」

なるほど、そういうことか。おれはナギサシティまでたどり着ければそれで問題はないし、先を急ぐつもりもない。

「四日間だな。その間にスポミーと仲良くしたり、メルツエルと一緒にコンテストでも観たりしたらいい」

視線をメルツエルの方に移す。右手をこちらに突き出し、親指を上立てていた。気の利いた言葉が言えてよかったぜ。

「わかった。それじゃあメルツエル、四日間はここにいることにするわ」

「そう？ それじゃ四日間しか一緒にいられないんだあ」
「なんだって？」

「ああ、ここにおじいちゃんの家があるから。だからあたし、一週間くらいいいようかなって思っただけ。それに調べたいこともあるしね」

「うんうん。しばらく休むのも大事よね」

「だから、今日はここで。明日の八時に迎えに行くから！ おやすみっ！」

メルツエルはおれ達の進む方向から外れていく。待て、ちょっと聞きたいことがあるんだ。

「おい、メルツエル！」

「なんすかあ？」

「八時にあの噴水公園で待ち合せよう。話しておきたいことがある」
「噴水公園、八時っすね。分かりましたよー！」

右手でスーツケースの取っ手を持ち、左手で大きく手を振るメルツエルの姿は、横に伸びる住宅街の方面に消えていった。

「さ、ポケセンに行こうぜ。早いとこ部屋をとっちゃまおう」

「そうね。でもノブオ、メルツエルと何を話したいの？」

アスルに聞かれたくないからわざわざこんな事をしたんだよ
そう返す訳にはいかないから、おれは別にとだけ言っただけで済ますことにした。

追及の手は伸びてこない。アスルには興味がないのか、それとも怒っているのか、おれには分からなかった。

ポケセンの宿泊施設の部屋は確保できた。

アスルはおれと別れる際におやすみと言っていたから、たぶん疲れ切っていたのだろう。

もしかしたらおれを気遣ってくれたのかもしれない。声には出さずにありがとうと呼びかけることにした。

おれはいつもの服装（シャツとジーンズ。今日のシャツの色は黒だ）で、旅行用バッグの中に仕舞ってある小さな肩かけバッグを持つて外に出る。

バッグには財布を仕舞っておいた。メルツエルを呼び出したのは、あの時アスルを説得してくれてありがとうと言ったためである。ジューズの一本くらい奢ってやらねば。

フレンドリイショップに入り、サイコソーダを二つ購入する。

大抵の街にあつて幅広い商品を取り扱うフレンドリイショップは天地がひっくりかえっても存続するんじゃないか　そんなことを考えながら、おれは夜のヨスガシティを歩く。

短い等間隔で設置された街灯が、石畳に落ちるおれの影を二つ三つと増やしていく。昼にはお目にかかれない

フレンドリイショップのマーク（白いナイロンをバックに黒線のモンスターボール。開閉スイッチにFの字がある）がプリントされた袋を揺らさないように歩き、おれは公園にたどり着く。

バックライト付きの背の高い時計台に目をやる。短針は8の一手前に、長針は12を示そうとしていた。言いだしつpegが遅れちゃあシャレにならない。ギリギリ間に合つてよかった。

夜中だからか、公園に人気は感じられない。こういう場所には居場所を求める野生ポケモンが数匹いるのが相場だが、それらの姿は見当たらない。電灯だって結構な数が設置されているにもかかわら

ず、だ。

無害なゴースの一匹でもそこらを漂ってくつろいでいるかと思っ
たが、まあいい。

動力を止められ死んでいる噴水の近くに設置されたベンチに座る。
背もたれの無いものだが、不便さは感じない。

時計台が八時を少し過ぎた時間を示したあとで、メルツエルがわ
びを入れながらこちらにやってきた。

気にしなくていいと返し、おれはメルツエルの様子を見る。

おれ達と別れたきりのままの、灰色のＴシャツにホットパンツの
出で立ちでメルツエルはおれの隣に座るが、その動きがどうもそ
よそしい。

初めておれと顔を合わせたような いや、その時だってとても
明るかったじゃないか。これをメルツエルと呼ぶのはかなりの抵抗
がある。

「おい、何か嫌なことがあったか？ お爺さんと喧嘩でもしたか？」

「えっ？ いいや、そんなことはないっすよ」

こいつも嘘をつくのがとことん苦手らしい。顔が正直なことを話
してしまっている。

「まあいいや。誰にだって言いたくねえことはあるよな」

「それはそうなんすけど……あれ、その袋は？」

「おお、メルツエルにサイコソーダをやるうと思っつてな。あの時の
お礼だよ、一応な」

ナイロン袋からサイコソーダのビンを取り出す。

「あの時って？」

「アスルを説得してくれただろ。ポケモンを捕まえたくないとか言
つてた時だよ」

「全然気にしなくてもよかったっすよ」

つっても口は正直なんだな。躊躇いなくおれからビンをとって
きやがった。

「なあ、頼みがある。おれとアスルの旅についてきてくれないか？」
結局のところ、おれは礼と依頼を伝えたいがためにメルツエルと待ち合わせをした。

断りはしないだろう。旅をするのに友人の一人や二人は伴っていった方がアスルの心の面は落ち着くはずだ。

「いいっすよ」

「そっか、助かるよ」

おれの顔に自然と笑みが浮かぶのが分かる。メルツエルも笑っていた。困り顔で。

「ノブオさんのお話は終わりっすか？」

「ああ、これだけだ。悪かったな、急に呼び出したりして」

「いやいや、なんでもないっすよこんなの。でも、気になることがあつて」

低いトーン。うつむきながら小さな声で尋ねるメルツエル。

「ノブオさんって、三年前に悪い意味で有名だったミヤモト・ノブオなんですか？」

おれは驚かなかつた。こういう問いがメルツエルの口から発せられる予感の前々から抱いていたから。

衝突 黒い雲に隠れた月は涙を流す

「確かにおれはミヤモト・ノブオだ。お前の言うトレーナーと同じ人間だよ」

メルツエルがこんな質問をするのは、何となくだが分かってはいた。

おれが名乗った初対面の時も、アスルとの会話の話題がおれのことと変わった時も、メルツエルはおれを疑っていたはずだ。表情に表れていたじゃないか。

それに情報を掴むのは容易なはずだ。ある程度外の情報を遮断された森の宿のオーナーだっておれのことを知っていた。なら、この街に住むメルツエルがおれのことを知ろうとして出来ない道理がない。インターネットって便利な代物もあるしな。

「やっぱり、そうなんですか」

「だったらどうした。文句の一つでもつけてみるか？」

「はい。出来れば、アスルと一緒にいるのをやめてくれませんか」

怯えが混ざった真剣な面持ちでゆっくり呼びかけられる。怒る気なんて全く湧いちゃいねえのに。

「言いたいことは分かるよ。評判の悪い人間と一緒にいても何の得にもならねえよな」

「それに、アスルはアナトリアでポケモンのことを広めようって頑張ってます。あたしはそれを応援したい」

まあ、まっとうな人間なら誰だってそう言うだろうな。

「アスルからトレーナーとしての経験を多く積むためにノブオさんと一緒に旅をしていることを聞きました。でも……」

「おれみたいな評判の悪い奴がいればアスルにも迷惑がかかるって言いたいんだろ？ 言いたいことははっきり言おうぜ」

メルツエルがはっとした様子でおれを見つめる。

「木の実が沢山入った箱の中に腐った木の実を入れたら、状態の良

い木の実もどんどん腐っていくそうです」

「結構言っじゃねえか」

「あたしは……あたしは、ノブオさんが言われるほどひどい人じゃないって思ってます。でも、他の人がそう思うとは限らない」

そこで言葉が途切れる。明るい性格のメルツエルだって誰かをけなす言葉を言うのは辛いだろう。いや、明るい性格なればこそかもしれない。

メルツエルが今のおれをよく見てくれたのは嬉しい。が、アスルのそばを離れる訳にはいかねえ。

「お前の言いたいことはよく分かるよ。でも、それは出来ねえ相談だ」

しっかりとメルツエルの目を見て言ってやる。おれの矛盾した言葉にメルツエルは少なからず動揺を見せる。感情が、戸惑いが、表情から見えた。

「アスルはおれを必要としているし、おれもアスルが必要なんだ」

「えっ？」

「おれにはどうしてもやりたいことがある。そのためには良い意味で大きく名前を売らなきゃ駄目なんだ」

メルツエルが息をのむ。おれの言いたいことを分かってくれたらしい。

「アナトリアのトレーナーに大きく貢献した人間って肩書きが欲しいのさ、おれは」

「だったらノブオさんは、それだけのためにアスルと一緒にいるんですか？」

「最初はな。でも、いまはそれだけじゃないさ。言葉にしづらいが、それだけじゃない」

「……もしかしたらノブオさん、アスルと友達になりたいんじゃないですか？」

あ？

「アスルは自分の目標のために頑張ってるし、ポケモンを捕まえる

時に躊躇った優しさも持っている。だからあたしは、この子とはずつと一緒にはいられないかもしれないけど、隣にいたいって思いました。ノブオさんもそうなんじゃないですか？」

「そうだな。それが近いかもしれない」

呟くように言っでやると、メルツエルはばつの悪そうな顔を浮かべた。

自分と同じような思いを持っているおれを相手にアスルとは手を切れと言ったのだ、そんな顔をして不思議ではない。

「そうだ、いい考えがある」

メルツエルを見つめていたら一つのアイデアが閃いた。あまりいいものじゃあないと思うが。

「おれがアスルにおれのことを教えるよ。おれ達がアスルを無視して勝手に話を進めてもアレだろ？」

目と口を大きく開いてメルツエルはおれを見つめ、静かに手を打つ。

「いいっすね、それ」

「ヨスガシティにいる間にアスルとは話をつける。アスルがおれと一緒にいたくないって言えば黙って消えるさ」

「本当は、あたし達三人で旅が出来たらいいんですけどね。そうだ、三年前のノブオさんはどうしてトレーナーとして問題のあるこつど

」

ぼつりと上から何かが落ちた。

息もつかせぬ間に、何かはたくさん地面に叩きつけられていく。

雨だ。あの雲が成長してこつちにやってきたのか。

「その話はまた後にしよう。傘持っでねえしな」

「そうっすね。おやすみっす」

メルツエルはそう言っで両手をコダツクのように頭の上に寄せつっ、軽い足取りで公園を後にした。

さて、おれも戻らねえと。もしかしたらアスルが心配しているかもしれないな。

駆け足で公園を出て、北の方面にあるポケモンセンターを息を弾ませて目指す。

雨足が激しくなってきた。コダツクのポーズで雨粒を防ぐのだった意味がない。

街灯に照らされる雨粒が映える夜のヨスガシティをポケセン目指してかけていくと、前方にフレンドリイショップが見える。先にサイソーダを買った所だ。

行きと同じルートを通っているからここに出くわすのはおかしくないんだが、おれの目を引いたのはビニール傘を差したアスルがフレンドリイショップの前で誰かと話していることだった。

店の窓から洩れる照明のお陰で、アスルと話をしている人物が男であるのが分かる。黒の七分に黒のスラックス。あれは誰だ？

「おーい」

おれは二人に呼び掛けながら近づいていく。

「あつ、やっぱり傘持ってたなかった。ほら、これノブオの分ね」

アスルは手に持っていたもう一つのビニール傘をおれに手渡す。傘を差しながら、アスルと話していた男の方を見やる。

瞬間、おれの全身に衝撃が走った。心臓の動きが早まった。目が血走っていくのが分かった。

大きな目に整った鼻と唇。雨にぬれているウェーブのかかった金髪。あの時のあいつだ。おれを、おれを理不尽な目に遭わせた元凶だ。

ざわざわと、おれの全身が粟立つような感覚が走る。ビビるな。前を、前を向け。

「……お前、アキラか」

「おう？ 君はもしかして、ミヤモト・ノブオなのかい？」

愉快そうに笑うアキラ。後ろからアスルが知り合いなの？ と問いかけてくるが無視してやる。そんな生易しいものじゃないし説明が面倒くさい。

「屑は屑なりに元気そうだねえ」

「く、くずう？」

アスルが呆れたような声を出す。お前はいきなり何を言っているんだと言わんばかりに。

心に沸々と湧きあがる怒りが満ちてくる。三年前はこの黒い塊をあたりかまわずぶちまけていた。自分が楽になるために。

今はそれが正しくないことを知っている。おれは両手に力を入れて口を開くことにした。

「どうしてお前がそこにいる」

「僕かい？ 僕はライトニング社の警備部門に入社したんだよ。今はパトロールの最中だから、失礼させてもらうよ」

「パトロール？ お前が？」

「そうだよ。君のような屑が街の人々に危害を及ぼさないようにね」
アキラは踵を返すとそのまま行ってしまった。ライトニング社。

どこかで聞いたような……

「ねえ、今のは知り合い？」

「そうだな。一番顔を合わせたくない奴なんだけどな」

「ひどいよね。ノブオのことを屑呼ばわりするなんて」

「まあな。さ、ポケセンに戻ろうぜ」

生返事だった。アキラはアキラなりにおれを屑呼ばわりする理由がある。

それも含めて、今のうちにおれの過去を明かそうかと思ったが、雨足がさらに強くなってきた。きやがった。

アスルが何かを言うが、あまりよくは聞き取れない。ビニール傘だって役目を果たしているとは言い難い。

走るぞ！ おれはそれだけを叫んで地面を蹴る。アスルもおれの

後ろをついて走る。ポケセンまでは近い。

開幕 カーテンを彩るもの

アスルにおれの過去を話すとメルツェルと約束して翌日、おれは一人でヨスガシティをぶらついていた。

清潔なポケセンの食堂で朝食を共にしたアスルは、あの場に現れたメルツェルと二言三言のやりとりを交わし、二人で街の観光に繰り出していった。

おれは二人と一緒に動くのを辞退した。

気を紛らわせるために散歩に繰り出し、噴水公園へと足を伸ばす。夜の公園とは違い、太陽が顔を見せるこの場所に似つかわしい様相が見て取れる。

無邪気にはしゃぐ子供達と、恐らくは彼らのポケモン達が追いかけてここに興じている。

これを穏やかに見守り、ついでに立ち話をしながら楽しそうにしている大人達。

そこに白シャツに灰色のスラックス、肩には旅行用バッグを提げたおれがベンチに座って紛れ込む。正面数メートル先には衰える様子を見せない噴水が稼働しており、あたりに飛沫を散らしている。

ここでぼうっとしているだけで楽になれる。噴き出し、すぐに地面に落ちる水の流れを目で追っていくのも楽しい。

久しぶりに一人になった。今日は休日だ、たまにはこういう時があっただっていい。

でも、今日の晩にはアスルに話をしないと。あまり愉快な話じゃないが、どんな筋道を立てて話すか考えよう。

ため息をついて空を仰ぐ。昨夜の大雨の後だからか、一片の雲もない青空の中に太陽が光を躍らせている。もう昼が近いのが太陽を見ればよく分かる。

暇だ。いや、そんなことは分か分かり切っていた。そうでなければわざわざフレンドリイショップで新聞とサイコソーダー一本を買わない。

買ったものはバッグの中に入れてある。新聞でも読んで、その後でまたぶらぶらしよ

「ノブオー！ どうしてここにいるの！？」

ご機嫌な声が後ろから聞こえる。振り返るまでもなく、声の主はアスルだと分かる。

身体を左にひねると、アナトリアの民族衣装　大きく厚い、絨毯模様をトレースしたような布地を使った、身体の線を隠すゆつたりとしたものだ　を身につけているアスルが笑顔交じりに手を振ってやつてくるのが見えた。

おっ、いつもは白色の布を頭に巻いているのに、今日は淡い青色だ。他にどんな色の布をストックしているんだろう。

「散歩の休憩だ。メルツエルはどうした？」

「近くにいますよ。呼ぶ？」

「いいよ。これから二人でどこに行くか決めてるか？」

「コンテスト会場だよ。昼から大会があるんだって」

アスルは指を差して目的地がどこにあるかを教えてくれた。知ってるからいいんだけどな。

「楽しんで来いよ」

笑顔（作り笑いを意識したからか、表情筋がぎこちない動きになった）でおれはアスルを見送ってやる。

コンテストの大会か。新聞の広告にあるかもしれない。

そんな考えを巡らせつつ、バッグの中から新聞を取り出す。

買う時に一面を飾った記事の見出し　ライトニング社、クロガネシテイ復興に大きく助力　だけは見ていた。おれは両手に新聞を持って広げ、一面記事を黙読する。

ライトニング社は数年前に立ちあげられた電力会社だ。ソノオタ

ウンの東方に位置する発電所のいくつかは、あの会社の所有物だったはずだ。

記事で初めて知ったが、ライトニング社は警備会社としての一面も備えており、ソノオタウンの治安維持に一役買っているらしい。ソノオタウンを中心に活動を続けるライトニング社は、バリバリ団を名乗る暴力集団によって破壊されたクロガネ炭鉱や博物館の復興を全面的に応援することのこと。

そのための資金提供や警備部隊の派遣なども既に行われている。社長による社会貢献に見せかけた自社のアピールととらえる人間も少なからずいるだろうが、記事が示す支援の規模はとても大きい。それに、通常営業として遠くの街の警備もやってくれるようだ。そうでなければ、アキラがヨスガシティにいる理由が分からん。この街の代表がライトニング社に依頼し、警備の人間が派遣された。アキラはその中の一人だった。こう考えると筋が通る。

奇特定の企業もあるもんだなと物思いにふけりながら、新聞を裏返して番組欄を見る。おれの目当てはこの面の下にある広告欄だ。

「三日でベテラントレーナーになれる方法」

「魔の海峡の秘密を暴く」

「ポケモンと真剣に向き合う秘訣」

本屋に行ってもこんな本は買わない。この広告欄に圧迫された印象のある、それでもそれなりのスペースを確保した広告欄に探したかったものはあった。

「ポケモンコンテスト・エキシビション 会場：ヨスガシティ、ポケモンコンテストスタジアム 入場料：子供1000円、大人1500円」

他にも簡潔に情報が並び、白黒ながらもきれいに枠を飾るレイアウトが、読み手の注意を引くようにできている。

エキシビションは正午からやるようだ。厳密に言えばアスルの言う大会ではない。

出場する人間とポケモン達はあの世界では名前の売れたものばかりのようだから、彼らの演技を見るだけで価値はあるのかもしれない。

それに、この街のポケモンジムのジムリーダーを務めるメリッサも出場するようだ。紫の髪を四つにまとめる奇抜な髪形は今でも忘れていない。

目線を新聞から時計台に移す。あと十分で正午になるようだ。暇だし、おれも行ってみようか。

新聞をバッグに戻し、入れ替わりにサイコソーダのビンを取り出してフタを開け、口をつけながら立ちあがる。

立ち飲みはしちやいけないんだよーなんて青い半ズボンに赤いTシャツの男の子がからかってくるが、大人になったらやっていいんだぜと適当にあしらっておく。

それにあの子供の興味は別のところに向いたようだ。噴水のあたりに空から何かが落ちてきて、それをとりに向かったらしい。

子供が噴水の水たまりに足を突っ込み、急いで退避する。

全身を水にぬらした彼が手に持っていたのは一枚の黒い羽根であった。それも、小さいながらも真珠のようにきらきらと輝く珠がくつついている。

ふと空を見上げる。きれいな青空をバックに、割と低い高度をヤミカラスが間の抜けた高い鳴き声をあげつつ、一人の人物の肩に止まる。

その人物の姿を見れば、身体の細さからして女性らしいことは分かった。

上下を黒のスーツ（下はスカートじゃなくてスラックスだ！）で身を包んでいる。どこの面接に行くんだよと突っ込みたくなる、公園では浮いた格好だ。

女性は黒い羽根を拾った子供をしばらく見つめ、思い出したように歩きだした。

そつだ、おれもそろそろコンテスト会場に行かないと。

ポケセンが左手に見える大通りをしばらく行くと、左手にポケモンコンテスト会場が見える。

背の高いコンクリート（に加工をして黄金色の石らしく見せている）の外壁が円を作り、蓋を閉じるように薄緑色のドームが乗せられている。

その前には石畳の広場が広がっている。そこで有名な歌手がコンサートをやったとしても広さの面では問題がないと思えるくらいの大ささだ。これを囲うように、近くにあるふれあい広場の森が位置している。

前方のポケコン会場からは微かに歓声が響いている。かなり盛り上がっているらしい。

広場で穏やかな時間を過ごすべく集まった人間とポケモンの姿も見える。その中には、公園で見かけた黒スーツの女性も。

この人もコンテスト会場に用があるか、それともゆつくりするために立ち寄ったかのどちらかだろう。

そんなおれの予想は外れた。突如、黒スーツの女性の周りに四人の人間と一匹の黒いポケモンが現れたのだ。

あのポケモンはミオの図書館にて資料で見たことがある。てんたいポケモン、ゴチルゼルだ。

丸い頭部と左右に生えている複数の触覚は、包み紙に包まれたキヤンディを連想させる。ピンク色の顔面と手を持ち、身体には白いリボンの形をしたものがあるが、リボンは触覚だ。

現れた四人の人間も、黒スーツの女性やゴチルゼルと同じように、カジュアルな服装ながらもその色は黒を基調にしている。ごく丁寧に黒い布を使って覆面をしている。

一気に怪しさを増したこの集団を見た人々は困惑した様子を見せ

る。それに加えて謎の集団も動きを見せない。

おれは静かにマニユーラとビードルをボールから出す。奴らが愉快なパフォーマンス集団だって捨てられないが、そんな優しいものじゃないはずだ。

広場にピリピリと緊張した空気が走っていく。誰も動かない。おれも動かない。ただただ、コンテスト会場から時折歓声上がるだけだ。

こいつらの目的は何だ？　ここで愉快的パフォーマンスをしたいなら好きなだけやればいいじゃないか。ナイフ投げの大道芸なら、おれが頭目的のリングを乗せて立ってやってもいいんだぞ。

そんな冗談すら通じなさそうな連中だ。無言で自分の手持ちのポケモンを出している。

ハガネール、ボスゴドラ、ボーマンダにガブリアス、そしてゴチルゼルか。こいつらも穏やかなことをおっぱじめようって雰囲気もない。

おれが唾を飲み込んだ瞬間、後ろの方で轟音が鳴り響く。振り返ると黒い煙が公園のところから上がっているのが見えた。

公園で爆発。爆弾に火がついたというよりは、何かポケモンの技が炸裂して爆発音がしたというのが正しい。でも、ただのポケモンバトルでああまでなるはずがない。

そこまで考えついて、おれは広場に響く悲鳴を聞く。広場に向かって向き直ると、公園の爆発を合図としたようにあの集団のポケモン達が広場で暴れ回っていた。

ボスゴドラが口から白銀の光線を放ち、ボーマンダも口から火炎を放ってあたりのものをぶち壊し始めた。

爆音とともに石畳が焼けたりはじけ飛び、ベンチが灰になり、広場にいた人々は自分のポケモンと共に我先にと逃げ出していく。

相手は強力なポケモンだ。それが凶暴に暴れ回っているのだから、おれだってこの危険な場所から逃げ出したい。

危険からのがれるために、おれも広場を囲う森に姿を潜ませる。
マニユーラとビーダルもおれの後ろにくつついている。

身体が震える。理不尽に展開された破壊活動のせいで、おれの鼓動が否応なしに高まっていく。

ひとしきりの破壊活動が終わった後に女の声が集団から聞こえる。
「さあ、次はコンテスト会場を襲うわよ。全員、ありったけのポケモンを出して襲いなさい」

ラジャ、と短い返答をした四人のカジュアル黒ずくめ集団は残りのポケモンを外に出す。

ビーダルのようにそこらの野生にいるようなポケモンから、ガブリアスのようなあまり目にしないポケモンまでもが、集団を囲うように二十匹が現れた。

見るものを圧倒させる光景だ。おれだってこんな危険な状況から逃げ出したい。

でも、コンテスト会場にはアスルとメルツエルがいる。何も知らない二人をこんな理不尽な目に遭わせて傷つける訳にはいかない。

奴らは全員コンテスト会場を見ている。おれがこの場に残っていることに気付いていない。

身体の震えが止まる。恐れを、勇気が塗りつぶしていく。

「あなたはここで待機なさい。ヒーロー気取りの甘ちゃんがやってきたら容赦なくぶちのめしなさい」

どうやらあの黒スーツ女はこの集団のリーダーらしい。一人を残してそう言った後、残りの三人を伴い先陣を切ってコンテスト会場に走り込んで行った。

この広場に残された黒カジュアルが一人になるのを待ち、おれは森から飛び出す。

「誰だ！」

黒塗りのデニム地の服に黒いジーンズを着た少年が脅しをかけるように喉を震わせる。彼の後ろにはカイリユーとドンファンが凄みを利かせるように立っていた。

「コンテスト会場にはおれの連れがいるんでね。会場をぶち壊すだのなんだの、そういうのは勘弁してくれねえか」

軽口をたたかねえと恐怖にのまれそうになる。勇気を出して奴らに立ち向かうためには自分らしさも必要だ。

「カイリユーははいこうせん、ドンファンはつのでつく攻撃をあのトレーナーにぶつける！」

即座におれは右に駆け出し、はいこうせんの発射音が聞こえると同時に飛びこみ前転をする。

ごう、とおれの背筋を何者かが舐め上げる感覚が走った。自分で自分をほめてやりてえ。なんとって殺されずに済むからな。

だが、ドンファンのつのでつくが本命だったらしい。はいこうせんを避けさせてこっちで殺しにかかったか！

「ビードル、いかりのまえばでドンファンを止めるッ！」

おれの隣にいたビードルは前歯を光り輝くほどに白くしてドンファンにつきたてようとしたが、ドンファンの急ストップで寸前のところで回避されてしまった。

「さがれビードル！ マニユーラも来い！」

おれの召集で二匹がおれの前にやってくる。さあ、早いとこいつらをぶっ飛ばしてコンテスト会場に向かうぞ！

「ここは通さん。そういう命令だ」

「知ってるよ。けどなクソガキ、おれ達を相手にしたのは間違いだつたな」

突破 シンオウのトレーナー、危機に立ち向かう

黒ずくめの集団がコンテスト会場へと駆けていく。奴らは会場前の広場で繰り広げた破壊活動と同じことをするに違いない。

会場にはアスルとメルツエルがいる。中にいる警備の連中が怪しい奴ら（ポケモンをそろそろ連れ歩く黒ずくめの集団だ！）をシャットアウトするだろうが、荷が重いかもしれねえ。

なら、おれが会場の中に行つて、あいつらを助けねえと！

「中にお友達がいるから助けるのか？ ヒーロー気取りは命を落とすぜ」

挑発のつもりか、黒塗りのデニム地の服と黒いジーンズ、そして黒い布で顔を覆う少年が嘲る調子でふっかけてくる。

「うるせえ、さつさとどかねえと痛い目見るぞ」

おれの前で臨戦態勢に入ったマニニューラとビーダルが一瞬だけおれを見る。

その瞳に怯えは映っていない。この場の全てを任せようとする意志しか見受けられなかった。

分かったよ。おれはジムバッジを七つ持つてるトレーナーだ。こんな状況なんて切り抜けて見せる。

「マニニューラ、カイリニューにれいとうパンチ。ビーダルはいつものアレだ」

相対する黒ずくめのカジュアル野郎に聞こえないように小声で指示を出す。

すぐにマニニューラは両手に氷を集めて姿勢を低くする。何もなかった場所から氷を作り出すのも回路のお陰だ。

ビーダルは一つ頷き、目を瞑って姿勢を低くする。よし、これなら何を仕掛けるかは相手は分からねえぞ。

「カイリニュー、マニニューラに流星群！ ドンファンはタイプEだ！」
やっぱり指示の内容を伏せやがったか。

そりゃそうだ、大事な指示は暗号のようにして取り決めておくてのはバツジを何枚かもってりゃ当り前のことだ。

カイリユーが両手を空に向けて突き出して表情を歪ませる。りゅうせいぐんを使うとは、こいつも中々に育てられたポケモンらしい。ガラ空きのカイリユーのどてっ腹に氷の拳を叩きこむべくマニユーラは地を蹴り、瞬時に吸いつくようにカイリユーの懐に入る。

マニユーラのれいとうパンチがカイリユーの腹部に突き立つ。タイプ相性を顧みれば大ダメージは間違いない。カイリユーの大きく開いた目と口、そして悲痛な叫びが証明している。

「くそっ、そこからりゅうせいぐんだ！」

空から飛来する都合十個に及ぶ極小の岩石がマニユーラにぶち当たった音で何も聞こえない。

おれは左手に持ったボールでマニユーラを戻すべく岩が崩れた場所に回収光を打ち込み、陽炎めいて姿をゆらゆらさせるビーダルを見る。

ビーダルに言っていたいつものアレとはかげぶんしんの指示だ。おれのビーダルが持つ特性はたんじゅん。能力の変化が起きた時の効果が普通のポケモンよりも大きい。

その証拠に、かげぶんしんを二回重ねることによって自身の姿を分身めいて相手に見せる現象がおれのビーダルに起きている。おれにも三匹いるビーダルのうちどれが本物か分からない。

「影分身がどうしたってえーっ！ ハッハァー打ち破れ！」

ドンファンは短く跳躍し、衝撃で石畳を噴き上げるほどの着地をする。

やはりじしんか。カイリユーは満身創痍の体をおして十数メートルの飛行を始めて難を逃れていた。

じしんは地下に回路動力源を感知する力を発し、感知後に地中から力を解放、攻撃する技だ。その威力は高く、ろくに対策をしていなければ受け切ったとしてもダメージは大きい。

ドンファンが着地、じしんを仕掛けてから一つ間をおいて。一匹

のビーダルが石畳の爆発とともに宙を舞い、消えた。

ビーダルの分身は単なる外見上のダミーではない。分身一つ一つに回路動力源の影が内包されているのだ。

「なにくそお！」

「よし、なみのりで奴らを仕留めるぞ！」

ビーダルは短く頷き、目を瞑って再び姿勢を低くした。同じタイミングで分身たちも地に伏せる姿勢をとる。

「カイリユー、続けてりゅうせいぐん！ ドンファンは全力で地震をかませ！」

黒ずくめの少年の指示が飛ぶが、ある程度の距離をとった二つのビーダルの像から本物を探すのは容易ではないはずだ。

指示を受けたカイリユーはりゅうせいぐんで片っ端からビーダルの像を攻撃する。またしても上空から極小の岩石が都合十個は降り注ぎ、一つのビーダルの像を石畳もろとも吹き飛ばして消滅させた。ああなれば本物のビーダルにもダメージは通る。石畳が飛び、白煙が立ち昇ってビーダルの姿は見えないが、まだやれるはずだ。

「ビーダル、いけるか！？」

おれの呼び掛けにぐると鳴き声が上がって返ってくると同時に、突如立ち昇った水の柱が白煙を晴らす。

高く上がった水の柱はやがて空中で巨大で平らな水の塊となり、カイリユーとドンファンに向かって慈悲もなく落ちていく。これを回避する手段などない。

水塊はあまりにも巨大で、これが降り注いでいる間は相手側の様子を伺えない。カイリユーとドンファンは地に沈んだか、相手のトレーナーはまだやる気なのか。こんなことも分からない。

ビーダルのなみのり攻撃が止んだ直後、おれはビーダルに短くねぎらいの言葉をかけつつ、右手のボールでビーダルに赤い回收光を打ち込む。

両手に握るボールを小さくしてベルトに吸着させ、大ダメージにより気絶したびしょ濡れのカイリユーとドンファンの間で横たわる

少年を見る。こいつの全身も水で濡れてないところはなかった。

気絶してはいないが、意識は朦朧としているようだ。小さなうめき声が静寂に包まれる広場ではよく聞こえる。

「恨みはねえが眠ってる！」

おれは少年の元に駆け寄り、顔面に右ストレートを叩きこむ。

右手に確かに殴った感覚が走り、少年はぐわっとだけ残して完全に気絶した。

念のために少年のカイリユーとドンファンをボールに回収し、彼のベルトについている小さなモンスターボールも回収する。

計六つの小さなボールを、おれはふれあい広場の森の茂みへと投げた。こうしておけば意識を取り戻しても何もできないだろう。

こんなことをしたおれがまるで悪党のようだと思いながら、これはコンテスト会場を守るため、ひいてはアスルとメルツエルを助けるために仕方がないと言い聞かせた。

コンテスト会場にまだ異変はない。だが、早く駆け付けねばなにが起こるか分からない。

「待ってるよアスル、メルツエル！ 無事でいてくれ」

おれの叫びを途切れさせたのは、コンテスト会場のドームが割れた耳に痛い金属音だった。あの薄緑色のドームはガラスも使っていないらしい。

いや、ドームをぶち壊したということは、演技中の会場内で奴らが暴れ回ってるってことか！？ 警備の連中は何をやっていたんだよ、あっさり突破されてるじゃねえか！

「警備といえど……あのクソ野郎はどうしたんだよ、会社の命令がなきゃこっちに来ねえってのかよ！」

昨日偶然に出会ったアキラが悪態をつきながら、おれは全速力でコンテスト会場へと駆けだした。

破壊快楽論

歓声のない幕切れ

たて続けに何かが壊れる音と悲鳴が響き渡るコンテスト会場のエントランスに、おれは息を切らしながら飛び込んで行く。

息を整えながら辺りを見回す。近くに黒ずくめの連中がいたらまずい。

センサーもガラスも死んだ五つの自動ドアの横には何かを飾っていたらしい台座がある。

こういうところにポケモンの石像を置いてあるのがお決まりだが、台座の上にそんなものはない。ただあるのは、台座の周りに散らばった大きな石の塊だけだ。

きれいに磨かれたコンクリートの床の上には、天井代わりのドームを構成していた建材が床を砕いて沈黙している。

あの黒ずくめの集団の侵入を抑えられなかった警備員たちは、彼らのポケモンと思しきガーディヤらワンリキーとともに意識を失っている。血を流した様子もなく、死んでいるようではない。

おれは三つあるコンテスト会場のドームへの出入り口を見る。

大きな扉は無残に破壊されて消え失せており、今になって大勢の人々が悲鳴を上げつつ出入り口から湧きでてくる。

混乱した人の流れに飲まれないようにおれは動き、アスルとメルツェルの名を大声で叫ぶ。

だが、逃げ惑う人々があげる、頭に響き身体を引き裂くような悲鳴のせいでおれの声すらも耳に入らない。

アスルとメルツェルの無事を確認して、二人を連れて逃げられたらと考えていたが、この見通しは甘かったようだ。

このおびただしい人の流れの中に二人がいればいいのだが、もしかしたら奴らが暴れ回っているらしきドームの中に取り残されているかもしれない。

しばらくの間は人の流れが途切れることはないだろう。おれは歯噛みしながらこれを見届け、途切れると同時にドームへの出入り口を目指して駆け出した。

ドームの中では、やはり黒づくめの連中がいかついポケモンやかわいらしいポケモンに指示を出し、壁や床などところ構わず破壊させている。

四人のカジュアル黒づくめはドームの外壁を囲うように用意された、かつて観客席だった場所に立っている。観客席に囲われているのはもちろん、ポケモンが演技をするフィールドだ。

そこにアスルと、両脚の脛から血を流し横たわるメルツエルがいる。

二人の近くには、黒スーツの女と白色のどでかいドレスに身を包んだ紫髪の女がいた。間違いない。あれはこの街のジムリーダー、メリッサだ。

メリッサはフワライドを外に出し、黒スーツはゴチルゼルを外に出している。メリッサはきつと、ここを破壊している連中を蹴散らすとしたに違いない。

しかし、メリッサの動きを黒スーツが防いでいる、らしい。なら、アスルとメルツエルはどうしてそこに？

「アスル！　メルツエル！　こっちに来い！！」

おれは二人に呼び掛けながらビーダルとエテボースをボールから出す。ここも壁が崩れたりポケモンの技がたてる音で満たされてうるさいが、おれの叫びは二人に聞こえたようだった。

「だめだよノブオ！　メルツエルが怪我をしてるの！」

どうやらメルツエルの怪我は見かけ以上に酷いらしい。もしかしたら他にも怪我をしているところがあるのかもしれない。

アスルとメルツエルも先の人の流れと同じように避難しようとした。が、メルツエルが破壊活動に巻き込まれてしまった　こんなところか。

おれの目的は黒づくめの連中を潰すことじゃなくて、アスルとメルツェルの救出だ。

二人が完全にメリッサと黒スーツの戦闘に巻き込まれない内に、素早くここから脱出しなければ！

「ビーダル、エテボース。協力してあの怪我してる女の子をこっちに連れてきてくれ」

短く二匹は返答し、観覧席を進んで演技フィールドへと近づく。

観覧席と演技フィールドの垣根はさほど深くはなく、より近くで演技を観られるようになっていた。

それ故に怪我をしたメルツェルはあそこに転がり落ちてしまったのかもしれない。

アスルはメルツェルを助けようとしたが、メリッサと黒スーツの女がそこで戦闘を始めてしまい、観客席のところで破壊活動も起きているからうかつに動けないのだろう。おれは演技フィールドに近づく二匹の背中を見ながら考えていた。

そこでおれはある疑問を抱いた。黒づくめの四人のカジュアル共はどうしてビーダルとエテボースを攻撃しない？

もっというなら、奴らはこの襲撃に来ているはずだ。なら、アスルとメルツェルを攻撃してもよいはずなのだが、そうするそぶりさえ見せない。

それに、奴らのポケモン共が楽しんでものをぶっ壊してる。笑ってリーフストームを壁に打ちこむロズレイド、無我夢中になって拳を持って床を砕きまくるカイリキー。なん、なんなんだ、こいつら。案の定、ビーダルとエテボースは一切の妨害を受けることなくメルツェルをおれがいる場所まで運んでくる。この様子を見て安心したのか、アスルも一緒についてきていた。

その一方で、演技フィールドの上でフワライドがゴチルゼルに黒紫の巨大な球を発射、直撃をもらったゴチルゼルが吹き飛び、ゆっくりと起き上がるのが見えた。

どうやらメルツェルは弱いながらも意識はあるようだ。アスルは

顔に傷を作ってしまった、目に涙を湛えてメルツェルとおれを交互に見ている。こんな状況だ、泣くなっていう方が無理だ。

おれはビーダルとエテボースをボールに戻しつつ、おれを見つめるアスルに呼び掛ける。

「二人でメルツェルの肩を担いで外に出よう。急ぐぞ」

頷き返すアスルはメルツェルの右肩を担ぐ。おれは左肩を担ぐことにし、急いでこの場を後にした。

荒れ果てたコンテスト会場前広場に逃げ延びたおれ達はメルツェルを床に降ろした。

両の脛の傷の他に、背中にも大きな打撲痕が見える。応急手当はおれ達では出来ない。ならば早く病院に連れて行かねば。

おれはギャロップを収めたモンスターボールを手に取って中身を外に出す。

「走らず、しかし急いでこの女の子を病院に連れて行ってくれ」

ギャロップは喉を鳴らすように高い鳴き声を上げて答える。

おれとアスルで協力してメルツェルの身体をギャロップの背につぶせにし、ギャロップにおれについてくるように言う。

「ちよつと待って！」

何のつもりか、アスルはおれに静止の声をかけてきた。

「なんだ!？」

「まだ中にはメリッサさんがいるのよ、放っておくなんてできないわ！」

そんなの知ったこっちゃねえよ　間違いなく、二年前までのおれならそのセリフを口にしただろう。

今はアスルの言葉に心を揺さぶられている。おれはそういうのを専門に動く仕事の人間じゃないが、コンテスト会場の破壊を止めねばという思いはある。

「じゃあねえ、分かった。病院はポケセンの横の白い建物だ、頼んだぜ」

アスルの肩にぼんと手を置き、会場に向けて駆け出していく。
果たしておれとメリッサの二人で五人もの人間を、それも破壊に興じている奴らを止められるだろうか　迷うな。やるしかない。

再度コンテスト会場のドーム内に足を踏み入れる。出入り口の所にまで瓦礫が散らばっていて、こけそうになった。

黒スーツの女とメリッサはいい勝負をしているらしい。黒スーツの女はギャロップを、メリッサはゲンガーを繰り出して戦っている。四人の黒カジュアル共も位置を変えてポケモン達に破壊の指示を出している。

壁には穴があき、床はさらに抉られて低くなり、ドーム天井は全壊もいいところだ。

おれは大きく息を吸う。ここで必要なのは、奴らの注意を向けることだ！

「……どらああああーっ！！！」

喉が張り裂けそうだ。おれは右手を喉元にあてがい、静かに息をする。

思惑通り、全ての音が止んだ。壁が崩れる音も、床が崩れる音も、演技フィールドでのポケモンバトルの音も、何も聞こえない。

沈黙が流れる。このあとおれは、何を言えればいい？

「アナタ……さっきもここにきましたね？」

独特のイントネーションの女の声。これはメリッサのものだ。

これには答えず、おれは黒ずくめの連中に言ってる。かつて、自分のポケモンを震え上がらせた怒りの表情を浮かべながら。

「おいお前ら。もういいんじゃないか？　もう十分楽しんだらうよ」

「アナタ、一体何を言って　」

「もう気は済んだだろうが。お縄にかけられねえ内に出てった方がいいぜ」

四人の黒カジュアル共がおれに敵意の視線を向ける。純白のドレスに身を包んでいるメリツサは少々困惑した様子を見せる中、黒スーツの女だけが笑っていた。

「坊や、最高じゃない！ あはは、てつきり『やめろお前ら』なんて言うかと思っただのに『もう十分楽しんだろっよ』って言われるとは思わなかったわ！」

「さっさと出て行けっつてのは共通しているがな。足の遅いライトニング社の警備部隊だつてそろそろこっちに来るだろ」

「気にかけてくれるのね。それとも、まともにやりあっても勝ち目がないって分かっているのかしら」

「お前らをとつ捕まえて社会貢献でもしようと思ったが、おれは馬鹿じゃねえのさ」

黒スーツの女のおれを覗きこむ。視線を外そうと思っても出れない。

おれは彼女を睨む。心の中にある怯えを悟られないように。きつく、強く。

「……さーて、その坊やの言うことを聞いときましよ。捕まるのは嫌ですものねー」

ぱんぱんと手を打ち、四人の部下に呼び掛ける黒スーツの女。上の人間が言うことは絶対なのか、おれに敵意の視線を向けていた奴らはポケモンを仕舞って出入り口から出ていく。

と同時にエントランスホールから四人分の悲鳴が上がった。

まさか、ライトニング社の警備部隊が警察の連中がこっちにやってきたとでもいうのか？ にしちゃタイミングが良すぎるうがよくそつたれ、早く来いってんだ！

後ろから一人の人間が走ってくる足音。正面に注意を払いながら後ろを向くと、白いスラックスに空色のシャツという出で立ちの少年がいた。アキラだ。

「ライトニング社の者だ。そこまでだ、大人しくして投降し」「てめえら、どこで油売ってやがった！」

アキラはパンくずでも見るような目でおれを見つめる。こいつにおれの睨みも怒鳴りも一切効いていない。

「君は黙っていてくれないか。さ、どうする？」

「選択肢はもつと増やしておくとな人生楽しくなるわよ、警備少年」

黒スーツの女は右手に持つボールでギャロップに赤い回収光を撃ちこみ回収、左手のボールを空に掲げる。

「シルバー！ さつさとんずらくわよ！」

「っ！ アナタは逃がさないデスヨ！」

黒スーツの女のボールからはムクホークが現れ、メリツサの指パツチンを合図にゲンガーが自分の身体の前で黒紫色の球体を作り始める。

アキラが血相を変えて演技フィールドへと駆け付け、メリツサのゲンガーが攻撃をしかけるが、黒スーツの女はムクホークの脚に捕まってドームの天井から脱出してしまった。

「……くそっ、あの犯罪者め！！」

「オウ、逃げられてしまいましたネー」

頭に手をやるメリツサ。口調やマイペースな性格がああの仕草から良く分かる。

一方アキラは、観客席の階段を上がりながら額に青筋を立てる様子を見せながら無線で連絡をしていた。

「……了解。ポケモンコンテスト会場近辺の巡回にあたります……破壊快樂論者共が……」

おれの前に立って連絡を切るアキラは、全壊したドームの天井に向けて吐き捨てる。

「また仕事か。ご苦勞なことだ」

「無能な部隊長命令さ。彼が指揮を執っていなければ、奴ら全員を抑えて警察に引き渡せたと思うよ。で、君は？」

「あん？」

「どうしてここにいるのかと聞いているんだよ、屑が」

怒り醒め止まぬ様子で問い詰めるアキラ。

こいつの顔を見るとどうしても襟首を掴んで前後に揺らしたくなる。が、それをぐつとこらえ、おれはアキラを睨み返ししながら言うてやる。

「連れがここにいた。昨日てめえも見た女の子だよ」

「まさか、助けに来たというのかい？ 屑にしてはとても殊勝な心がけじゃないか」

「ほめてくれるってか、ありがとよ。お陰さまで胸くそ悪い気分だしばらく睨みあい、アキラはため息をついてこの場を去った。

奴の背中が見えなくなるまでおれは睨み続け、表情の緊張を解くとともに舌打ちをする。

「オウ、これはなんでしょうネー」

背後からメリツサの声がする。独特のイントネーションと落ち着いた音のある響きの声が否応なくおれのこわばった心をほぐしていく。

「はかいとは、かいらくをうみだす、こついでである？ 字が汚いデスネ、にしても何のことでしょうネー」

メリツサは一枚のメモ紙を手を持ち、その内容を呟いたらしい。

破壊とは快楽を生み出す行為である。頭の中で復唱し、ついさっきアキラが言っていた言葉を思い出す。

破壊快樂論者。ミオの図書館でこれを取り扱った本があった気がする。

明日、あの人に尋ねてみよう。あの人には朝早くじゃないと暇な時間を作れないのは知っている。今日は早く眠っておこう

ヨスガシティ滞在三日目　　楽しみの前に蒙を啓く

ヨスガシティが襲撃を受けたのはポケモンコンテスト会場だけではなかった。

おれが新聞を読んでいた噴水公園も、この街に拠点を構えるポケモンだいすきクラブなる団体の建物も破壊の限りを尽くされていた。捕縛された黒ずくめの連中（彼らは自らをバリバリ団と名乗っていた）が言うには、ヨスガシティの上空に三匹のヤミカラスを飛ばせていたのだという。

三匹はそれぞれ真珠に似せた発信機を持っており、これを無作為にばら撒いた。コンテスト会場以外の襲撃された場所は無作為に選ばれたのだ。

今回現れたバリバリ団は、純粹に破壊を楽しんでいたらしい。破壊活動に巻き込まれた人はともかく、彼らから人やポケモンに危害を加えることはなかったという。

いつもとは趣を異にする白いドレスを着たメリッサとおれは、あの時コンテスト会場のドーム内に居合わせたというだけで警察からの取り調べを受けた。

仕方がないと言えば仕方がないが、おれはともかくとしてメリッサは自分がバリバリ団の活動に一枚噛んでいると思われたのが腹立たしかったのだろう。おれだってそうだ。

取り調べが終わって警察署から出ようとすると、アスルがエントランスホールに用意された黒い椅子に座っていた。

出入り口の自動ドアのガラス越しにきれいな夕焼けが見える。いままでおれを待ってくれていたらしいが、アスルは空に融け込んだ夕日に夢中になっているみたいだ。

「よう」

「あつ、終わったんだ！」

笑顔で立ちあがっておれの前に駆けてくるアスル。絨毯のような柄は違う種類だが、身体のラインを隠す程にゆったりしたベージュ色の服と同色のロングスカートといった出で立ちは変わらない。

「メルツェルの様子はどうなんだ？」

「怪我の方は大丈夫。意識もちゃんとあるし、明日には退院できるって言われたわ」

アスルは出入り口の重いドアを開けて取っ手を持ち、おれが外に出てから手を離れた。

「うーん、やっぱりノブオに警察署って似合うかもしれない」

「ん、何の話だ？」

「だって、ノブオって元がちょっと怖い顔をしてるんだもん」

にこにこしながら言うことじゃねえだろ、それ。

「……勝手に言ってる、くくっ」

だめだ、笑いをこらえられなかった。ホント、こいつおもしろえなあ。

「ねえノブオ。明日、退院祝いでどこかに行こうよ」

「おう。じゃ、言いだしつぺの法則でお前が幹事をやってくれ」

大げさに驚いて動きを止めるアスル。漫画みたいな動きしなかったいいのに。

「なんでノブオがやってくれないの？」

「午前中は用事があるからさ。ああ、ポケセンの中にガイドマップくらいはあるから。じゃ、頑張ってくれよ」

「んーもう、分かったわ。ばっちり計画を立ててやるんだから」

それからおれとアスルは、ポケセンの食堂で適当に夕食を済ませてからお互いの部屋の前で別れた。

アスルは自分の部屋に入る前、正午に噴水公園で待ち合わせるようにと言ってきた。なるほど、既に計画を練り始めたらしい。

感心しつつ、おれがあてがわれた部屋に入って最初に始めたこと。それはベッドに身を沈めることだ。

眠りに落ちる前に確認した時刻は20時ちょうどを示していた。そんな時間に寝たからか、太陽が昇る前に目覚めてしまう。

いや、これでいい。時刻は5時を迎えようとしている。あの人なら既に出かける支度を始めた頃だろう。

白の制服に身を包んだ清掃員がせつせとエントランスホールの床にモップをかけるなか、白シャツと灰色のスラックスに着替えたおれは壁一面に備え付けられた端末に向けて歩く。

テレビ電話によるやり取りを可能とする計六つの液晶モニタに接続された端末のうち、右から二つ目のものを選んで用意されている丸型の椅子に座る。

シャツのポケットに仕舞っていたトレーナーカードを手にもち、端末のカードリーダーに通す。沈黙を守っていたモニタからぷうんと音がして、カードリーダーからおれのカードが排出された。

この端末はトレーナーカードなどの身分証明証を認証させてからタッチパネルモニタの操作が出来る仕組みになっている。面倒くさいと言えばそれまでだが、こんな造りになっているのだから仕方がない。

「電話帳の……よし、スタンバイアイコンはついているな」

おれはタッチパネルの操作を進め、お目当ての人物に向けて呼び出しをかける。

とうるるるる。

とうるるるる。

とうるるるる。

「……ノブオかね。どうした、こんな時間に」

「こんな時間しか暇を作れない貴方もどうかと思いますよ、ナナカマド博士。おはようございます」

そう。おれが話をしたかった相手はナナカマド博士だ。こんな時間だが、寝起きではない証拠に整頓された部屋を背景に白衣に身を

通している。

一度後ろを振り返る。話をしている相手はポケモンの進化についての研究の権威だ。一介のポケモントレーナーが話をしていい相手ではない。誰であれ、こんな場面を見られる訳にはいけない。

「うむ。……今はどこにいるか、聞かせてくれたまえ」

「ヨスガシティです」

「ああ、昨日は大変だったろう」

元から少ないしわを刻んだ強面で通ったナナカマド博士だが、その顔がだんだん陰しくなる。

もしも誰かがこれを見たら心臓に触られたような感覚を覚えるだろうが、おれはもう慣れた。それに、怖い顔をしているからって表情がその通りの意味を持つとは限らない。

「……うむ、用件は手短に頼む」

「破壊快樂論って聞いたことは？」

「ポケモン学の分野からズレているが、耳に入れたことはある」

液晶モニタ上で難しい顔をしたまま、ナナカマド博士は鋭い調子で口を動かす。そんなのだから仲間の研究員にビビられるんだ。

ただでさえ怖い顔してるってのに。

「クロガネとヨスガを襲った連中が破壊快樂論者らしいんです。それで、どんな内容だったかを知りたくて」

「私の友人にそれについて書き著した人物がいる。ケンジ・コバヤシで図書館を探せば、彼の本が見つかるはずだ」

「ケンジ・コバヤシですね。分かりました、ありがとうございます」
数秒頭を下げてから顔を上げ、通話終了のボタンに指を伸ばそうとして

「ノブオ、最近の調子はどうだ。お前も、お前のポケモンも」

「え？」

「今は仲良くやっているのかどうか、聞かせたまえ」

あいかわらず怖い顔をしてこちらを見つめるナナカマド博士。だが、その表情が意味するところをおれは知っている。

「昔とは違いますよ、今は」

「……うむ。嘘つきの目ではないな」

「ありがとうございます。近いうちに顔を出しますので」

「まだ指を動かすでない」

スピーカーから聞こえた言葉には抑止力の欠片もない。だが、おれの身体はぴたりと止まる。

「……いや、詮無きことだ。止めておこう」

一拍おいて、博士の姿と彼の部屋がモニタから消えた。

おれは物心ついてから旅に出るまで、あの部屋をこの目で見ていた。ナナカマド博士に対する淡い憧憬と、アキラと彼につるんでいた奴らへの憎悪を抱きながら。

そのあたりの話をアスルにしなければならない。それも、ヨスガシティを発つ前に。それにメルツェルとの約束でもあるしな。

彼女は今日の１０時に退院する予定だとアスルから聞かされたことを思い出す。そういや、退院のお祝いもやるんだったよな。正午に噴水公園か。楽しみだ。

その前に行かなきゃいけないところがある。ヨスガシティの南にある図書館だ。

おれは小さな肩掛けバッグを携え、見るも無残に破壊された噴水公園の横を通って、独特な外観を持つ目的地の前に立つ。

大きさの違う円柱を下から大きい順に三つ重ねたような外観をしている。

その色合いからバウムクーヘンというお菓子を連想させるからか、出入り口のドアの前にある看板にはバウムクーヘンの絵が描かれていた。

図書館に入ったら、最初にコンピュータを使って本を探すつもりでいた。「著者名：ケンジ・コバヤシ」で検索をかければ一発で出るはずだ。

実際、おれの思惑はあたった。液晶モニタ上に、分類ナンバーと

共に書籍「破壊快楽論　あなたも秘める危険な領域」の画像が表示された。

どす黒い赤をバックに白文字のきちんとしたフォントでタイトルが描かれている。きちんとした学者が書いた本らしい雰囲気はある。分類番号と本の外観を頭に入れ、おれはお目当ての棚を探して図書館内をうろつく。

昨日のことであつてか、外に人があまり出歩いていないのと同じように館内もがらんとしていた。

建物が小さいこともあつて寂しさは感じないが、もう少し人気は欲しいところだ。

三分も経たない内におれの右手は赤黒い本を手にしていた。それなりの厚みがあり、ばらばらと紙をめくると総ページ数は243であるのが分かった。

まだ時刻は11時にもなっていない。今のうちに少しでも読み進めてしまおう。

休息 甘いものを口に含ませて

人間、ポケモンを問わずに存在するものがある。愛情や友情、信頼 そんな素晴らしいものもあるし、同時に醜いものも持ち合わせている。破壊衝動だ。

生きとし生けるものはみな、破壊欲求と破壊衝動を持ち合わせている。

通常、社会に生きる人間はこれを抑制しており、それが故にこの世界は末法めいてはいないのだ。

ポケモンもまた同じで、競技としてのポケモンバトルにこれのほけ口を見いだしていることが多い。

ポケモンを使役する立場にあるトレーナーもまた、戦略や指示を頭の中で巡らせることで破壊衝動を晴らしていることが多い。

故に、世界の平和は保たれている。少なくとも、表面上は。

ヨスガシティの図書館で借りた、ケンジ・コバヤシが書き著した「破壊快樂論 あなたも秘める危険な領域」の前書きを暗唱してみる。

言いたいことは分かる。怒りを抱かない人間などいないし、もっというなら何かを壊したいと思わない人間などいない。

いや、アスルだけは自ら進んで何かを壊したいと思わないイレギュラーかもしれない。そんなことを考えつつ、待ち合わせ場所の噴水公園を目指して歩く。

朝に同じ道を通ったが、こんな大通りでも人氣が少ない。やはり、先日のバリバリ団襲撃事件が尾を引いているようだ。

石畳の一枚もめくれておらず、なにか嫌な予感がするでもないというのに。

思わずため息をついてしまった。外にるのが灰色の作業を着て修復作業にあたる人間と、破壊された場所を興味津々といった様子で見守る野次馬しかいないというのは、やっぱり寂しいものだ。「どうしてこんなきれいな場所を……バリバリ団とかって人たち、次に会ったら許さないんだから！」

野次馬達の中で、金色の短髪の頭の上にスボミーを乗せた女の子が右脚で地面を強く踏んでいた。正義感の強い子らしい。

その子は腕と脚を隠すほどに裾が長く、透き通った青空を思わせる色合いのワンピースを着ている。白のローファーも良いセンスだと思った。

「おーっ、言うねえ。それじゃあたしは怪我の分のお返ししちゃうかなっ！」

ワンピース子の隣には、黒の二ソックスにデニム地のホットパンツと白いＴシャツといった出で立ちの、黒髪が背のあたりまで伸びた女の子が立っていた。

彼女も白の靴を履いているが、あれはウォーキングシューズだ。

活発そうな印象と程よくマッチしてい

「病み上がりの女の子の台詞には聞こえないなあ」

「なによ、アスルだっておっかないこと言ってたわよー」

なに？　じゃあ、この子たちは……

「おーい、アスル！　メルツエル！」

大声で呼びかけてみたら、あの二人は素早くこちらを振り返ってきた。やっぱりか。

「あっ、来た来た！」

「ちわーっす。用事はもう終わったんすか？」

「ああ。そんな大したことじゃない。本を借りてきただけだからお互いに歩み寄って言葉を交わし、おれは驚愕した。

メルツエルの右隣にいるアスルの印象が全然違う。

いつもはアナトリアの民族衣装を着ているのに、今日は淡い青のロングワンピースだ。それに、いつもは隠れていた身体のラインが

ある程度分かってしまつて、なんだか恥ずかしくなつた。

森の宿でメルツエルが叫んだことは本当だったんだ。いや、全く肌の露出がないのにどうしておれが恥ずかしがらなきゃならない！

「あれ、ノブオさん、アスルのどこ見て照れてるんですか？」

「は、はあ！？」

「顔に出る人なんすねえ。ちよつと意外かも」

メルツエルがからかうように笑う。アスルも恥ずかしそうに小さく笑うから、おれは踵を返して二人を見ないことにした。こうでもしないと調子が狂つちまう。

「それよりアスル幹事！ 退院パーティーの予定を教えてください」

「うん。ポケモンだいすきクラブの近くにあるレストランでお昼食べに行くよ」

女の子のチョイスするレストランというと、恐らくはがつりしたものは食べられないだろう。でもいいか、今日はそんな調子じゃない。

「うーん、楽しみねっ」

「よしわかつた、それじゃあ行こうぜ」

「ノブオさん、なんで主賓のあたしより声が楽しそうなんすかあ」

メルツエルがちよっぴり不満そうな声を上げる。いや、ちよつど腹も減つてたから良い話を聞いたなつて思っただけだって。

メルツエルを先頭に、おれとアスルが彼女の後ろをついていく形でヨスガシティを歩いていく。いまだにアスルの頭の上にスポミーが乗っかっているが、彼女なりの狙いがあるのだろう。

街中でも人気は少なく、平穩そのものの景色の中に圧倒的暴力の痕跡が残されていた。

ポケモンだいすきクラブとかいう団体の建物が建てられていた場所は、今では更地も同然の状態だ。周囲にも破壊活動の影響は出ており、近隣の建物の壁が抉れていたり消えていたり、悲惨な光景はおれの眼を捕らえて離さない。

見ているだけで陰惨な気分になるが、おれが笑えているのは隣で話を続けるアスルのお陰だ。

「このワンピースを選んでくれたのはメルツェルなんだけど、それまでは『アスルは胸元バーンってでてるピンクの服着た方がいいよ！』って言い出したんだから！」

「おいおい、それじゃまるで変態親父のセクハラじゃねーか」

「ノブオさんひつどいなあ。あたしはアスルをもっと魅力的にしてあげたいと思ってるんすよ！ いつも色気も何もない服ばかり着て、これじゃいけないって思いませんか？」

「思わねえよ」

「思わないよ」

あ、ハモっちまった。

「ちよつ、なんでそんなところで息合わせるの？ あははっ、おかしくて笑いがとまらっ、へへっ！」

「笑いすぎだつて。ほらほら、そろそろレストランに着くよ。店員さんに変な顔されてもいいの？」

「だめだめ。折角のあたしのパーティーが台無しになっちゃう」

急に凜とした表情を浮かべてこちらを見るメルツェル。だけどまだ口元がぴくぴくしてる。

視線を横に移すと、木目の床に簡単な木枠で囲いを作っている、そんな広めのバルコニーを備えた建物があった。

清潔感のある木製の建物だ。小さな鈴を取り付けた質素なドア。バルコニーに接続する窓ガラスもきちんと磨かれている。アスルはなかなかいいところを選んだようだ。

黒い制服を着た恭しい系目のウェイターは、丁寧な接客態度で店に入ったおれ達を席へと案内した。

ゆっくりした口調でメニュー表を差しだし、御用の際にはお申し付け下さいませ、との言葉と三つの水入りコップをのこして恭しく去っていく。

メルツエルが最初にメニュー表に目を通す。厚めの紙に写真を添えたメニューの紹介が添えられているようだ。

「おっ？ このお店はお菓子しか置いてないの？」

「うん。甘いものは好きかなって思ったんだけど、どう？」

メルツエルはメニュー表を木目のテーブルの上に置き、アスルに向けてサムズアップのサインを出す。

「それじゃ、三号のチョコレートホールケーキに決まりっ」

「私はチョコレートパフェにする。ノブオはどうするの？」

「同じのでいいよ。選ぶのは面倒くさい」

おれにはお菓子の細かい違いなんて分かん。チョコパフェがあるならそれでいい。

アスルはウェイターを呼ぶべく声を張り上げ、やってきたウェイターに注文を告げる。

注文を聞きながらメモを走らせていたウェイターはアスルの口が閉じてから一拍おき、ご会計の際にお持ち下さいと領収証を置いて恭しく持ち場へと去っていった。

品物がやってくるまでアスルとメルツエルは話をするつもりらしい。おれも会話に混ざろうかと思ったが、ガールズトークに首を突っ込むのは野暮というものだ。大人しくあたりを見回すことにする。店内には観葉植物がぼつぼつと置かれており、二匹一組のロゼリアが巡回するように歩いている。ロゼリアのお陰で店内にはアロマ系の良い香りが漂っているようだ。

アスルはロゼリアのペアを見て、頭の上のスボミーを両手に持つて胸の高さに持っていく。

「ねえ、いつかロゼリアになれるように頑張ろうねっ」

当のスボミーは鳴き声の一つも返さない、しかし、アスルはこれでも関係はよくなったと語り出す。

「きのうなんて私がスボミーに触ろうとしたら逃げちゃったんだから」

確かに良い関係を、それも思っていたより早く築き上げているよ

うだ。

「まあ、地道に頑張れよ」

「うん。それでね」

話の矛先がメルツェルに戻ったところで、おれは一つだけ気になっていた場所に目を向ける。

店の真ん中のテーブルに金髪の女性が嬉々としてチョコミントアイスクリームを食している。……あの人、どこかで見たような気がする。背中しか見えないから、誰だか分からない。

雑誌を取つてくると二人に断りを入れてから席を立ち、気になる女性の横を通る。

「はーっ、ここいいわあ。リスト入りに決定ねー」

その声におれの足は金縛りにあつたように動けなくなってしまう。あの時とは色は違うが灰色のロングコートに、きれいな川の流れのような長い金髪。それにあの声。

「……あら、なにか？」

「ああ、なんでも」

おれの全感覚が鐘をうち鳴らしている。おれが背を向け、顔すら見ようとしないこの女性は、間違いなくおれの恩人だ。

「いや、訂正させてほしい」

「えっ？」

脚に力を入れると金縛りが解けた。この人と顔を合わせるのとは辛い、いつかは話がしたいとは思っていた。

右脚を軸にゆっくりバツクターン。眼も鼻も輪郭も、全てがシャープで端正な顔立ちの女性の目を見て、おれはお辞儀をする。

「お久しぶりです、シロナさん。ミヤモト・ノブオです」

「ミヤモト・ノブオ……ああ、久しぶり！」

ここ、シンオウ地方のポケモンリーグのチャンピオンであり、二年前のあの日におれのターニングポイントを作ってくれたシロナさん。まさか、こんな場所で再会できるとは思っていなかった。

「どう？ あれからポケモン達とは良い感じでやってるの？」

「おかげさまで。あの節は本当に、ありがとうございました」

深くお辞儀をする。この人にはいくら頭を下げてても下げきれねえ。あの時に出会わなければ、今のおれは絶対に存在し得ない。恩人の中の恩人だ。

「そんな大げさよ。それより、君に話があるの。時間貰っていいかな」

アスルとメルツェルを見る。二人はとても楽しそうに話を続けていた。

「喜んで。それで、お話というのは？」

シロナさんの向かいのソファーに座りながら尋ねる。

チヨコミントアイスクリームを銀のスプーンで一口だけ口に入れ、幸せそうな顔を浮かべながらシロナさんは続ける。

「きのう、バリバリ団とかいう変な人たちがこの街を襲ったとかいうじゃない」

「ええ」

「それでリーグ協会の方で、景気づけにポケモンバトル大会を開きましようってことになったの。コンテスト会場前の広場を会場として使う予定で、大会告知が明日の朝だったかな。あつ、オフレコでお願いね」

「勿論です。それで　ん、アスル？」

おれの左に空色ロングワンピースを着たアスルがにこにこして立っている。頭の上ではスポミーがゆっくり回っていた。

「ねえ、私たちのチヨコパフェ来たよ」

「わかった。すみませんが、これで失礼します」

シロナさんにお辞儀をして席を立つ。アスルは先に自分のテーブルへと戻っていった。

「そっか。そうそう、メリッサさんね、『ノブオという白シャツの男の子に助けてもらいましたが、あの時にちゃんとお礼できなかったのがもどかしいデース』だって。今朝の会議が終わった後、あたしにそんなことを教えてくれたんだ」

からからと笑うシロナさん。こんなおれにも、そんな表情を向けるだけの価値はあるってことか？

「それと、ちゃんと反省出来たみたいね」

「えっ？」

「ポケモンに優しく出来ない人間が、人間に優しく出来るわけがないもの。さっきのアスルって女の子、君を見てにこにこしていたわ。そういうものなのだろうか。だけど、おれはまだ奴らに対する憎しみを捨て切れていない。あの時おれはシロナさんに全ての過去を喋ったのだから、この程度のことは見抜かれているだろう。」

「二年前に話してくれた君の夢、ちゃんとした形で叶えられたらいいね。応援してる」

「それ、本気で言ってるんですか？」

「大真面目に言ってるわよ。君が私を倒すの、待ってるから」

やはりからからと笑うシロナさん。その笑いにはおれに対する嘲りも侮りも含まれていない。あるのは見る者に勇気と元氣を与えてくれる力だ。

「近いうちに、必ず」

「期待して待つてるわ。それじゃ、またね」

笑顔で小さく手を振ってくれるシロナさん。おれもお辞儀をしてアスル達のテーブルへと戻る。

「ねえノブオ、さっきの人って誰？」

椅子に座るが早いのか、アスルが柄が細く長いスプーンでチョコレートパフェを一口すくいながらこちらを見る。

シロナさんのことは言わない方が良いだろう。明日に発表される大会のこともあるし、なによりシンオウのチャンピオンがこんな所にいると知れ渡ったら大変なことになる。

「知り合いだよ、知り合い」

「へえ、詳しく教えてよ」

詳しく、ねえ。

「近いうちに必ず話すよ。それよりも今は楽しく食事としゃれこも

うぜ」

おれもスプーンを手にパフェのバニラアイスクリームと生クリームをすくい、口に運ぶ。はーっ、美味い。シロナさんがリスト入りが云々と言っていたのも頷ける。

大会前日 準備が十分でないと本番で実力を発揮できない

メルツェルの退院祝いは夜まで続く。これは彼女の祖父が認めてくれたつてのに依るところが多い。

主賓が足に怪我していたこともあり、外を歩き続けることは出来ない。もっぱら屋内で何かして遊んだり、街のベンチに座って休憩がてら談笑などをして、良い雰囲気で時間を過ごせていた。

シメはポケセンのおれの部屋でトランプ遊びに興じることになった。背の小さなポケモンをかわいらしく描いたトランプカード一式をメルツェルが持つていて、最後は皆でババぬきがしたいと彼女が言うつと、

「ねえ、ババぬきってどういう遊びなの？」

青空を思わせる色合いのロングワンピースを着るアスルがおれのベッドの上で足を崩していた。やはり疲れていたか。

メルツェルもおれのベッドの上で座り込んでいる。黒のニーソックスは脛の怪我の痕を隠すためだろうが、デニム地のホットパンツや白のＴシャツと合わせさり、それ以上にかわいらしさを引き出しているように見えた。

「最初は教えながら通してやろうよ。それでいいっすよね？」

「構わない。最後にジョーカーを持つてたら負けっただけだから、それほど難しくはないぞ」

どこか緊張した、それでいてゆるい笑顔でメルツェルから配られるカードを手取るアスル。

椅子に座ってベッドを向くおれの言葉に軽く頷き、身を乗り出してこちらに手札を見せてきた。おれの手札にもアスルの手札にもジョーカーのヨマワルのカードはない。ジョーカーはメルツェルが持つている。あ、やっぱりメルツェルが嫌そうな顔をしている

「最初に、同じ数字のカードを二枚とっておれ達で囲ってる場に捨

てるんだ」

おれもアスルに手札を見せ、その上で5の数字のカードを二枚抜き取ってベッドの上に置いてみせる。

「それが終わったら順番に隣の人のカードを抜き、逆側の人にカードを抜いてもらえばいい」

「うんうん」

「こうやってやり取りして、同じ数字のカードがそろえば捨ててく。最初に手札を失くした奴が勝ちで、最後までジョーカーを持ってる奴が負けるんだ」

「ってことはメルツエルが一番負けに近いんだね！」

そんなこと分かっても言うなよ。

「ババぬきは最後まで何があるか分からないからババぬきなんだよ。なめられちゃ困るなあ」

メルツエルは手札の数字でペアのカードを捨て、準備が整ったことをアピールするように手札のカードを扇めいて動かしている。強がりなのか余裕の表れなのかは分からない。

「それってポケモンバトルみたい。ババぬきが強くなったら、トレーナーとしての腕も上がるかな」

「それはねえよ。はいよ、おれも準備終わったぜ」

一理ある言葉だが、大きくは頷けない。最後に何が起きるか分からないのがポケモンバトルの面白いところってのは否定しないが、ババぬきのような運絡みのゲームとは勝手が違う。

結論から言ってしまうば、一回目のババぬきはおれが負けた。

メルツエルが先にあがってしまったて、おれとアスルがジョーカーのヨマワルをとりかえっこし続けるはめになり、結果としてアスルが先に二枚のカードを捨てたのである。

苦笑いを浮かべながらベッドの上に集められたカード全てを手に取り、整えてからシャッフルをしてやる。

「もう一度やろうぜ。アスル、いま何時？」

「えーっと、もう十二時になるよ」

アスルは壁がけ時計を指さす。

十二時か。シロナさんが言っていた予定通りならば、そろそろア
ナウンスが来るはずだ。

「悪いけどテレビつけてくれないか」

「いいよー」

軽い調子でアスルは頷き、近くに置いていたリモコンに手を伸ば
す。

ちょうど選局していたチャンネルがニュース番組をやっており、
机の向こうに立つ薄い桜色のスーツを着た女性アナウンサーが「次
のニュースはこちらです」と視聴者に告げる。

画面がスタジオから中継映像に変わる。シロナさんが言っていた
通り、ポケモンコンテスト会場前の広場で会場設営の準備が行われ
ている様子がモニタ上で流れている。

テロップとアナウンサーが、シンオウポケモンリーグ協会がヨス
ガシティ復興支援のためのポケモンバトル大会を二日後に開催する
ことと、本日10時から18時までを大会エントリー期限とするこ
とを告げた。

ほどなくして番組は次のニュースを報道する。先日の襲撃事件で
怪我をした人の退院直後にインタビューした映像が流れていた。

ふと、これを不謹慎だとする声も上がるのではないかと考えてし
まう。

バリバリ団を名乗る暴力組織による凄惨たる破壊活動からしばら
くと経たない内に、景気づけのポケモンバトル大会ときたもんだ。
これに否定的な考えを持つ奴が居てもおかしくはない。そう、アス
ルとメルツェルがこれを喜ぶとは限らない。

どんな顔をしてニュースを見てるんだろう。視線を左に移して二
人を見たが、おれの心配は無用のようだ。

「メルツェル、ノブオ、ポケモンバトル大会だって！」

「これは絶対出なきゃ！ ノブオさんも出ますよね！？」

「そうだな。そうとなったらこれでお開きだ」

ベッドの上の二人が不満そうな声を上げる。まあ、分からないでもないが……

「出るからには勝ちたいだろ？」

二人が頷くのを見てから、おれは言葉をまとめるために唸り声を上げ、これをやめた。

「ならおれが指導してやるが、そうなったらこれ以上の夜更かしなんてできねえぞ」

「じゃあこれでお開きってことっすね。今日は楽しかったっす、ありがとね。お先に失礼しまーす」

メルツェルは軽い動きでベッドから降り、10時にポケセン前で待ってることを楽しそうに告げてさっさと部屋を出てしまった。

「それじゃノブオ、私も寝るね。おやすみ」

ゆっくりとベッドから降りるアスル。おれが返事をするアスルは笑って部屋を出ていった。

早く寝るとは言ったが、おれにはまだやらなきゃいけないことがある。

アスル（と、ついでにメルツェル）のポケモンのトレーニングメニューを考えてやらなきゃいけない。

それと、アスルとメルツェルが捕まえた野生のポケモンのことだが……こんな大きな街ならアレに困ることはないだろう。

「ビデオ観賞会？ ポケモンのトレーニングに付き合ってくれるんじゃないの？」

翌日のポケモンバトル大会についての印刷物を両手に持つアスルが不満そうに言ってきた。昨日とは違って今日はいつも通りのアナトリアの民族衣装だ。こっちの方が見ていて落ち着くな。

「ノブオさん、ホントにきちんとした予定なんですか？」

「そう言うな。こういう前準備が必要なんだよ」

おれは両手にポータブルDVDプレイヤーと、ポケセンの二階にあるポケモンバトルフィールドにおける試合を収録した三つのDVDのパッケージを持っている。流石はポケセン、こういうサービスもしっかりしてる。事前予約で大抵のことはどうにかなるもんだ。

アスルにポケセンのおれの部屋を開けてもらい、手早くDVDプレイヤーを備え付けの液晶テレビに接続する。

深夜に一応の予定をまとめておいてはいる。そのせいで寝不足気味だ。

ヨスガポケモンジムで行われている大会エントリーを済ませたあと、ポケセンのおれの部屋で一本のビデオを観る。そのあとは外に出て特訓だ。改めてベッドの上で脚を崩す二人に教えてやる。

しかし二人は未だに「どうしてビデオを観なければいけないのか」と食い下がってくる。うむむ、こう言ってやれば分かるだろうか？
「アスルはスポミーと、メルツエルはラルトスと観るんだぞ。別にこれ、ビデオを観て何か戦術を学ぼうってわけじゃないんだ」

「それってどういうこと？」

「なあアスル、おれの言いたいことが分からないか？」

アスルはボールから出したスポミーを頭に乗せて頷く。まあ、分からなくてもいい。このビデオを観るのは人間ではなくポケモンだ。
「よし、メルツエルもラルトスを出したな」

「ノブオさん、あたしもビデオを観る理由って分からないです」

「んー、このビデオを観る目的は、ポケモンに技の名前と行動を結び付けてもらうことにあるんだ」

膝の上にラルトスに乗せるメルツエルはポンと手をうつ。しかしアスルはコダックのように首をかしげていた。

「そうだな…… スポミーはしびれごなつて技を使えるんだが、いまアスルがこれを指示してもそいつは言うことを聞いてくれると思うか？」

「うっん。だって、私のスポミーはしびれごなは使えるかもしれないけど、指示は理解できない。そっか、そういうことね！」

瞳を輝かせて言うほどのことでもねえんだがなあ。まあ、趣旨を理解してくれたようでありがたい。

天井に取り付けられたカメラで撮影された映像と音声のみが液晶テレビから流れている。

アスルとメルツエルはバツジを多く持つトレーナー同士によるハイレベルな戦いを期待していたようだが、おれが用意してもらったのは二人と同じ程度の実力に近い人たちの戦いだ。

深夜の注文で「スポミーとラルトスが映っているものをお願いします」とはお願いしていたが、都合よくスポミー対ラルトスの構図が観られるとは思っていなかった。

その他にもスポミーとラルトスが戦う試合が収録されているようだ。アスルが「今のがやどりぎのタネだよ」などというのを、おれは窓際の椅子に座って「破壊快楽論」を読みながら聞く。

「ねー、スポミーはちゃんと技覚えられたもんね。はい、しびれごな！　なんてねー」

「おっ。いまのがねんりきっていうんだ。ああ駄目だって今は技を使っちゃダメ！」

「ねねねえ、あたたまのううええでしびれごななつかうのやめてて」

二人の様子がおかしいので見てみると、アスルの頭の上でスポミーがねじれたつぼみから黄色の粉を噴き出し、メルツエルのラルトスがひとりでに浮いてそこら辺を漂っていた。

急いでマニョーラを外に出してスポミーを黙らせるように指示し、おれはテレビの前を漂うラルトスをしっかりと両手で捕まえた。

アスルは身体を震わせつつ、氷漬けになってしまったスポミーを見て震えている手で口を押さえている。

すまんとわびを入れながらラルトスをメルツエルに返し、アスル

が震える手でモンスターボールを手にするのを横取りして赤い回収光を氷漬けのスボミーに撃ちこみ、中に仕舞う。

「あああ、ありがたいがとうとう」

「……メルツエル、二人でアスルの肩を担いでエントランスホールまで行くぞ」

アスルの身体の痺れが取れたのは、モンスターボールに仕舞われたスボミーの治療が終わってからしばらくしてからだった。

それからスボミーを軽く叱ったアスルははつとした表情を浮かべる。何かあったかと尋ねると、

「私、スボミーにきちんとした指示の出し方を教えてないわ」

「ああ、そういえばそうだな。なら、外の特訓の時にきちんと教えてやればいい」

アスルは頭が良いかもしれない。言語センスに長けている以外に、彼女は気付きが良いかもしれない。きっと、ビデオの件は頭がうまく回らなかったのだろう。

そうこうしながらポケセンを出て、ヨスガシティの西側に位置する207番道路に出るためにこの街のゲートへと向かう。

もう時間は正午を過ぎている。肩がけバッグにはフレンドリッシュヨップで買った塩おにぎりと袋詰めのパケモンフーズを入れている。昼飯で困ることはない。

薄緑色の作業着を着た連中とタイプも大きさもてんでばらばらのポケモンたちが噴水公園の修復にあたっているのを横目に、おれ達は歩き続ける。

まっすぐ行くと図書館へ通じる十字路を右に曲がると、一人のハンチング帽を被った中年男性が道行く人々に何かを配っているのが見えた。

やたらでかい灰色のリュックを背負っているが、ありやなんだ？

どうやらティッシュ配りつてわけじゃないようだが

「あ」

「アスル、どうした？」

「明日の大会の参加条件に『参加者はポケモンを三匹手持ちに入れること』だって」

おれに大会のルールだの何だのの概要を記した印刷物を突きつけるアスル。こいつ馬鹿だ。

「あたしは家にもう一匹ポケモンがいるからいいけど……アスル、ちよつとまずいんじゃない？」

「うー、大会本部だって問題があるよ。きちんと参加者のチェックをしたらこんなことにはなあー」

不機嫌そうにため息をつくアスル。うむむ、こんな時にポケモンブリーダーがいればいいんだが。ある程度の強さまでポケモンを育てて誰かに売るってこともやってるはずだし。

「じゃあ、野生ポケモンをもう一匹捕まえる？」

「んー、メルツェルの言うとおり、それしかないかなあ」

そんな会話を続けながらおれ達はゲートに向けて歩きだす。

やはりハンチング帽の、しわの入った人の良さそうな顔をした中年男性。黒の七分にどこにでも売ってそうなジーンズ姿だが両手に数枚の厚い紙を持ちながらこちらにやってきた。

「どうも、よろしくお願いしまーす」

害のなさそうな笑みを浮かべる男性が差し出した名刺をおれが三つ取り、アスルとメルツェルに渡す。

ハヤシ・コウジ。カントー地方マサラタウンにある「ポケモンのためのレクリエーション施設『ポケモン広場』」の施設長。ポケモンブリーダー。小さな名刺にこれだけの情報がぎっしり詰まっている。へえーとアスルが呟くように言い、ねえねえと続ける。

「おじさん、ポケモンブリーダーなの？」

「そうだよ。その名刺の建物の宣伝に来てるんだけど、ブリーダーとしての商売も出来る準備はしてるよ」

なるほど、でかいリュックはそのためにあるってわけか。

「それじゃあポケモン一匹売ってもらえないか。この子が明日の大会に出るんだが、一匹足りなくて困ってる」

「えっ？ ポケモンブリーダーってポケモンを売ったりするの？ それって犯罪行為にならない？」

アスルは周りの人間の顔を見比べながらうろたえている。コウジは怒るんじゃないかなんて思ったが、おれの予想は間違っていたどころか笑ってやがる。

「ブリーダーになるにはきついつい試験とかパスしなきゃならないのさ。違法ポケモンハンターと同じにしてもらったら困るなあ」

「ご、ごめんなさいっ」

「まあまあ気にしない気にしない。それよりお嬢さん、手持ちのポケモンの種名を言ってくれるかな。オススメのポケモンを選ぶのに必要なんだ」

アスルはすぐに返事をして、コウジはあごに手をやり考え込む仕事草をとる。

「ノブオさん、お金の方は大丈夫なんですかね」

「こういうのなら相場は一万円と決まってはいる。アスルが払えないならおれがかわり」

「いやいや、シンオウに宣伝に来てから初めてのお客さんだからね。サービスするよ」

人の良さそうな笑みを絶やさずにリュックの中に手を突っ込むコウジはそんなことを言う。

「え？ それってタダってこと？」

「そうそう。タダでほら、ヤミカラスをプレゼント」

コウジはリュックの中から抜き取ったモンスターボールをアスルに差し出した。なるほど、このチョイスは良いかもしれない。

スポミィはどくとくさの両タイプを有するポケモンだ。それ故に弱点は多いが、ヤミカラスのタイプはあくどひこうである。うまい具合にカバーできるってわけだ。

「もう指示の初期化は終わらせているからね。覚えている技のことは持たせているお手紙を読めば分かるようになってるよ」

「ありがとう！ でも、指示の初期化ってなに？」

ポケモンが指示と技の名を結び付ける作業で、それをやるのにビデオを見てたんだよ。おれはアスルに簡潔に伝え、アスルはどうやら納得してくれたようだ。

「おっ、兄ちゃん博識だなあ。きっと俺よりもポケモンバトルは上手いんだろ？」

「かもですけど、おれはあなたと比べたら劣る所が沢山あります」

「照れるねえ。ま、兄ちゃんにお嬢ちゃん達。明日の大会はしっかりやれよ！」

コウジはおれ達の肩を少し強めに叩いてから上機嫌で街の方へと歩を進めていった。

「ねえノブオ、あのひと良い人だったね」

「でも商売は下手そうですよー。そう思わないっすか？」

「どちらの意見にも賛成だ。さ、特訓に向かうぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1755v/>

Seed 発芽の物語

2011年10月9日03時25分発行